

# ダンまち世界の転移者

慧春

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

一度目の人生をトラックに跳ねられた——そして、始まった主人公の二度目の人生。

だが、両親に名前を呼ばれたとき、自分が『とある漫画の世界』の『とある人物』である事を彼は知った。

その日から始まった二度目の人生は結局後悔にまみれた人生だった——だが、その終わりには悔いはなかった。

しかし、彼の戦いは終わらない——

「妖精世界の憑依者」という二次創作をメインで書いているのですが、最近では展開を修正したりで中々投稿出来ないのです、息抜きにこれを投稿させていただきました。

# 目次

去らば、二度目の世界。 | 1

女神との邂逅 | 15

女神の善意とリヴィラの街 | 25

少年の情景と追跡者 | 41

銀河を射抜け！射手座の電光 | 65

広まる小宇宙、リヴィラの街の死闘！

86

新たなる師弟、ベルの決意 | 107

劍姫の葛藤、牡牛座の絆 | 127

天秤座（ライブラ）起つ——動き出す聖闘

士達 | 153

友との再会——美の女神フレイヤ

182

墓地に満ちる狂気、聖衣に捨てられた男

仮名

214 198

## 去らば、二度目の世界。

四人の少年たちが、躊躇いながら駆け出す——その背中を見送り、感慨深い思いがオレの脳裏を過る。

数年前まで、あんなに小さかった背中が随分と大きく見える。それだけ、多くの闘いを少年達は戦い抜いたという事か……それを考えると、彼等を赤ん坊の頃から知っている身としては堪らなく嬉しく、誇らしい。

しかし、同時に彼等にそれだけ多くの責任を押し付けてしまった事実を思うと、悲しく、己の無力がどうしようもなく情けない。

そして、今尚も、彼等に闘いの最後の——最も重要な『役割』と『責任』を押し付け、オレは『舞台』を降りようとして居る。

己の『役割』を考えれば仕方ないと自分を納得する反面、他に方法はないのか？ と考えてしまう。

だが、今の段階でそんなことを言っても仕方無いことは解っているが、考えざるをえ

ない。

それだけオレは後悔している………ということなのだろう。

十三年前のあの時——『親友』を救えず、この世で最も尊い『幼い女神』をこの手に抱えて逃げるのが精一杯だった。

オレは知っていた筈なのに——友が悪に堕ちてしまう事も………その先に何かあるのかも知っていたのに………それなのにオレは結局何も出来ないままに託すことしかしなかつた。

まったく………最低だな。

そう自嘲する。今のオレの口許にはさぞ渴いた笑みが浮かんでいることだろうな。

今までにも幾度となく自分自身に失望し、絶望してきたが、何時までもそうしている訳にもいかない。

自分自身の中に意識を集中する——そして、己の中にある『宇宙』から力を引っ張り出すイメージで、『小宇宙』<sup>コスム</sup>を燃焼する——

手に握る黄金の弓に同じく黄金の矢をつがえ、引き絞る——

「行くぞ——」

後ろに居る『十一人の黄金の同士達』に向かつて、振り向かずに言う。

自分の背中に十一人の視線が集中するのを感じる。

その視線からは、オレへの信頼に満ちており、そこに一片の曇りも感じられない。中にはオレへは複雑な感情を抱いている者も居るだろうに……なのに、今この瞬間だけは——俺達はたった一つの大きいなる目的のために、一丸となり、その力を会わせようとしている。

それが——オレには何よりも嬉しい。

そう、正面にそびえ立つ『嘆きの壁』を見据えながら、心底思った……

例え、これまでに歩んできた道が間違っていたのだとしても、今オレがここに立ち、仲間達とやろうとしている事は決して間違いなどではないと誇りをもって言える。

そう、全ては……

「地上の愛と——」

『正義の為に!!』

オレの言葉に続くように、後ろから声が響き渡る。

そうだ。このまま、ここで立ち止まっていれば、数時間後には、世界は死の世界になってしまふ。

それだけは駄目だ。

断じて認められない。

この『二度目』を生き返り駆け抜けたこの世界を——女神の愛に包まれた優しい世界は、オレが——オレ達が護る!!

その為に、オレはオレの全てを捧げる。

そして、それは——オレ以外の十一人も、いや、それだけじゃない。先に倒れていった全ての仲間達も同じ気持ちの筈だ!!

『命と魂の全てを注ぎ込んで——』

その思いを込めて、言霊を吐き出す。

そしてオレの小宇宙<sup>コスモ</sup>がかつて無い位に高まっているのを感じる。

不思議と確信がある。今から放つ技は——前世も含めて最高の威力となるだろう。

だが、同時にオレ達の命は——しかし、それと引き換えに活路は開かれる。

あの少年達ならば、必ず……必ずやオレ達の希望を届けてくれるだろう。

この『嘆きの壁』の向こうにある世界——『エリシオン』へと!

『今こそ燃えろ!』

そうだ! 燃えろ!

もつと、もつと燃焼し、エリシオンに囚われた我らが『女神』に届く位に、高まれ——

『黄金の小宇宙<sup>コスモ</sup>よ!!』



『黄道十二星座』………周辺の空間に、オレ達の小宇宙<sup>コスモ</sup>によって、それぞれの十二の守護星座が投影されていく。

それに比例して、オレ達の小宇宙<sup>コスモ</sup>が更に高まる。

もはや、小宇宙<sup>コスモ</sup>だけで見るなら、かつて使用した事のある、三位一体で放つ【影の闘法】すら優に越える。

『この暗黒の世界に——』

そう、ここはまさに地の底………我らが女神の宿敵であり、オレ達聖闘士<sup>セイイント</sup>が戦い続けてきた冥闘士<sup>スベクター</sup>達の『神』が支配する暗黒の世界。

だが、オレ達の纏うこの黄金の聖依<sup>クロス</sup>には、太陽の光が何万年にも渡って蓄積されている。

だから行ける………必ず、オレ達の『光』は目の前に立ち塞がる『嘆きの壁』を破壊し、この先にまで届く!!

『一条の光明を!!』

全力を込めて叫ぶ!!

その言葉が言い終わると同時に、オレは自身の最高の小宇宙<sup>コスモ</sup>をもって構えた矢を放つた——次の瞬間、その場の空間に暖かい太陽の光に包まれた……

そして、自分の全て——文字通り、命と魂の全てを注ぎ込んだオレ達の『光』は………  
見事、神以外を拒絶し、あらゆる物を寄せ付けない嘆きの壁は消滅していく。

オレは、全ての力を捧げた代償で、自分の肉体の消滅を実感していた。

一度死んでいるからだろうか、オレは何故か死に対する恐怖が極端に薄い。

今、この瞬間も、オレは自分自身の死について実感しておきながらも、この場から遠ざかり、オレ達の開いた道を駆け抜けていく少年達の背中を見て、この上なく安堵している。

「頼んだぞ……せい……や………」

『どうか『沙織お嬢さん』を……『アテナ』を任せた——』

その言葉を聞いてくれたのかどうかは解らない。

というか、オレ自身、どこまで言えたのか定かではない。

もしかしたら途中で力尽きてしまったかもしれないし、だが、何故か彼等に届いたとオレの中では確信がある。

ああ、安心だ——



う己の中に眠る異能の力を使い『女神アテナ』を護るために他の神々やその尖兵と闘うという圧倒的王道バトル漫画である。

それが、オレが二度目に生きた世界でもある……

オレはその世界で『黄金聖闘士』——『射手座』の『アイオロス』として生き、弟の『アイオリア』や他の黄金聖闘士達と共にあらゆる戦場を駆け抜けた。

オレは前世で一読者として見た『聖闘士星矢』の知識を使い、オレが知る原作よりも良い未来に持つていこうと努力したが、結局その思いも虚しく、その大部分が原作通りに進んで行った……

オレは闇に堕ちた友も、その弟も救えず、幼いアテナに過酷な運命を背負わせてしまった……そして、同じく未熟で幼い『山羊座』に心の傷を与えてしまった。

彼はオレの事を本当に尊敬してしてくれた。

任務に着く度に、教皇に無理を言つて、仔犬のように後ろを着いてきたっけな。

オレなど『本物のアイオロス』に比べたら全然大したことはない。オレは彼と同じ肉体を持つてはいても、所詮は彼の模倣をしているに過ぎない。

オレに対して隠すことの無い尊敬と情景を向けてくる彼の目は眩しくも、同時に嬉しいものだった。

だからだろうか……オレはこの世界での弟である『アイオリア』と同じように彼——『シユラ』の事も弟のように思っていた。

今でも思う……あの時、悪に堕ちた親友がオレに放った刺客が原作通りだった時に、オレはシユラに『お前も来い』と言っていたら……多分、シユラは着いて来てくれただろう。

だが、オレは原作通りに進めた方が合理的であると判断し、泣きながらオレに事情を尋ねたシユラを突き放した……それ故に彼もまた……

知っていた筈なのに——このまま原作通りに進めば、親友が己の悪の責任を取るために、自ら命を絶つことを——弟が『逆賊の弟』等という謂れの無い汚名を背負わせる事を知っていた筈なのに!!

ああ、オレはなんと愚かなのだろう。

大切な友や弟達を救えず、最期も自分の半分も生きていない少年達に全ての重荷を背負わせてしまった。

やっぱり……後悔だらけだな……

もう一度——もう一度チャンスがほしい。

一度死んで、二度目の人生を得ただけでも既にそれは奇跡……それに、もう一度奇跡が起きたとしても、今度は上手くやれるなどと自惚れるつもりもない。

オレは物語の主人公達のように全てを救うことが出来るほど器用ではないのだからな。

だが、それでも——今度こそは……

.....

.....

.....

「目が覚めたら新しい世界だった……か——そんなことは一度だけと思っていたのだがな」

確かに望んではいたが……実際に起こってみると喜びの感情よりも戸惑いの方が大きい。何とも言えない微妙な気持ちになるな。

そう、オレは目の前にそびえ立つ『巨大な塔』を見上げながら思った。

それにしても、オレは一体何故死んだ筈なのにこんな場所で——人の行き交う広場の  
ような場所に立つてるんだ？

見たところ、身体は『黄金聖闘士』<sup>ゴールドセイント</sup>としての全盛期………嘆きの壁を破壊し、死んだ  
あの時と同じ二十八歳の物だ。

かつての教皇シオンは、人が最も強く美しいのは十八歳の時だと言っていたが、オレ  
の意見は違う。

実際、オレは二十八歳の今の方が、十八歳の時よりも肉体的にも精神的にも強いと断  
言できる。

人の肉体は十代から二十代にかけて急激に成長し、二十代の後半から三十代の前半で  
完成する。

そして、四十を越えると老いて衰えていく。

つまり、二十八歳のオレの肉体は戦士として完成しつつある。

今のオレは間違いなく肉体的、小宇宙的<sup>コスモ</sup>に見ても、十二人の『黄金聖闘士』<sup>ゴールドセイント</sup>の中でも  
最強だろう。

十二人の『黄金聖闘士』<sup>ゴールドセイント</sup>達は皆が皆、最高の聖闘士と呼ばれるに相応しい実力を持つ  
ていたが、オレと同等かと言われたらそれは否だ。無論同じ階位に居るのは間違いない  
が、オレと闘って『千日戦争』<sup>サンサウザンドウオウ</sup>にまで持ち込めるのは親友であった『双子座』<sup>ジエミネ</sup>の

『黄金聖闘士』である『サガ』とそれと同じ実力を持った双子の弟である『カノン』位だろう。あとは同じく『黄金聖闘士』で最も神に近いと呼ばれる『乙女座』のシヤカが実力と相性の問題で辛うじて渡り合えるぐらいだろうか？　と言ったところだ。

いや、全盛期の肉体を取り戻した『天秤座』の老師には流石に勝てる気がしないが聖闘士の中でオレよりも明確に強いのはあの人ぐらいだ。

それ以外は如何に相性が良かろうと、善戦が精一杯だ。これは自惚れではない。厳然たる事実だ。

実際、オレは訓練の中でのはいえ3対1で闘って勝ったことがある。

最もあの時、オレとサガ以外の『黄金聖闘士』は皆、年齢一桁だったけどな。

皆、成長していたので、流石に今3対1ではもう勝てないだろうが、二人同時ぐらいなら相手取れる自信がある。

見たところ、今のオレは肉体的にも精神的にも万全の状態だ。

嘆きの壁を破壊するために、原作と同じく、命と魂の全てを燃やして『小宇宙』を高め、その代償としてオレは死んだ筈なのに、今のオレは傷一つない。おまけに背中には『射手座』の黄金聖衣が入ったパンドラボックスを背負っている。

ここまで来ると不思議を通り越して不自然だ……

何でオレは生きている？



それも、二度目の肉体を持って………てつきり、また別の異世界に転生したものとばかり思っていたが、実はここはあの聖闘士星矢の世界なのか？

周りを見た感じでは、建造物は西洋風………それも、かなり古い町並みだ。

だが、あんな巨大な建造物をオレは知らない。あんなものがあつたら、観光名所としてそれなりに有名になりそうな物だが………

それに、町並みは兎も角、あの塔はそれなりに新しい物のように感じる。

もしかして、オレはタイムスリップでもしたのか？

ここは、聖闘士星矢の世界の過去だったりするのか………

そう一瞬頭を過つたが辺りを再び見渡し、この住民と思わしき者達を見て、そんな過去の世界であるという考えは吹っ飛び、ここは異世界だと確信した。

「猫耳にエルフ………っだとい！」

四人組の見目麗しい少女達が、ウエイトレスのような服を着て、仲が良さげに話しながら歩いていった。

四人の内、一人は見たところ普通の人間だが、他の三人は二人が猫耳で、もう一人は耳が長く、全体的にほっそりとしたスレンダーな体型。間違いなくエルフだ。

「なんと………『理想郷』<sup>エリシオン</sup>とはここにあつたのか………っ！」

端的に言うとう物凄い好みのタイプだった。外見的にはどストライク——思わず、訳の

解らん事を呟いてしまう程度には衝撃的だった。

とは言え、今のオレは傍目から見たら、デカイ金の箱を背負ったみすばらしい服装のオッサンだ。余り見すぎたら不審者と勘違いされてしまう。

オレはこのまま視線で追いかけていたいという気持ちを振り払い、視線を再び前に……巨大な塔に向ける。

「行ってみるか……」

オレはこの世界でも、再び闘争に身を置くことになるだろう。

オレの『黄金聖闘士』ゴールドセイラントとして培ってきた直感がそう教えてくれる……

「だが、それで構わん。世界が変わろうとオレは進み続けるしかないのだからな」

それが——

「オレがこれまで歩んできた道のりの証明にもなる……そうだろう？ 友よ……女神よ……」

オレはまだこの新しい世界について何も知らない。

ここが何処かも解らず、自分の今の状況すらもよく解らない。

だが、それでもオレはこの新しい世界での最初の一步を踏み出した——

## 女神との邂逅

『セイント聖闘士』——それは、女神アテナに仕える戦士達の総称だ。

神話の時代から、冥王ハーデスや海王ポセイドン等の地上の支配を目論む神々と戦う為に、女神アテナは自ら人の身として地上に生まれ落ち、邪悪な神々と幾度となく激戦を繰り広げてきた。

そして、そんな女神アテナのもとに集う戦士達は、武器を嫌う彼女の為に星座を象つたクロス聖衣と呼ばれる鎧のみを着て、素手で彼女の為……地上の愛と正義の為に闘つたという。

曰く——その拳は大地を砕き、蹴りは天を裂くと言われた。

そして、そんな『セイント聖闘士』達の中でも最高の力を持つ者は、黄道十二星を象る黄金に輝く聖衣を与えられ、『サンクチュアリ聖域』の女神の住居である十二宮の守護を任される。

彼等十二人は『セイント聖闘士』の中でも隔絶した力を持ち、人智を越えた力量と圧倒的な『コスモ小宇宙』を持つ——それが『ゴールドセイント黄金聖闘士』

そんな黄金聖闘士が一人……彼は今、射手座を象つたと思われるレリーフが描かれた黄金の箱を背負いながら、天を仰いでいた……

「ハア……………」

賑やかな西洋を思わせる町並みを歩きながら、途方に暮れるように溜め息を吐いた。

彼の名前は『アイオロス』——かつて、最強の聖闘士と謳われた男だ。

「異世界……というのは想像できたがな」

——まさか、地球ですら無いとは、本当にまいったな。

彼の口から、そんな言葉が漏れる。

そう、彼は自分がそれまで生きていた世界とは別の世界に來たという事については、彼自身が転生者である事から何となく理解していたが、流星に地球ですら無いとは思わず、戸惑いを隠せなかった。

まあ、彼が最初に生きた世界では世界観そのものが違う創作物などありふれていたし、彼も幾らかは見たことがあるので比較的簡単に受け入れてはいる。

しかし、世界観が違えば、当然言葉や文化、常識等も違うわけであるから、慣れるまでにはまだ時間がかかりそうだ。

『迷宮都市オラリオにダンジョン……下界に降りてきた神々に、その眷属か……』  
ファミリア

彼は、先程足を運んだバベルという塔の受付で受けた説明を思い出しながら、感慨深

げに呟いた。

（この先、一体どうしたものか……取り合えず生きてはいる以上は聖域に帰還せねばなるまい。だが、現状はその方法が全く解らない——）

そうだ。アイオロスは、死んだ筈の自分が何故、こんな見知らぬ世界で、再び生を受けたのか、その理由が全く解らず、また聖闘士としては真つ先に元居た世界に——アテナや他の聖闘士達がいる聖域に帰還するべきだと考えるが、現状その方法が全く当てずらないのだ。

（『ダンジョン』とか言う場所や自身の存在を昇華するという『神の恩恵』<sup>フェルナ</sup>とやらに興味が無い訳ではないが……）

己の力がより強力になるというのは、強さを求める彼からしたら魅力的ではあるのだが、如何せん、話を聞く限りでは恩恵とは、その名の通り、どうやら神の加護のような物らしい。

他の聖闘士の多くがそうであるように女神アテナに絶対の忠誠を誓うアイオロスからしたら、彼女以外の神に加護を受け取るとは二君に仕えるに等しいのだ。

なので、彼の中では神の恩恵を受けるといふ選択肢はない。

しかし、悲しいが今のアイオロスは異世界に転移したことによって一文無しとなっている。



エネルギーを小宇宙を介して上手く操作すれば特に問題ない。

だが、一晩中町を彷徨くわけにもいかなないので休める場所を探すの速いほど良い。

そう、自らの行動方針を定めたアイオロスはふと上を見上げる——そこにあつたのは、一面の夜空とそこに浮かぶ星の光だった。

屋外であることと、この世界には電気の光が無いため、このような町中でもハッキリと見える。

流石に異世界であるため、ハッキリ見えても自分の知る星座は一つも無い——そこに残念と思わなくもないが、自分の知らない星を眺めるもの新鮮で悪くないとアイオロスは思った。

「そう言えば、アイツ等は一体どうなったのだろうか……」

アイオロスは、夜空に輝く星を見て、自分と共に闘った仲間達を思い浮かべた。

十一人の『黄金聖闘士』<sup>ゴールドセイラント</sup>やある意味では弟子に等しく、最後には全てを託した『青銅聖闘士』<sup>ブロンズセイラント</sup>の少年達……

彼の知っている原作通りに事が進んだならば、『青銅聖闘士』<sup>ブロンズセイラント</sup>の少年達はハーデスに勝った筈だ。

いや、彼は少年達を信じているので勝ったどうかという点には一切疑問を抱いていない。

アイオロスが最も疑問に思っていること——それは、自分以外の『黄金聖闘士』<sup>ゴールドセイント</sup>達の行方である。

本来、死んだ『聖闘士』<sup>セイント</sup>のいく末は、冥界と決まっていたが、冥界はハーデスの死後消滅したはずである。

ならば、天界か——とも思うが、確信はない。

それに、自分という例がある以上、どうしても思ってしまう。彼等もまた自分のようにこの世界に来ているのではないか？ と。

「まあ、それは追いつ追いつ調べるとするか——まずは寝床だ……」

そう言いながら、町の中を歩いていくが、無一文のアイオロスが泊まれるところなど限られてくる。

先ず、泊まるために料金の発生する旅館などは全滅である。

となると、金が要らず、尚且つ寝床にするに辺り誰にも迷惑の掛からない場所……人の寄り付かない屋根のある廃墟などがベストだなと結論付けて、そんな都合の良さそうな場所を探すべく、裏道などを歩く……

「お〜い！ ベルく〜ん!! きゃわ!!」

「ムッ?」

角を曲がったところで、突然、アイオロスの目の前に少女が飛び出してきて、彼にぶ



つかりそうになったが、アイオロスはつい癖で『光速（マツハ90万弱）』の速度で華麗に避けた。

しかし、少女は、彼に衝突することを避けるために無理な動きをしようとして、背中から転倒しようとしていた。

だが――

「へ？ あれ？」

——当然、女子供が目の前で転ぼうとしているのを、何もせず見て見ぬふりをするアイオロスではなく、彼女の身体は地面に落ちる寸前に彼に抱き止められていた。

「すまない。大丈夫か？」

「え、あ、うん。ボクは大丈夫だよ」

少女は、直前まで転ぶ筈が、今は見知らぬ男に抱き締められているという現実を認識し、戸惑いと羞恥で顔を僅かに赤らめながらアイオロスの問いに答えた。

一方でアイオロスも、自分のせいで幼い少女が傷付かずすんで安心すると同じに、彼女の中に内包された巨大な『小宇宙』を感じ取り驚いていた……

（何だ、この巨大な『小宇宙』は……明らかに俺以上――）

この巨大でどこか清涼さを感じさせる『小宇宙』……彼の知るアテナやハーデスに比べれば少し劣るが、これは紛れもない神の『小宇宙』！

彼は悟った。目の前に居る少女の姿をした何者かが『女神』である——と。

こうして、眷属思いの『優しい女神』と射手座の『黄金聖闘士』ゴールドセイントが邂逅を果たした……この出会いが、彼に何をもたらすのか——それはまだ本人達すらも解らなかつた。

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

アイオロスが天を仰いでいた同時刻——彼が立ち寄つたギルドが管理する五十階建ての建物『バベル』の地下深くに広がるダンジョンでは、一人の黄金の鎧を纏つた男が巨大なモンスターと対峙していた……

『ブラアア！』

奇声を挙げながら飛び掛ってくる巨体のモンスター『階層主』モンスターレックスと呼ばれる怪物——『ゴライオス』を前にしても男は一切動じない。

否——冒険者の大半を占める下級冒険者ならば聴いただけで震え上がるほどの怒声を前にしてもむしろ余裕そうですらあつた。

それもその筈だ——彼は、こことは違う世界で幾度となくこれ以上の怪物と——或い

は『神』と対峙してきたのだから——

その男は武人だった——それ故にその生涯において闘い続けた。

その男は求道者だった——それ故に常に己の限界を越えることを念頭に置き、強さを求め続けた。

そして、何よりもその男は『聖闘士』だった——八十八の星座を冠する聖闘士達の頂点……十二人の『黄金聖闘士』が一角。

それ故に——この程度の怪物の攻撃程度怖れるに足らず。

「ぬるい！」

ただ一言、そう言いながら片手を天に掲げ——降り下ろす！

聖闘士の最高速……光速を持って振るわれた手刀はまさに『聖剣』を思わせる切れ味で容易くモンスターの肉体を紙のように切り裂き、縦に切り裂かれた肉体は綺麗に断られた断面を覗かせながら左右に倒れる。

「我が四肢は既に聖剣へと至った——しかし、未だ『あの男』の次元には至らず……か」

口調こそ残念そうな響きだが、その顔には微かだが笑みが浮かんでいた。

そう、彼は尊敬し、情景の人物が自分自身の未だに辿り着いていない次元に……己の一步も二歩も先に居るということが嬉しくて仕方ない。それでこそ追い付きがいがあ  
るものだと……

彼を知る人物なら間違いなくそれを悟り、呆れた声を漏らすだろう。『あれに追い付こうとするなどどうかしてる』と――

だが、彼はそれで良かった。目指す高みは高いほど良い。

そもそも、『双子座』と並んで規格外の存在であるあの男も、自分と同じ『黄金聖闘士』なのだ。

ならば、彼に出来て自分に出来ない筈はない。

彼には何故自分が二度目――いや、冥王に与えられた仮初めの命も含めれば三度目の生をこのような場所で受けたのか……それは解らない。

しかし、生きるための目標は彼の心に刻み付けられている。

「俺はこの三度目の生で貴方を……越える!!」

胸に決意を秘め、『黄金聖闘士』――『山羊座』のシユラは十八階層に足を踏み入れた。

彼の聖剣を超越するための闘いはまだ始まったばかりであった……そして、彼は『楽園』と呼ばれるそこで、かつての仲間と再開することになるのだが、それは別の話だ。

## 女神の善意とリヴィラの街

「それでね、ベル君と来たら！　ボクというものが在りながら『ヴァレン某』とかいう、どこぞの馬の骨とも解らないような……あゝッ！　納得いかない!!」

「あ、ああ……そう、なのですか？」

「そうだと！　大体何でよりにもよって『ロキ』の所の冒険者なんかに行く！」

「ロキ？　それは幾らか街で噂を聞きましたね。有名なところなのですか？」

『ロキ』……そう聞いてオレの頭を過るのは、北歐神話の『悪神ロキ』だが……こちらの世界ではかなり大きなファミリアとかいう組織の旗頭であり、なんと『女神』らしい。うん、意味解らん……普通ロキと言えば男神な筈だよな。なんで女体化してるんだ？

それとも、やはりオレの知るロキとは名前が同じなだけの別人（神）なのか？

「うん……悔しいけど『ロキ・ファミリア』は、フレイヤの所と並んでこのオラリオで最強のファミリアの一つだよ——て、あれ？　アイオロス君は知らないのかい？　結構有

名な話だと思っけど……」

「田舎暮らしだったものでして……世間知らずなんです」

「……ふん？ まあ、嘘ではないらしいけど……」

おっと、神に嘘は通じない……だったか？

まあ、さっきの田舎暮らしというのも、別に嘘ではないし（青春の大半を山籠りなどで消費した）、世間知らずというのも、この世界については来たばかりなので何も知らないの間違っていない。

だが、流石に何か隠したことぐらひは気付かれたか……どのような純真そうな見た目をしていても『神』は『神』だ。出来るだけ発言には気を付けなければな。

「よつとッ！ 着いたよ!! ここがボクのファミリア——『ヘスティア・ファミリア』の本拠地だよ！」

「こ、これは……!」

女神ヘスティアに案内され、路地裏を進むこと数分——今、俺の目の前にかなり年季の入った外観の教会があつた……

というか、ハッキリ言つてボロい。兎に角、ボロい。

「……中々にシックな教会ですね。なんというか……一目で貴女達の生活レベルが解る外観です……」

「う……た、たしかにパツと見はこんなんだけど、中身は中々なんだよ!」

『地下が在って、基本はそこで生活してるのさ!』と自慢気に無駄にたわわな胸を張りながらそう言ってくる『神様』を見ると『貧困なんかに負けないぜ!』という健気さと、そんな状態にも関わらず『得たいの知れない』俺なんかを招き入れて泊めてくれる献身さと優しさに涙しそうになる。

俺の世界の神もこんな感じで、自分の事よりも眷属や他人のことを思いやれる素晴らしい『神格者』ならば、あんな地上を賭けた闘争など起こらなかつたんだろが、悲しいことにそんな神は俺の知る限りでは『我が女神』ぐらいだった……

「それに、ベル君も頑張ってくれてるしね! そう遠くない内にこんな生活ともオサラバさせてくれる筈だよ!!」

前言撤回……言ってることが完全にヒモのそれだ。

まあ、話を聞いた限りでは、本人（本神?）も芋売りなんてとてもではないが『神のやることではないバイト』で生活費の稼ぎに貢献しているらしいので、世の寄生者 Parasite共に比べれば大分……いや、比べることすら烏滸がましい程だろう。

「そうですか、私からは頑張ってくれなどという陳腐な応援しかできませんが……」

「う、兎に角、こんな所でよければだけど、何時までだって居てくれても良いからね?」  
「その事なのだが……女神ヘステイア様」

「なんだい？ あと、そんな畏まった口の聞き方じゃなくて良いぜ？ ボクは気にしな  
うよ」

「そうですか……でも、私の癖みたいなもので——それでですが」

そう、幼い頃から『聖闘士』として厳しい教養を積んできた身としては、別に『悪神』  
でもない『神』に対して、そんな畏れ多い真似は出来ないと俺が勝手に思っているだけ  
なのだ。

そんなことを思いながら、俺は質問を続けようと口を開く——

「何故、自分のような得たいの知れない人間を自らの居城に招き入れて下さり、尚且つ、  
これ程までに過剰な信頼を？」

「ん？ ボク自身が信用できそうだなって判断したからだけど？」

「ですから、それは何故？ 私はさつき会ったばかりの通りすがりの人間ではないです  
か……」

「それでもボクは……『神』だよ？」

「!？」

「信用できる者とそうでない者との違いくらいは解るつもりだよ。そのボクの直感が君  
を『悪い子供』じゃないって判断したんだよ。確かに君は『秘密』が多そうだけど……」

「甘い……ですね……」



女神へスティアの言葉を聞き、彼女の思いを知ったオレの口から出たのはそんな言葉だった。

何故、オレがこんな言葉を言ったのか……それは、解らない。冷静に考えると、こんなことを言つて女神の不況を買おうモノならば、オレは折角の寢床を失うことになるのだが、それ以上に何故か言わなければいけない気がした……人間が神に対して言うような言葉では談じてない。直ぐにでも非礼を詫びなければいけない。そう思い至つた。

だが、そんなオレの非礼の言葉に対して彼女は――

「うん。自覚はあるよ。でも、これもボクが自分で決めたことだよ。これで、もし何かあつてもボクは後悔しないし、君を恨みも憎みもしないよ……結局はボクの自己満足だしね……」

「――ツ!？」

「それに君は――傷付いた子供みたいだから、放つておけないよ」

オレはどこまでも誠実な言葉と善意に、今度こそ絶句した――

つい、彼女から目を背け、顔を俯くように足元を見ると、そこには水滴で濡れた地面があつた。

雨か? いや、先程から雨など降っていない……そもそも、山籠りの長いオレは、雨雲が近づくと空気の湿りや気配で何となく解る。そのオレが降るまで気付かない等と

いうことがある筈が……

「あ、アイオロス君!? 泣いているのかい?」

慌てて、目元を見ると右目から——次から次に雫が溢れるように頬を伝って地面に落ちていた。

驚いた……自分にもまだ涙を流せるような人間性が有ったとは……とつくに枯れ果てたと思っていたのだがな。

オレは気が付いたら自然と膝を折っていた。

そして、地面に拳を当てて膝まずき、目の前の小さな神に頭を垂れる——

「我が忠誠は既に女神アテナに捧げております。それ故に私は貴女のファミリアには成れない——」

そう、オレはとつくに『セイント聖闘士』として、アテナに忠誠を誓っているのだ。

一時は聖サンクチュアリ域において逆賊の汚名を着せられたが、それでもオレは全聖闘士の模範となるべき『ゴールドセイント黄金聖闘士』である。そのオレが如何に恩があれどそう簡単に頭を垂れるなど許される事ではないだろう。

だが、やらずには居られない。

「ですが、私は貴女に深い感謝を抱いております。故にこの世界に関して無知蒙昧なこの身ではありませんが、可能な限り貴女のために尽くしましょう——女神ヘスティアよ」

. . . . .  
 . . . . .  
 . . . . .  
 . . . . .

「異世界……それに聖闘士セイントか……」

へスティアは、蠟燭の灯りが消えた暗い室内で一人、先程『彼』から聞いた言葉を呟いた……

彼女の最愛の『眷族』かぞくであり、唯一のファミリアの団員でもあるヒューマン——『ベル・クラネル』は既にダンジョンから帰還しており、大した怪我もなく安堵したのも束の間——そこで、彼には暫くここで下宿する事になった彼を紹介し、スティタスの更新を行った。

相変わらず並みでは考えられないぶっ飛んだ上昇率だったが、もう完全に慣れてしまいい、そのまま三人で夕食を取ったのだが——その席で新たな教会の住人となったアイオロスが『もはや、ここまで世話になった貴女に対して隠し事はすまい……』と言って彼は自身の事について話してくれたのだが……

「ハア、流石に予想外すぎるよお……」

そう。彼には何かあるとは思っていた。

その態度とどこか浮世絵離れた佇まい、それに戦闘に疎い自分でも一目で『強い』と解るほどの『何か』を持つているアイオロスに対して彼女は当初は微妙かとはいえ疑いと警戒を持って接していたのだが、幾らか言葉を交わす内にその二つは完全に霧散し、彼が何かに傷付いている下界の子供であると判断した。

そして、何か明かせないことが在るという事も含めて自分が面倒を見ようとしたのだが、その内容が完全に彼女の予想を越えていた。

この世界とは全く違う『ちきゆう』と言う世界に、強大な力を持った『神々』……そして、女神アテナと共に地上の愛と正義の為に戦う気高い聖闘士——『聖闘士』の存在。武器を嫌う女神のために『恩恵』とは全く違う、厳しい修行によって身に付けた『小宇宙』という力を駆使して素手で戦う超人達……彼曰く、その拳は大地を砕き、天を裂くという……本当なら驚くべき事だ。

ヘステイアは『神』だ。神とは生まれからして地上の不完全な存在たちとは隔絶した存在であり、全知全能である。それ故に神としての力を封印していたとしても、下界の子供の嘘は完全に見抜ける……それは、生まれが別世界で幾多の神々と渡り合ったとは言え、所詮は人間に過ぎないアイオロスも例外ではない。

その彼女が見た限りでは、彼は一つも嘘を言っていない。それ故に普通ならば鼻で笑

い飛ばせるような話しても信じざるを得ない。

「ベル君はベル君で簡単に懐いちゃうしなあ〜」

いや、ヘステイアも別に彼自身は自らが判断したように信用に値する人間ではあると思つてはいるが、アイオロスの話す話を聞き、自身も聖闘士であると言つた彼に終始『英雄』を見るようなキラキラした目を向けていた事を思いだし、幾ら何でも簡単に信用しすぎではないか？ と子供の将来を本気で心配する母親のごとくベルの将来を危ぶんだ。

「それに、こんなもの見せられたら信じるしかないもんな……」

そう言う、彼女の目の前には弓をつがえるケンタウロスを模したと思われる黄金の像が鎮座していた。

『射手座の黄金聖衣』——アイオロスが彼女に対しての深い感謝と信用の証に彼女に預けたものだ。

本来であるなら、『聖衣』を預けるなど余程の事が無い限りはしなないが、彼は己を捨ててくれた恩と与えてくれた彼女の信頼に、自身の持つ最も大切なものを預けることで応えたのだ。

そして、ヘステイアはこの射手座の聖衣から、とてつもない神秘を感じていた。このようなレベルの防具などこのオラリオには存在していない。

これほどとなると『鍛冶』の発展アビリティを持つハイスマス達すら造れる者は皆無  
だろう。その事が武器防具に疎いヘスティアでも簡単に理解できてしまえるのだ。

「とは言え、ここ<sup>（一）</sup>までされちゃったら、もう聞かなかつた事にする事も出来ないしね」  
口に出しつつも、彼を放り出す……そんな考えなど最初から彼女には不思議と無かつ  
た。

彼は元の世界に帰還したいと言っていた。そして、ヘスティアはそんな彼に出きる限  
り尽力したいと考える……

「これからどうなるのかな？」

ポツリと口から漏れた疑問に答えるものは居ないままに、闇に溶け込むように消えて  
いき、彼女もまた一つ欠伸をすると微睡みに身を任せ、眠りについた……

.....  
.....  
.....

ヘスティアが眠りについたのと同時刻——

地下深く、ダンジョン18階層——冒険者達から『安全階層』<sup>セーフティポイント</sup>と呼ばれる18階層の

には、冒険者達が造り上げた街がある。逞しい冒険者達が各々で好き勝手に商売をして  
いるリヴィラの街を一人、離れていく影があった。

黒い聖職者のような格好で、背中にはかなり精巧に造られた芸術品のような箱を担い  
でいる長身の男性――

「ダンジョン……か」

また、奇妙な所に来てしまったなど男は呟きながらリヴィラの街から離れていき、や  
がて南方に存在する森の中に入って行つた。

男の名前は『シユラ』――最強を誇る十二人の『ゴールドセイラント黄金聖闘士』が一人にして、あく無  
き強さを探求し続ける漢だ。

その彼の思考は、迷いの中にあつた。

彼はこの世界で目覚めたその時――目が覚めた時、側には誰もおらず、ひたすらに壁  
から或いは天井や床から湧き続けるモンスターを葬りながら下へ下へと足を運んだ結  
果が、今の状況だ。

最初は情報収集の方を優先していたが、下に行けば行くほどにモンスター達が強くな  
るといふ法則に気付き、完全に修行がメインになっていた。

その事を思いだし、彼は自分自身の節操の無さに少し呆れるも、それが自分の本質だ  
と理解しているので反省も後悔もしない。

それに彼が下に向かった最初の理由は『この下に』に一体何があるのか見極めるという目的もあつたのだ……そう、目が覚めたときから感じる遙か地下深くから感じる圧倒的に巨大で邪悪な『小宇宙』の発生源が何なのかを突き止めるため……だが……

「……で18階層……確か現在の最深部は58階層だったか……」

そもそも、彼は光速の動きをもつてほとんど丸一日懸けて、三回階段を降りた……計算すると、彼が目覚めたのは15階層という事になるが、58階層ともなるとここから40階層分の距離があり、しかも下に行けば行くほどモンスターは強くなり、より迷宮が複雑になる。

気が遠くなる話だとシユラは思った。

先程街で聞いた話によれば、このダンジョンの上にはオラリオという街があるらしく、そこはさっきのリヴィラの比ではないぐらいに栄えているとか……先にそこに行つて準備を整えるべきか？

しかし、まさか、このような場所に街があるとはな……と、先程の西側に在つた商売魂の逞しい冒険者達の街を思い出した所で、彼は森の奥から妙な小宇宙を感じた。

「これは——」

彼はその『小宇宙』を知っていた。『聖域』に居た頃は毎日のように感じていた。

それ故に、この『小宇宙』の正体をシユラは直ぐに察した彼はその場を駆け出した。



駆け出した彼は『小宇宙<sup>コスモ</sup>』を燃やし、瞬く間に最高速である光速へと達した。

そのまま、立ちはだかる木々や枝、岩石をも自らの手刀で切り払いながら、真つ直ぐにその場へと向かう。

そして、ものの数秒と掛からず呆気なく目的地へと到着した。端からみたら瞬間移動や空間転移と見間違わんばかりの速度でシユラは『彼』の前に現れた。

「やはり貴様か……シヤカ！」

そこに居たのは、彼と同じく『黄金聖闘士<sup>ゴールドセイラント</sup>』の一人——『乙女座<sup>パルゴ</sup>のシヤカ』。

『黄金聖闘士<sup>ゴールドセイラント</sup>』の中でも最も神に近いと謳われる男がインドの民族衣装であるサリーの様な衣装を身に付けて岩の上に座禅を組んでいた。

その両目は平時と変わらず固く閉じられていた。

「久しいな『山羊座<sup>カプリコーン</sup>』のシユラよ」

「貴様もなシヤカ……だが、俺だけではなく他の黄金聖闘士<sup>ゴールドセイラント</sup>もこの世界で生き返つていたとは……」

シヤカは無表情に、シユラもまた鋭さを帯びた険しい表情だが、だが二人はお互いにどこか柔らかい雰囲気を感じていた。

彼等二人は互いにとつての譲れない物の為に聖域の処女宮で殺し合った関係ではあれど、あれはお互いに決して本意では無かったのだ。

だから二人の黄金聖闘士は、互いに再会を喜んだ。

「シャカよ……俺とお前、二人の『黄金聖闘士』がこうしてここに居るといふことは……」

「ああ、シユラ。君も薄々感じては居ると思うが、恐らくは——いや、確実に十二人の『黄金聖闘士』はこの世界に存在しているだろう」

「おお！ やはりそうか」

シャカの言う通り、シユラも何となく予感はしていたが、神に最も近いと呼ばれる男に肯定されたことにより、予感は確信へと至った。

ならば、今シャカと再会したように他の『黄金聖闘士』達とも会えるだろう。

アテナのために死んだ後も共に戦った『デスマスク』『アフロディーテ』『カミュ』『サガ』の四人に兄弟分である『アイオリア』。

そして——彼の師であり、兄であり、遠い目標であったあの漢との再会も果たせる。

だとすれば、後は——

「シャカ、他の黄金聖闘士が何処に居るか解るか？ 我等と同じようにこのダンジョンに居るのか？ それとも地上か？」

「ふむ。私を感じ取った限りでは、このダンジョンと呼ばれる地下世界に居るのは私達も含めて3人……残りはこのシャカの力を以てしても位置が特定できない。君も感じているであろう邪悪な小宇宙に阻まれているせいで正確な特定は不可能だ」

「そうか……」

シヤカその言葉の聞き、それまでの再会の喜びから一転、何処か彼は沈鬱とした雰  
囲気が漂い始めた。

そして、シヤカも彼が何を思っているかのような質問をしたのかを理解しているが故に何  
も口にはしなかった。シヤカは普段は己を中心に世界が回っていると信じて疑わない  
天上天下唯我独尊を地で行く位に私の強い男ではあるが、友の心情を組むぐらいのこと  
は出きる。

シヤカはあれで意外に空気の読める男なのだ。

その後はシユラとシヤカはお互いに知りうる限りの情報を話し合ったが、やはりこち  
らに来てから一日も経っていない事もあり、微かな時間では手に入れられる情報も限ら  
れてくる。

結局二人はお互いにほとんど目新しい情報は無かった。

「シヤカ、これからお前は どうするのだ？」

「私はもう暫し、ここに留まろうと思っている。時が来たら地上に上がる事となるだろ  
う」

「そうか……ならば、俺はもう行くことにする。また暫しの別れだ」

「なるほど……因みにどちらへ——愚問だったか」

「ああ、シヤカよ俺は——地上を目指す！」

有言実行とばかりに、早速この階層に入ってきた時に使った階段を目指して歩み始める一人の漢。

彼は確信していた。

恐らくは自分の『捜し人』はここには居ない。

ならば、地上に出るのが一番手っ取り早い。

このダンジョンの中に居ると言うもう一人の『黄金聖闘士』の事も気になるが、それに関してはシヤカからどの人物であるかを聞き、心配の気持ちは無くなった。

（あの男ならば、俺やシヤカが手を焼かずとも如何様にも生き残れるだろう。俺の今すべきは地上に出て、一刻も早く一人でも多くの『黄金聖闘士』を集結させる事だ）

そう考えながら森を出たところで、リヴィラの街の方角で火が上がっているのを彼は見た——

（なんだあれは——火の手？ モンスターに襲われているのか？ それにこれは、女の悲鳴?!）

思考は一瞬——彼は直ぐ様に悲鳴の上がる場所へと駆けた。

## 少年の情景と追跡者

オラリオのとある路地裏——そこには、とうの昔にその存在を周囲の住民から忘れ去られた寂れた教会がある。

神々が実際に降りてきてからというもの、下界の住民はそのほとんどが神に対しての信仰を失ってしまった。無論、全ての者達がそうであるという訳ではないが……その理由は『神々』<sup>かれら</sup>の実物を見てしまったが故か、或いは別の理由があるのかは定かではない。

しかし、神ではなく別の存在を信仰をする者達は一定数存在する。その対象は高名な英雄や精霊であつたりと様々だ。

恐らくはこの教会もそういった物なのだろう。

時刻は既に早朝——朝日が上り、夜になれば街灯の光すら一切届かない暗い路地裏にも日差しが差し、教会の周囲を明るく照らしていた。

そこで今、二人のヒューマンと思われる人影があつた。

足をその場に止めて目を瞑りながら腕を振るい、その度にその手に持ったナイフが紫

紺の軌跡を描いていた。

「フツッ！ ヤツ!!」

その動きは、中々に様になっており、戦闘に関わる職に着く者が見れば、振るう者が日常的にその『武器』<sup>ナイフ</sup>を戦闘に使っているのだということが解るだろう。

そして、この場にいるもう一人の者は戦闘に関わるどころか、一歩間違えれば世界すらも滅ぶような険しい戦いを乗り越えてきた歴戦の強者である。

なので当然、それが理解できた。

そして、それだけではなく、光速の動きすらも見抜くその視覚には常人では見ることの出来ない多くのモノを捉えており、観察しながら頭の中で一つ一つの動きの特徴とその理由を考察していく……

男はアイオロス——異世界より死して、この世界に迷いこんだ者であり、最強の聖闘士<sup>セイント</sup>と呼ばれた漢だった——

「そこまで……もう良いぞ、ベル」

アイオロスは、両手を叩きながら、己の目の前でナイフを振るう少年にそう言つて静止を呼び掛ける。

その声に聞いた、少年はそれまでやっていた演武と呼ぶには少々未熟にすぎる動きを止め、フウ々と息を吐いて『目を瞑つて実際に敵が居るといふ想定で武器を振つてみて

くれ』という指示を出したアイオロスの方を向いた。

「あ、あの、どうでした？」

「んん、何と言うかな……」

何故か自分をキラキラした目で見てくる兎のような特徴の純朴そうな少年の問いに、アイオロスは腕を胸の前で組んで答えに窮したような態度を取る……

——彼は戸惑っていた。

昨夜から、やたらと自分に対して熱い視線を向けてくる少年の態度に——そして、たった今見た動きに対して……

いや、少年の視線についてはある程度は解る……これは、過去に弟のアイオリアやほとんど弟子みたいな存在だったシユラが自分に向けていた尊敬や情景といった類いの視線で、そこに邪な感情は込められていないと彼は感じた。

しかし、アイオロスにはイマイチ自分が何故そのような視線を向けられるのかが解らなかつた。

少年からしたら、アイオロスは自分と女神の二人が暮らす世界に突如として割り込んできたイレギュラーな筈だ。それも、異世界人などという意味不明な不審な存在……ハッキリと拒絶されるか、そうでなければ距離を置くかのどちらかと予想していたのだ。

昨夜の様子からして、どちらかと言うと人見知りな気がして、自分に対してどう接すれば良いのか解らないという雰囲気バリバリに発していた。

だが、夕食の終わりにアイオロスが自分の過去を明かしてから態度が急変した……それまでは、話し掛けたくても、どう話しかけたら良いのか解らない感じでモジモジしていたのが、唐突にぐいぐい話し掛けてくるようになった。

彼の居た世界は一体どのような世界だったのか、今までに、どのような戦いを繰り広げてきたのか——少年は就寝までの限られた時間をフル活用して、彼に色々な事を質問した。

そして、基本的に人の良いアイオロスは律儀にそれらの質問に出来る限り答えた。

それによって益々、少年は彼に対しての態度を変化させていった。

アイオロスは元々の世界では平凡な生涯を生きた普通の人間だった。しかし『アイオロス』として生まれた今生は、聖闘士として様々な戦いに身を投じた百戦錬磨の戦士である。

聖闘士になるためには常人なら発狂するレベルの修行を数年行わねばならず、その過程で良い具合に常人としての感覚が狂ってしまうのだ。

そして、それは若干八才にして黄金聖闘士ゴールドセイイントになったアイオロスも例外ではなく、最初はなまじ前世があった分、常人としての感覚が強かったが、やがて修行で『小宇宙コスモ』と



いう超常の力を身に付ける過程で他の聖闘士と同じように狂ってしまったのだ。

彼にとつて、地上の愛と正義の為に戦うことは当然の事であり、それに命を懸けるのも当たり前なのだ。

だが、彼は忘れて……他の多くの人間にとつては『世界』は自分で守るものではなく、多くの人間は世界と同じで守られる側であるという事を……

ベル・クラネルという少年にとつては、世界を守るために神々という巨大な存在を相手に己の身一つで闘う『聖闘士』という存在は彼が憧れる英雄譚に登場する英雄の様に思えた。

そんな存在が、現実として自分の前に居る……それを認識すると同時にベルは生まれて初めて憧れの存在に——実在する『本物の英雄』に会えたかのように感じてしまったのだ。

そんな訳でベルがアイオロスに対して向けている感情は憧れの英雄を見る年頃の男の子という感じだ。

しかし、二度目の人生の大半を修行に費やした結果、感覚の狂ってしまった彼はそんなことを察せる筈もなく、結局理解することを諦めてしまう。

そして、彼が今戸惑っている最大の理由が、ベルの現段階の実力である……

本人が言うには、ベルはまだ武器を握って間もない……つい半月前まで、ただの田舎

者で武器など握ったこともなく、当然戦いの心得もなかったとのこと。

それにしては、ベルは少々強すぎる。

と言つても、別段飛び抜けているという訳でもない……なんせ、技は見た限りでは『我流』で師は居ないのだろう。動きも彼から見たら隙だらけも良いところだし、聖闘士として見たら『青銅』の域にすら至らない『雑兵』程度……総合的に未熟に過ぎるレベルだ。

しかし、逆に言えば、師もなく武器を握つて一月も経たずにこのレベルはハッキリ言つて異常だ……

特に身体能力が凄まじい——それこそ、これだけ高ければ下手な相手なら技など要らないほどに……戦う力など無かつた筈の少年を半月で一人前以上の戦士にするとは、これが神の『恩恵』か……とアイオロスは戦慄する。

もし、ベルに才能があるのであればまだ納得できた。だが、アイオロスが見たところ、ベルに別段戦いの才能があるようには見えない。

正真正銘、少年は天賦の才能を持たない……それこそ武器を振るうよりも畑仕事をしている方が余程似合う華奢な身体だ。

何処にでも居る平凡な少年……それが彼の結論であり、それが今の演武を見て腑に落ちない理由でもある。

技術も我流で彼から見たら未熟でも、十分に『実戦で使い物になる』程度ではあるのだ。

「（極普通の子供が天賦の才無しに半月でここまでになるのか？ それとも『ファルナ恩恵』以外にも何かがあるのか……）」

彼の心に疑問が浮かんだ……

「アイオロスさん？」

「あ、ああ……すまない」

余りに真剣な顔で考え込んでいたアイオロスに対して、キラキラした目を一転して不安げな表情で話しかけるベル……

「そうだな……正直、戦闘者として君に言いたいことや教えたいことは山ほどあるし、動きも改善が必要と思う所は多々ある。それこそ、多すぎてどこから指摘すれば良いのか解らんくらいにな」

「そ、そうですねえ〜」

ベルは異世界の英雄からの中々に辛めの採点に残念そうに溜め息を吐いた。

だが、同時に当たり前だとも思っている。

自分など、ほんの数日前までは包丁や鋏以外の刃物など持ったことが無いズブの素人だ。

モンスターとの戦闘で幾らかの経験を積んでステイタスは伸び、それに応じて身体能力は向上したが、それだけなのだ……『半月前よりはマシ』それが、ベルが自分で思っている自己評価だ。

だが、ベルはそれでは満足出来ない。

己の主神であるヘスティアやギルドの受付でベルを担当をしてくれているハーフェルフの女性『エイナ』が言うには、普通の冒険者では考えられない速度でベルが成長している。太鼓判は押されているが、彼の目的には全然足りないのだ。

少年が目標とする『情景の少女』は、彼の遙か先——距離を数えるのが馬鹿らしいほど遠くに居るのだから……

ベルは、物語の英雄に憧れて、故郷から遠く離れ、ダンジョンのあるオラリオの街に単身で来た。

ただし、憧れていると言っても、英雄になりたいという訳ではなく、英雄の様に素敵な女性とダンジョンで出逢い、あわよくば物語に出てくる彼等のように様にハーレムを築きたいという割と不純な目的であった。

そのような事が目的でオラリオに来たは良いものの、見るからにひ弱そうな田舎の少年など、基本的に戦闘が関わってくるダンジョン探索を主とするファミリアに相手にされるわけもなく、どのファミリアからも門前払いを受けたのだが……

その後、ヘステイアから誘いを受けて彼女の眷族となつてからも、冒険者としてダンジョンに潜りはじめた。

だが、当然都合の良い出逢いなど訪れる事もなく五日が過ぎた頃だった。

一体当時の少年は何を思ったのか、身の丈に合わない階層に降りた。ギルドで自分を担当してくれている『エイル・チュール』に散々に『冒険をするな』『三階層から下にはまだ降りるな』と言われたにも関わらずである。

そして、好奇心猫を殺すと云わんばかりに、運に助けられて五階層までほぼ無傷で辿り着いたベルの前に、身の丈に2 Mを越える筋骨粒々な肉体を持ったモンスター『ミノタウロス』が現れた。

そのモンスターの圧倒的な存在感に吞まれてしまったベルは何とか、恐怖で脚がすくむ思いを必死に振り払い、文字通り脱兎の如く逃走した。

当然、恩恵を受けて日の浅いベルがLv. 2にカテゴライズされるモンスターであるミノタウロスから逃げ切れる筈もなく、ダンジョンの壁際まで追い込まれてしまった。

その時、ベルは彼にとって運命を変える邂逅を果たした——『アイス・ヴァレンシユタイン』……十六才の若さで『Lv. 5』に到達し【剣姫】の二つ名で知られるオラリ才でも屈指の第一級冒険者に数えられる少女である。

彼女は、追い詰められたベルを瞬く間に救った。

そして、その瞬間ベルもまた、勇者に助けられた姫君の如く、瞬く間に恋に落ちてしまつた。

そして、その後に彼女にただ焦がれていたベルは、とある酒場での一件——偶然にも彼女の派閥である『ロキ・ファミリア』の遠征帰還を祝う宴会に遭遇してしまい、彼女の同派閥の冒険者の一人であり、こちらも彼女と同じくオラリオで並ぶ者の少ない第一級冒険者である『ベート・ローガ』に己の失態を嘲笑され、同時に弱い者では彼女のとなりに並ぶことなど出来ないという現実を知つた。

それを知つたベルはただ漠然と彼女の側に近付きたいと焦がれるだけであつた自分を心の底から恥じ、同時に彼女に——【劍姫】に追い付きたいと強く思った。

（僕は……もつと強くなりたい。あの人の隣に並べるぐらいに……そして、いつの日か——）

「ベル」

「——は、はい！」

自分の『目指すべき目標』と『その為の目的』を再認識した所で、突然アイオロスから声を掛けられたベルは上擦つた声で返事をした。

そして、彼の鋭い眼光が真剣に己を映している事を察し、緊張した様子で佇まいを直した。

「オレはこれから此処で世話になる身の上だ。それにヘステイア様からも君に『色々教えてくれ』とも言われている。だから、君に戦いを教える分には何の文句は無い」

「は、はい！ あ、ありがとうございます……」

その言葉に、自身が英雄と尊敬するアイオロスに戦い方を師事できる事に、パツと表情を明るくした。

「だから、まず最初に聞いておきたいんだが——君にとっての強さの『方向性』は何だ？」  
「強さの……『方向』ですか？」

「ああ……目指すべき場所……と言っても良い」

それを聞いて、ベルの頭に浮かんだのは、やはり自分にとっての目標である情景の存在だった。

「さっき言った君の評価は全て、対人戦を想定した上での話だ。君は敵の攻撃を怖がっているのか……少し『避ける』という事に念頭を置き過ぎている気はするが、モンスターという異形の存在と戦うと想定するなら君は我流ではあるが既に『そこそこ』の域にあると思う」

先程までのベルの動きはアイオロスがベルに『目を瞑って実際に敵が居るといふ想定で武器を振ってみてくれ』と指示を出して、させた動きだった。

実際に敵を想定した動きをやらせたのは『戦い方』や『どのような敵と普段戦ってい

るのか』を見極める為で、眼を瞑らせたのは、単にその方がイメージが働くからだ。

「これは予想だが、君は対人——人との戦闘経験が少ないか全く無いんじゃないか？」

「——っ!？」

ベルは驚愕した……アイオロスが自分とは比べ物にならないぐらいに強く、経験豊富という事は何となく察していたが、それでもそこまで明確に見抜かれるとは思わなかった。

アイオロスの言う通り、ベルは人との交戦記録は全くの皆無であり、これまで戦ってきたのはダンジョンの『上層』と呼ばれる中でも更に浅い階層のモンスターばかりであった。

そして、その経験は大半がゴブリンやコボルト等の小柄なベルよりも更に小さな人型モンスターか、それよりも数は少ないがキラリアント等の完全に人型から逸脱した異形のモンスターだ。

ベルが今までに戦った中で最大の敵は『シルバーバック』というダンジョンの上層の中でも比較的深い階層にいるモンスター（ミノタウロスとは遭遇しただけなのでカウントしない）だ。

「なんで、解ったのか……という顔だな？　簡単だ。君の動きは『人間』という生き物との戦いを想定していない。それぐらいなら一目で解る……」



そうだ。ベルの動きは人間という相手を想定していない……一度でも実戦で人と交戦したことがあるなら、人間は『思考しながら戦う』という事を知っている筈だ。

そして、それを知っているなら否応なく、大なり小なり動きに『それに対する動作』が出る筈なのだ。

だが、アイオロスが見た限りではベルは、正確に敵を頭で想定しているにも関わらず、それが無い。

ベルは、受付嬢のエイナに慎重に敵を良く見て慎重に戦う事を口酸っぱく言われているので、一応は動きの端々に慎重さが見てとれるのだが、それは『何をやって来るか解らないモンスター』を普段相手にしているからだろう。

決して、その動きを見て相手の動きを『先読み』するためではない。そうアイオロスは考えた。

そう、今のベルの戦闘能力は対モンスターに特化しているのだ。

そして、その考えは当たっていた——

「す、凄いです……本当に見ただけでそこまで……」

ベルの何の裏もない称賛の言葉に、アイオロスは何処か照れ臭そうに左の頬を指で掻いた。

そして、照れ臭さを誤魔化すように言葉を続けた——

「このままの現状でならハッキリ言って今のままでも余り問題はない」

アイオロスはベルと視線を合わせて真剣に言葉を重ねていく。まるで問い掛けるように――

「経験不足は、経験を積まないと解決しないが、お前は若いから経験なんてまだ幾らでも積める……対人を想定したら隙が生じるのも我流なら仕方ない」

だが、それもいずれ仲間が見付かった時にでも試合するなりすればカバーできるようになる。もちろん、真に対人戦を極めるなら実戦は不可欠だが……と続けた。

要するに――

「お前の『欠点』は時間が解決してくれる程度の問題なんだ」

暗にオレの教えなど要らないのではないのか？ と仄めかす。

「そ、それは……」

「普通に冒険者をやつていくならそれで良い筈だ。何も無理してまで強さを求めなくても、お前なら直ぐに『それなり』の冒険者になれるさ……」

このまま、強さだけを求めてモンスターと戦つてもベルの『ステイタス』は上がり続けるだろう。だが、それだとしてもステイタスによつて上がった身体能力に頼る歪なスタイルになってしまう。

普通の冒険者ならば、そんな直ぐにはアビリティは成長しないので生じない問題だ

が、ベルの場合は成長が早すぎることの弊害で、そうなってしまう……アイオロスはそれを心配していた。

「それに、手っ取り早く強くなるには格上か、同等以上の敵と戦うのが最速だが、それだと必然的に無茶を——いや、『冒険』をすることになる……解ると思うが、それは死ぬ確率が上がる——ヘステイア様や君の周りの人間は君がそれをするのを望まないだろう」

アイオロスの言葉を聞いて、ベルは押し黙る……『冒険者は冒険をしてはいけない』——心優しいハーフェルフの受付嬢に言われたその言葉が脳裏を過る。

それだけではない。己の主神であるヘステイアは言うまでもなく、他にもミノタウロスに追い掛けられたと聞いて、血相を変えて自分のことを心配してくれたエイナ……もはや行き着けとなりつつある酒場『豊穡の女主人』のシル……ほとんど毎日ダンジョンに潜るベルの為にに昼食を作ってくれる彼女も——自分が無茶をすると彼女達が悲しむ事となる。ベルは自分を心配してくれる人がいることが嬉しい反面、申し訳無いとも思え込むように視線を下げる。

アイオロスはその様子は言いたいことはあるのに、何が言いたいのか迷っている風に感じた。

「別に難しい話ではないんだ。要は『ベル・クラネルは何を目指しているか』という話だからな」

「——っ！」

アイオロスのその言葉を聞いて、ベルはそれまで自分の中に渦巻いていた様々な考えや感情が一つに収束していくのを感じた——

「お前は強くなりたい……しかし、それは何の為にだ？ 富や権力、他者からの称賛や尊敬が欲しいからか？ それとも、強くなつて何かを成したいのか？ 或いは、何かを守る為にか？ ベル、お前は何を目指している？」

（何を目指しているのか？ そんなものはとづくに分かっているじゃないか！）

そう、少年にとって——目指す場所はもうずっと決まっているのだから——

「アイオロスさん……僕は——」

.....

.....

.....

「それじゃ、行つてきます!!」

大きな声でそう言つて、ダンジョンに向けて走り出す背中を見て感慨深い思いがオレの心に去来する。

その背中には迷いはなく、少しずつ離れていくにつれて小さくなっていくが、心なしか昨日よりも大きくなっている気すらする。

原因はまあ、さっきのベルの言葉だなど、考えて思い返す——オレの問いに対して、ベルの出した結論と答え——

『隣に立ちたいと思う人が居ます。取り敢えず胸を張ってそこに行けるぐらいにつよくなりたいです！でも、神様やエイナさんにシルさん……他の人達が僕を心配してくれることも知ってます』

『それなら——』

『それでも僕は——諦めたくありません！僕は——』

「英雄になりたい……か。若いな」

少年の純粋な……余りにも純粋すぎる願いとその決意を思いだし、オレのポツリと漏らす。

あの純粋さや真つ直ぐな心根は今のオレには無いものだ。

ベルか……あの少年を見てるとどうも『星矢』の事を思い出す。

あの、理不尽とも思えるような逆境を幾度も乗り越え、不可能を可能にしてきた若き『天馬座の聖闘士』を――

「そう言えば、星矢も無茶ばつかしてマリンに叱られてたつて話だったな……」

うーん、確か原作では、むしろマリンの方がかなり無茶ぶりの修行を星矢に課していたイメージが有ったんだか……

だが、星矢は諦めが悪く、良く青臭い理想論を言っていたが、あいつの場合は結局はその我儘を押し通せるだけの力と可能性をいつも示してきた……それ故に、あいつに触れた者達は、星矢に懸けてみたくなる。

そして、そんな星矢だからこそオレの『射手座の黄金聖衣』ゴールドクロスも何度もあいつを助けたのだろう。

「さて、これからどうするか……」

ベルの背中を見送ったオレは、これから一体どのような行動を起こすべきか思索する。

ヘステイア様は、既に神友のヘファイストスなる神の元へバイトに行っているの、今この教会にはオレ一人だ。ハッキリ言って信頼しすぎな気もするが……

ベルについては結局、短時間で教えられることなどたかが知れているので、少々の戦

闘の基礎を教えるだけに留め、ダンジョンに送り出した。

これから少しずつ戦い方を教えていくと約束した手前は、ベルとオレは師弟関係だ。オレにはアイツをオレ以上に強くする義務が生じる訳だ。

才能にはそんなに恵まれてなさそうだが、そんなものは努力の数と実戦で幾らでも補える。実際オレだって、『アイオロスの肉体』が特別製だけで前世は極普通の一般人だったのだ。

それに才能はなくとも素直そうな心根だしな、【恩恵】とやらもあるし、大丈夫だろう。『小宇宙』による闘法を教えるかは、まだ検討中だがな……やはり、この世界にいる人間や神々は小宇宙について認識していないようだしな。

どう考えても、知られたら面倒な事態になるに決まっている。

それにしても、これからについて、昨日散々に無い頭を総動員して考えたが、やはり答えはでない。

オレの目的は依然変わらず、元の世界への帰還だ。それは揺るがない……しかし、それを成すためには一体何をすれば良いのか全く検討もつかない。

オレ自身の帰還——それが無理でもせめて、オレの『黄金聖衣』だけでも向こうに帰さなければ……これは、アテナの『聖闘士』達には絶対に必要な物だ。

「目的はハッキリしているというのに、手段が見えてこない……ままならんな」

だが、まあ取り敢えずは差し迫った厄介事を片付けるか——

「さて——ついでにこれるか？」

オレは、教会の前から一気に路地裏に駆け出す——瞬く間にオレの速度は、音速を越え『マツハ2』程度の速度で複雑な路地裏を駆ける。

途中で人にぶつからないように慎重に人の気配を探りながら、一分間にも満たない短い時間で教会からそこそこ離れた細い通路に到着した。

ま、これだけ離れば十分か……

「よし、もういいぞ……出て来い！」

オレは細い路地裏の通路に響く程度の音量で相手に告げた。

そしたら、オレの正面から二人の武装した人影が現れ、また反対側の通路……オレの背中の方からも人が近づいてくる気配を感じとる。気配を見る限りこちらも二人——

「子供……いや『小人族』か？」

オレはオレの正面と後方を塞ぐ四人の特徴を見て、確認を込めて呟く……

「……」

「だんまりか……お前達の視線は昨日の——ギルドを出て少しした位からずっと感じていた。あの教会に居るときも最低でも二人は外に張り付いてたな？」



自分でも低いと解る声量で、更に尋ねる。

そう言うのと、彼等は表面上は変わったようには見えないが、動揺するように小宇宙がざわついたのを感じた。

「俺達の主がお前の事を連れてこいとの仰せだ」

「一緒に来てもらう……」

「主は出来る限り『穏便』に呼んできてくれとの事だが——」

「断ると言うのならその限りじゃねえぞ!!」

四人は良く似た声で、話を一人一人区切りながらこちらに通告してきた。

容姿も良く似てるし、もしかしたら四つ子だったりするのだろうか？

それにしても——

「随分、高圧的で勝手な要求だな……まあ、こちらも子供のやることに一々反応するのも

大人げないので流すが……」

「おちよくつてんのテメエ!」

「子供じゃねえよ!!」

「俺達はもう三十越えてんだよっ!」

いや、本気で子供と思った訳じゃ無いけどね……昨日ヘステイア様から恩恵ファルナについて教えを受けているので何と無くそれぐらいの察しはつく。

それにしても、こちらの挑発に面白いぐらい乗ってくれた……案外、沸点が低いんだな……全く『三十』にもなつて——ん？ 『三十』？

「なつ、年上……だどつ!？」

オレは内心の驚愕を隠すことなく言葉に出す。

それほど驚いたのだ……いや、恩恵で実年齢ほど老けておらずとも、普通は年齢を感じさせるような仕草が動作に出てくる筈なんだが……それらを合わせて『小人族』<sup>バルム</sup>という事を差し引いても、オレは精々、こいつらを二十代の前半辺りと思っていたのだが……おかしいな、彼等の仕草は血気盛んな若い者に特有の物だが……

「ああ、精神年齢が低いのか」

オレは疑問が晴れたとばかりに、手をポンと鳴らす——

それと同時にオレの周囲四ヶ所からブチッ! と何かが切れたような音がした……その音に釣られて発生源である彼等の顔を見ると、凄いことになってた。

ある者は、顔に凄い数の血管が浮かび鬼のような形相になっていたり、逆に怒りが振り切れて完全な無表情になっていたりと全員別々の表情をしている。

「上等だツ!!」

「もう『フレイヤ様』の命令なんざ関係ねえ!!」

「手足ぶつた切つてあの『お方』の前に引きずり渡してやる!!」

「そして、俺達【炎金の四戦士】を嘗めたこと——」

「「後悔させてやる!!」」

言葉が終わると同時に、四人の『小人族』はそれぞれの得物——剣を槍を槌を斧を振りかぶりオレに襲い掛かる——

オレはそれに対応するために意識を戦闘に集中して『小宇宙』を燃焼する。

こんなに簡単に行くとは——ちょうど良い機会だ。

音速を越えた動きに容易く着いてきた事といい、立ち振舞いといい……コイツらは同じ冒険者でも、ベルより遥かに出来る。

「オラリオの冒険者の力量を測らせてもらおうぞ！」



## 銀河を射抜け!射手座の電光

『小宇宙』——小さな宇宙と呼ばれるそれは、人間の五感を越えた第六感を更に越えた先に存在する『第七感』<sup>セブンスセンス</sup>に由来する力である。

嘗て人は第七感を当たり前のように使っていた……しかし、進化に至る道を辿る過程で第七感は衰え、失い、やがて第六感すらも失ってしまった。

宇宙に存在する星々から、そこらの道端に落ちている石ころ、人間の肉体に至るまで——この世界に存在するあらゆる物質は宇宙誕生の爆発……ビッグバンによつて生まれた。

それ故に『小宇宙』とは全ての生き物に宿っており、同時ほとんどの生物はそれを知覚出来ず感じることもできない。

誰もが内に可能性を秘めておきながらも、それを使える者はほんの極僅か——

そして、この世界に存在する全ての物質は原子で出来ており、その原子を破壊する程の力を秘めたエネルギー、それこそが『小宇宙』なのだ。

その『小宇宙』による闘法を極めた『黄金聖闘士』達は全員が『第七感』に目覚めており、彼等は小宇宙の神髄とまで呼ばれる第七感に目覚めているが故に、並みの聖闘士には不可能な闘技の数々を繰り出せるのだ——

ある者は『凍気』を操り、またある者は『時空』を飛び越え、またある者は他者の『五感』に干渉して剥奪し、またある者は己が手足を『聖剣』へと昇華した。

だが、それらは言つてしまえば個人の持つ特殊技法に過ぎず、当然使い手は極一部に限られている。

しかし、それらとは別に黄金聖闘士を最強たらしめる共通の『奥義』が存在する。

神話の時代より、素手による戦闘を主とする聖闘士にとつては最も使用頻度の高い技は『高速拳』と呼ばれ、その速度は最も階級の低い『青铜聖闘士』ですら音速を越える

『マッハー』であり、基本技であるが故にその応用性は高く、使い手の小宇宙が高まれば高まる程に、その速度は増していき——やがては『光』の速さへと至る。

それこそが、聖闘士の闘技の基本にして究極と言われる奥義——『光速拳』なのだ。

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

オラリオの片隅の路地裏——とある女神が住居とする教会からそれなりに離れた場所——そこでは今、常人には理解できない不思議な事が起こっていた。

通路の幅が4 Mにも満たない細い通路は、その左右を高い建物に並び立つことによつて形成されている。

そこで今——四つの影が激しく動き回っていた。

その速度は速く、所によつては容易く音速を越え、凄まじい速度を持つて動き続ける……

それら四つの影は、良く見れば人であり、またそれぞれが別々の種類の武器を持つていた。

そして、四つの影の正体——「ブリレンガ金炎の四戦士」と呼ばれるバルウム小人族達は、『剣』を『槍』を『槌』を『斧』を……彼等はそれぞれの武器をたつた一人の男を狙つて振るつていた。だが——

「くそッ！ 何で当たらねえんだよッ!？」

——そう、当たらない。

彼等は、このオラリオで——いや、この世界を探しても並ぶ者の少ない強者だ。

かの『ロキ・ファミリア』とオラリオのトップを争う二大派閥——『フレイヤ・ファ

ミリア』に所属し、その実力は『L v. 5』でありながら、卓越した連携により集団では『L v. 6』を越えた戦闘力を発揮する『小人族』の四つ子——【金炎の四戦士】の名で知られる冒険者達……【勇者】と並び立つ小人族の英雄だ。

その彼等の振るう武器は、第一級冒険者である彼等が扱うに相応しい業物であり、それを振るう彼等の実力も疑うべくもなく一流を遙かに越える『超一流』の域にある。当然、その技の練度も、そこらの冒険者など比べ物になら無い程に洗練されている。

だが——当たらない。

第一級冒険者——『L v. 5』の中でも特に敏捷に優れた『ステイタス』を駆使し、地を蹴り、壁を蹴り、仲間の身体すらも蹴つて、不規則かつ複雑な動きで、時にフェイントをいれ、スキルを駆使してそれぞれ四種類の武器による卓越した動きで、全力を持ってアイオロスに襲いかかる。

だが、それでも——尚、当たらない。

抜き身の剣の斬撃を、鋭い槍の突きを、重い両槌の振り下ろしを、力強い斧の風ぎ払いを——そのほとんどを回避し、当たる軌道にある攻撃を掌で、拳で、脚で受け止め、逸らし、受け流す——彼等の洗練された武を、より洗練された武を持つて捌き切る。

第一級冒険者である彼等の攻撃速度は音速を優に越え、ある時は『マツハ5』にすら達する。



それらの攻撃を容易く受け流し続けているアイオロスは、しかし。真剣な表情の裏で驚愕していた——

(驚いた…まさか、これほどまでに『やる』とは……身体能力は文句無しに『白銀聖闘士』シルバーセイラントクラスか!!)

彼は、心の底からの驚愕——そして、その心境には彼等に対しての敬意が芽生え始めていた。

これほどまでに至るのに、彼等が数十年にも渡って血ヘドを吐くような努力をして、技を練り上げてきたであろう事が、彼等の攻撃を逸らす度に伝わってくる。

何よりも驚嘆に値するのは、これだけの身体能力を見せ付けておきながらも、目の前の小人族達バルウムが小宇宙コスモを一切燃やしていないと言うことだ……

通常、聖闘士が超人的な力を発揮するには己の内なる小宇宙コスモを燃焼させる事が必要不可欠だ。

それをしなければ聖闘士の力は発揮されないし、聖衣クロスもただの重いプロテクターに過ぎない。

無論、常軌を逸した修行を乗り越え、闘いに生きる聖闘士達の肉体は一般人のそれと遙かに上回っているが、所詮は人間の延長線上に過ぎないのだ。

実際、小宇宙の究極とよばれる第七感セブンスセンスに目覚めた黄金聖闘士ゴールドセイラントすらも、小宇宙を使えな

ければ、そこらの青銅聖闘士ブロンズセイラントにすら勝てないだろう。

小宇宙を燃やせない黄金聖闘士ゴールドセイラントと小宇宙を燃やせる青銅聖闘士ブロンズセイラントとは、青銅聖闘士の方に軍配が上がる。それほど小宇宙の有る無しで聖闘士の実力は変わってくるのだ。

(それなのに、コイツらは小宇宙を燃やすことなく『白銀』並の戦闘能力を持っている……身体能力だけなら素の状態のオレ以上か……しかし——)

アイオロスは確信した——この程度の腕前なら自分の脅威には成り得ない……と。

そして、現在彼をほぼ一方的に攻撃している小人族バルクムの冒険者達も又、目の前の聖闘士おとこが自分達よりも遥かに格上であることを認めていた。

無論、彼等もこのオラリオで——いや、世界でも並ぶ者の少ない強者であり、美しき『美の女神』の寵愛を受けた者であるという自負と誇りがある。

なので、本来であるならば、敵の方が強いなど頑として認めないだろう——しかし、その誇りもここまで圧倒的な『格の違い』を見せつけられてしまつては認めざるを得ない。

——よつて、彼等はアイオロスに対しての攻撃意識を切り替えた。彼等に恩恵を与えた『美の神』はアイオロスの事を気に入っている為、彼等はアイオロスを己が主神の基へと連れていくことが目的だが——彼等はそれを一時的に忘却することに決めたのだ。

先程までの急所狙っていない——言つてしまえば『殺す気の無い攻撃』から『殺すつもりでの攻撃』へと意識を切り替える。

それは、彼等がアイオロスを手加減して生け捕りが可能なほど容易い敵ではないと認められた証であり、彼等自身は認めないであろうが、己よりも格上の戦士であるアイオロスへの嫉妬と敵意、そして尊敬すべき敵への敬意故にだった。

だが、それは――

「……悪いが、殺気を持って襲い掛かってくる相手に加減は出来んぞ?」

しかし、それは『殺気がない以上、怪我をさせるのは憚れるな……』と割りとは本気で思っていたアイオロスの考えを変えさせるには十分――つまり、彼等は『最強の聖闘士』と呼ばれた漢をその気にさせてしまうという誤った選択を取ってしまった。

「燃えろ――オレの『小宇宙』よ!!」

アイオロスを中心に空気に震えが生じた――それは、アイオロスの小宇宙の高まりによつて発生した現象だ。

それを見て、それまで全力を持ってアイオロスを殺しに掛かっていた四人の小人族達の攻撃の手を止めた。

それは、彼等が歴戦の冒険者であるが故に起こした行動だった。

彼等〔金炎の四戦士〕はそれなりに長い時間を戦いに捧げた歴戦の冒険者である。だからこそ、得体の知れない出来事が目の前で起こった時の対処方法は、慌てるでも、許容を越えてフリーズするでもない――冷静に状況を観察することだ。

彼等は幾多の戦いを経験した第一級冒険者であるからこそ、アイオロスの小宇宙の高まりを肌で感じ取った——故に、それまで戦闘で高揚していた頭と心は一瞬にして冷え、何が起こつても対処が出来るが如く、アイオロスから少し距離を取った——

しかし——どれ程、頭で冷静を取り繕うと、如何に距離を取ろうと、彼等の脳裏に掠めた得体の知れない『恐怖』と『不安』を拭い去ることは出来ない。

小人族バルムの四つ子は、ハッキリと自分達に迫り来る敗北の予感を感じ取った——感じ取つてしまつたのだ。

繰り返すが、彼等は歴戦の冒険者だ。

それ故に、金炎ブリンガの四戦士は、自分達とアイオロスとの『格』の違いを本能で理解できてしまつた。

「悪く思うな……小人の戦士達よ」

アイオロスの両の腕が宙をなぞる——まるでそれは、空に何かを描いているかのようなき……そして、彼等は不思議な光景を幻視した。

それは、アイオロスの黄金の小宇宙が象る幻……四人の小人族バルムは、アイオロスの小宇宙に天に弓を構える、翼の生えた黄金の人馬が見えた——その弓が自分達の方にゆつくりと向けられていく……彼等はその幻想的な光景に見惚れながらも、まるで死刑執行を待つ囚人になってしまつたかのような錯覚を覚え——思い出した。

彼等が女神の言葉を――

『あんなにも目映い黄金の輝きを放つ魂は初めてだわ――しかも、それだけじゃ無い――』

――人の魂が、あんな形をしている訳がない。

彼等の敬愛する『彼女』――美の女神曰く、人の魂には色や輝きがあり、その純度や大きさでおおまかな才能や強さ、性格などが解るらしいのだ。

事実、それを見ることのできる彼女の選んだ眷族で構成されたファミリアは、オラリオで屈指の力を誇るのだ。

『ああ――欲しい。欲しいわ! 私はある黄金の人馬を象った魂が欲しい!! あの子<sup>ペ</sup>みたい<sup>ル</sup>に未成熟なら、ある程度『完成する』まで待つのも悪くないけど……『彼』は既に完成しているわ――なら待つ必要は無いわね』

そう言うと、彼女は目の前に膝を折る彼等に命じた――

『連れてきてちょうだい。私の前に彼を――あの愛しい黄金の人馬を……私の為に――』

それらの光景はまるで走馬灯のように一瞬で彼等の頭に蘇る。

下手をすれば、最近では一番執心していた新米の冒険者――『ベル・クラネル』を越

えるほどに熱く、激しく彼女はアイオロスを求めていた。

その原因は、彼の魂が有り得ない形をしていたからではないか？

そして、それは——『黄金の弓をつがえる人馬』だとも言っていないかったか？

そう、目の前の『これ』のような——

「黄金の矢よ、銀河を射抜け——!!」

高められた小宇宙は、右腕に集中していき——放電と共に解き放たれた——

「[アトミック・サンダーボルト!!]」

オラリオの片隅の一角で、電光が走り抜けた——

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

アイオロスが初めてこの世界で小宇宙を燃やした時より、遡ること数時間——ダン

ジョン18階層。

そこは、冒険者達の運営する荒くれ者達の街——リヴィラ……そこは、冒険者達がここよりも更にダンジョンの深層を目指すための中継地点として活用され、補給やそれまでに手に入れた魔石やドロップアイテム等売り払ったりで、普段は賑わいを見せている。

しかし、今リヴィラの街からは所々から火が上がり、そこに住まい、或いは訪れていた冒険者達の悲鳴が辺りから響き渡っていた——

「なん……で、こんな場所にモンスターが……ッ！　おい！　何モンスターの侵入を許してやがる！　見張りは何してた!!」

「フィリア祭の時といい、こいつら何処から現れるのよ!!」

「皆——！　逃げちゃダメだってば!!」

ロキ・ファミリア所属のアマゾネスの姉妹は、街を襲う花のような特徴を持つ食人花のモンスターに騒然となる広場に向かって駆け寄り、次々とパニックに陥っている街の冒険者を救出していく。

「敵は魔力に反応する。リヴェリア、出来る限り大規模な魔法で付近のモンスターを集めろ！　ボールスは他の冒険者達に五人一組で小隊を作らせて対処してくれ！　数で当たれば各班一匹は押さえられる！」

「わかった」

「お、おう!!」

オラリオにおける数少ない第一級冒険者であり、世界にその名を轟かす「ロキ・ファミリア」の団長を務める小人族——『フィン・デIMUMナ』は、目の前の参上を前にして、その場にいる二人の冒険者にそう指示を出した。

そして、その場の二人——彼と同じく『ロキ・ファミリア』に所属する幹部の一人にして、オラリオ最強の魔導師『リヴェリア』は団長であるフィンの言葉に即座に頷くとその場から離れ、魔法円<sup>マジックサークル</sup>を展開する。

一方で、もう片方のボルスと呼ばれた男もまた戸惑いながらも頷き、返事をして怒号を挙げながら、指示を飛ばす。

彼は内心では街に在住する唯一のLv. 3として、普段リヴェラの街の纏め役として幅を利かせているボルスとしてはフィンに従うのは正直余り、面白くない。

だが、彼も荒くれ者なりに、このリヴェラの街とそこに住まう冒険者達には愛着がある。それ故に、内心の不快感を押し留めながら、彼に従ったのだ。

決して、自分を遙かに上回るLv. 6のフィンにビビったからではない……筈だ。

そして、フィンもまた己の手に持つ長槍をその小さな体からは想像も出来ない程に力強く振るい、次々と街の冒険者達では一人で手に終えない食人花のモンスターを葬って



いく。

その様子を見て、街の冒険者達の指揮は上がり、徐々にモンスター達を押し返していく。

ロキ・ファミリアの第一級冒険者達の活躍によつて、最初こそ戸惑ったが、形成は徐々に街の冒険者に傾いていく……そんな中で、フィンはどうしようもない違和感を感じていた。

「この状況は……作爲的過ぎやしないか？」

彼は、自分の親指が疼くのを感じながら、思考を走らせる——フィンは優れた戦闘能力と頭脳を持ち合わせた英傑と呼ぶに相応しい冒険者である。その思考力もまた常人よりも数段優れている。

そして、彼の頭で幾つもの仮説が巡り——やがて、それらが収束していき、一つの結論に達した。

「まさか……いや、それしか考えられない」

自らの脳裏を過つたその有り得ない可能性を否定する材料が見つからない事、更にはそれを裏付けるようにモンスターの作爲的な動き——フィンはそれが正しいのだと直感的に悟つた。

フィンは直ぐ様に、街の岸際にまで走り抜け、欄干の下を覗きこむと驚愕し、息を吞

む。

高さ二百M以上もある絶壁の下には、現在街を襲っている食人花のモンスターが夥しい群れをなして、水面から崖を登ってきていたのだ。

「敵は『調教師』か……………」

信じられないが……………今までに息を潜め、姿を隠していたモンスターが一斉に姿を表し、襲い掛かってきたこと——それ以外には考えられなかった。

……………

……………

……………

「ハアハア……………どうなってるんだよお、何だつて街にモンスターが？ 殺人鬼はどうなったんだ？」

「そんな事、私も解りません。でも、一刻も早く団長達と合流しないと……………」

広場に向かって、なるべく食人花のモンスターの少ない進路を取りながら、二人の少女が駆けていた。

二人の少女——ロキ・ファミリア所属のエルフ『レフイーヤ』とヘルメス・ファミリ

ア所属の犬人<sup>シアンローブ</sup>の『ルルネ』の二人は、広場に行き他のロキ・ファミリアの面々と合流するべく足を動かしていた。

食人花のモンスターは、推定でLv. 3以上の戦闘能力があり、尚且つ打撃系の攻撃は意味を殆どなさない。なので、彼女達では現状太刀打ちできない。

二人は、共に第二級冒険者——Lv. 3なのだが、レフィーヤは完全な魔導師タイプであり、武器も杖しか持たないので近接戦闘には不向きである。ルルネもまた一人で相手に出来るのは一匹が限度で大量に來られてはともではないが、太刀打ちなど出来ない。

彼女達が——特に魔導師であるレフィーヤが力を振るうには、前衛が不可欠であるが故に、団長であるフィンや他の冒険者達のいる広場まで行かなければならないのだ。

「それに、アイズさんも心配ですし……」

レフィーヤは小声で心情を口ずさむ。

彼女の頭には、自分達を逃がすために食人花のモンスターを惹き付けて別れた情景の存在——『アイズ・ヴァレンシユタイン』の事が離れない。

彼女は、レフィーヤと同じくロキ・ファミリアに所属する冒険者だ。その実力はオリオ最強の剣士の名を欲しいままにする程高く、数少ない第一級冒険者の一人だ。

レフィーヤは、彼女の実力に心の底からの信頼……いや、心酔すらしている。自分程

度が心配するのも烏滸がましいという事も解っている。だが、心配なものは心配なのだ。

レフィーヤにとって彼女は、いつの日か共に肩を並べたいという目標であり、憧れの存在なのだから——

「……は……群晶クラスターストリート街路」

「あと、ちよつと……もう少して広場です。ルルネさん……慎重に行きますよ」

「解ってるよ。私たちじゃ、あの変なモンスターには——うわッ!? ば、爆発!」

「あれは——リヴェリア様の魔法!!」

辺りに響き渡る轟音——リヴェイラの街から吹き上がる炎——彼女達が目指している広場の方角からだ。

そして、その後に続くように遠くの方で歓声が響く。

それを見て、レフィーヤは一瞬で誰が放った魔法かを悟り、ルルネもまたオラリオ最強の魔導師が放つ桁違いの魔法の威力に心胆が冷え上がる思いがした。

ルルネは先程まで、とある件の——リヴェイラで起こった『殺人事件』の容疑者だったので、一つ間違えれば、あれが自分に向けられていたかもしれないのかと戦慄したのだ……あんな魔法、避けられる気も耐えられる気も全くしない。先程、自分を常識はずれの動きで簡単に捕らえた【剣姫】と良い……【ロキ・ファミア】は絶対に敵に回した

くないと「ヘルメス・ファミリア」の冒険者『ルルネ・ルイー』は心底思った。

今からでも、トンスラしようかとルルネが思ったところで、彼女の犬人<sup>シアンローブ</sup>としての鋭い感覚が己を見る悪意の視線の存在を捉えた。

「——！ 誰だツ!？」

凄まじい火炎魔法によつて生じた炎が、リヴィラの街を赤く染める……その光景にレフィーヤは己が目指す場所の遠さを改めて感じ入り、暫し呆然としていたが、ハツとしたように先へと進もうとするが、ルルネの挙げた警戒の声にルルネと同じ方に振り替える——

「ほう、気付いたか……」

彼女達の耳に女の声が聴こえてくる……

そして、炎に照らされる水晶の道に一人の男が現れた。

全身に黒い鎧を纏い、兜を被った浅黒い顔には、半分程が包帯で覆われており、露になつている左目は、無感動に焦点だけがレフィーヤ達を向いている。

「大した力を感じないが……お前達冒険者はつくづく侮れんな。と言つても——」

「お、女の声？」

「止まって下さい!!」

見た目は、完全に男性の冒険者……にも関わらず聴こえてくる声は女性特有の高い声

だ。

その光景に酷いアンバランスさを感じ、不気味に思う二人の少女だが、第二級冒険者である二人の目には、眼前の相手が食人花のモンスターよりも脅威に映った。

その証拠に、レフィーヤの体は微かに震え、ルルネも青白い顔で怯えた様子を見せている。

「——やはり脅威ではないな」

それは、一瞬の事だった。

その男の皮を被った何かは、エルフのレフィーヤはおろか、身体能力や反射神経に優れた犬シアンローブ人のルルネすら知覚できない速度で間合いに入り込み、レフィーヤの細い首を掴み上げた。

「が、ああ……」

そのままレフィーヤの首を握り潰すが如く、掴み上げた右腕の五指に力を入れる。

レフィーヤも抵抗するが、その圧倒的な臂力の前に徐々に意識が薄れていく——  
「う、うわあああ!!」

片手でレフィーヤの首を掴み上げた『何か』……その行動を止めるためにルルネは己に出せる全力の力を持って、襲い掛かる。

第二級冒険者——L v. 3の正真正銘、全力の力が込められた最速の一撃……恐怖を

振り払うように放たれたそれは、音速の一步手前の域にまで至った。

しかし――

「邪魔だ……」

その一撃は、レフイーヤを掴む手とは逆の左手で、鬱陶しい蠅でも払うように弾かれた――

如何にルルネが自分の力を振り絞り、全力を尽くそうと所詮は『L v. 3』……それ以上の力を持つ者が相手では、抵抗すら許されずに一蹴されて終わりだ。

ルルネのそれとは違い、技も何もあつたものではない粗雑で乱暴な一撃……だが、その一撃でルルネの技を正面から撃ち破られ、弾き飛ばされたことにより意識は完全に落ちた――つまり、それが二人の実力の差を如実に表していた。

絶望――それがこの場における唯一の味方であるルルネが、己とそう変わらない實力を持った実力者が一瞬で戦闘不能にされた光景を見たレフイーヤの感情だった。

だが、その絶望は――直ぐ様に視界に映った黄金の輝きに切り裂かれた。

「何!？」

彼女は、一瞬の浮遊感と共に自分の体が地面に落ちるのを感じた。

水晶の散らばった地面に膝から崩れ落ち、咳き込む彼女が見た物は――黄金の輝きだった。

「アイ……ズ……さん？」

その黄金を意識の失いかけている彼女は、一瞬、彼女の憧れる【劍姫】<sup>アイズ</sup>の黄金の髪と見間違えた——しかし、違うと直ぐに気付いた。

「おう……ごんの……鎧？」

レフイーヤから見える大きな背中中は黄金に輝く『鬨衣』<sup>バトルクロス</sup>に覆われていた。

「貴様……何者だ？」

レフイーヤは、今の状況を思い出し、ハツとそちらに目を向ける——黄金の鎧を纏った人物の10M離れた場所に先程まで自分の首を挿んでいた謎の『何か』が立っていた。

そして、彼女は驚愕した——謎の……男の皮を被った何かの右腕が肘から先がまるでとてつもない切れ味の刃物で切り裂かれたかのように切断されていたのだ。

辺りを見渡せば、自分の直ぐ側にその切断された右腕の肘から先が落ちていた。

彼女は現在の状況を完全に理解した。

首を折られる寸前だったレフイーヤは、目の前の黄金の鎧の人物によつて救われたのだ。

首を挿んでいた右腕を切断する事によつて……先程の浮遊感は、一瞬で自分を持ち上げていた右腕が切断された為に自分が地面に落ちたからだだったのだ。

「何者か……だど？」



その『男の皮を被った何者』かは、レフイーヤ達を前にした時とは、比べ物にならないほどの警戒を顕にしながら、目の前の『黄金の鎧を纏った何者』かの一挙一動に注目していた。

「レフイーヤ!」

「アイズさん!?!」

地面にへたりこむレフイーヤの前に、風を纏って剣を持った少女が着地した。

それは、彼女の情景——アイズ・ヴァレンシユタインがそこに現れた。

「アテナの——聖闘士だ」

ロキ・ファミアリアに所属する二人の冒険者——「劍姫」「千の妖精」の眼前で、謎の殺

人鬼と思わしき存在と『黄金聖闘士』——二人が対峙した。

## 広まる小宇宙、リヴィラの街の死闘！

「ふむ、流石は『異界の花』だな……不思議な香りだ」

オラリオの中央通り……そこは、オラリオの街の中央——『ダンジョン』へと向かう冒険者がまばらに見える。

本来であるのならば、街の住民達で溢れかえるそこは、それらの人々を迎え入れる店が所狭しと並んでいる。しかし、現在は朝早くと言うこともあり、殆どの店舗はまだ開いておらず、開店に向けての準備を整えている段階だ。

そんな店の一つ——中央通りの片隅の小さな花屋に、一人の男が花を興味津々と言った様子で物色していた。

「こちらは蓮の花に見えるが……香りは微妙に違うな。少し薄いかな？ 実に興味深い……他はどうなっているんだ？」

「あ、あの……お客様、まだ開店準備中で——ッ!？」

その花屋の店員であるエルフの女性が、少し困った様子でその男性に開店準備中であ

ることを知らせようとしたところで女性の動きは完全に止まった。

そして、徐々にエルフの女性店員である彼女の頬は桜色に染まっていき——やがては限界点を越えたのか、完全に真っ赤になり、見惚れるようにポーとしはじめ。それは、端から見たら『魅了』<sup>チャーム</sup>にでも陥ったかのように見えないこともない。

いや、その例えは決して間違つてはいない。何故なら、彼女は間違いなく魅了されているからだ。

その男の……人を越えた美に——

「ああ、すまない。花に——いや、植物には眼がなくてね。つい我を忘れてしまった」

「はひ、へ?」

「この美しい花達が人目に触れるのを邪魔するつもりは無いのだ。私はこれで失礼する——」

「ま、待つてくださいい!」

エルフの店員『マリル』は、ほんの少しだが名残惜しげに蓮の花を元の場所に戻し、その場を去ろうとしていた男をつい呼び止めてしまった。

それは、完全に無意識の行動であり、彼女は自分でも己が何のために呼び止めたのか解らなかった。

それは、或いは彼女の女としての本能が『この麗人』との出会いをこのまま終わりに

したくないと働き掛けた結果なのかもしれない。

マリルは、呼び止められたことで足を止めてこちらを向く男を改めて見る……

(う、美しすぎますう〜、ヒューマンの殿方よね？ まるで『神様』みたい)

彼女の種族であるエルフには、美しい外見を持った者が多い……かくいう彼女も、エルフ故に自分の外観が他の種族の者達の多くより優れているという自覚がある。

現に、彼女が働いているこの花屋には彼女以外にも女性店員が三人いるが、その中で最も客に話し掛けられるのは自分であるし、余り誇りたくはないが、ナンパ目的で声をかけられる事も日常茶飯事だ。

だが、彼女の目の前に立つ『彼』は、そんな自分歯牙にも掛けない——いや、文字通り神懸かった美しい外見を持つ神すらも超越する美しさを持つていた。

余りの圧倒的な差がそこに在るが故に、嫉妬の気持ちすらも湧いてこない。突き抜けた美は、嫉妬や妬みの気持ちなど周囲に与えない。ただ、その『美』は他者を圧倒し、魅了する——彼の美しさはそんな感慨をマリルに与えた。

「……何か？」

「あ、えと……そうだ！ ぼ、冒険者の方でしようか？」

引き留めた理由を訪ねる彼に、マリルは一瞬焦りながら、慌てて口にした言葉はそんな在り来たりな質問だった。

誤魔化すために出た質問ではあるが、それを質問したのは、彼女が彼に常人とは逸脱したような雰囲気を感じ取ったからだ……無論、美しさは常人など逸脱しているが、それとはまた違う『何か』が彼にはある気がした。

良く食い入るように見てみれば、貴族が着るような上品な仕立ての服の上から解る彼の肉体は細身ではあるが、意外と鍛えこんでいる様にガツシリとしている。

「フム……生憎だが私はどこの神の恩恵も受けてはいないな……」

「そう……なんですか」

彼女は、彼と会話したという現実には酔いしれそうになる頭を懸命に働かせて、自分の勘が外れたことに意外に思う。

このままでは会話が終わってしまう——

「あ、あの——あと少しで開店なので……その……」

顔を赤らめて上目使いにマリルは彼の顔を見やる——それは、道行く通行人が思わず足を止めて見いつてしまうほどの破壊力を秘めていた。

その様子を見て、彼女が何を言いたいのか悟ったのか、彼は微笑みながら声を掛けようとした——が、口を開く寸前に『何か』を感じ取ったかのような明後日の方向に体ごと勢い良く振り向いた。

「……………」の『小宇宙』——アイオリア——いや、アイオロスの「アトミック・サンダー

「ボルト」か……誰かと戦っているのか？ 奴は一体何を？」

「あ、あの、どうかしましたか？」

先程まで浮かべていた涼しげで柔らかな笑みは消え、真剣な表情と雰囲気で、彼女には理解のできない事を呟く男……その真剣な雰囲気には圧倒されながらも、どうにか平静を保ちながら訪ねる。

「ああ、すまないな。直ぐにでもやらなければならない急用が出来た」

「そ、そうですか……」

マリルは残念に思いながらも、彼のどこか鬼気迫るオーラに、今度は引き止めることは出来なかった——

「——また来させて貰おう」

「へ？」

「この店の花達と——『君』という可憐な花に会うために……な」

男は微笑みながら、これまでのどの言葉よりも甘い音声で彼女に囁くように告げる。

「——!？」

「それでは——可憐な妖精よ。また会おう」

そう言いながら、彼は先程感じ取った小宇宙の場所に向かう。

その徐々に離れていく背中をぼうつと見ていた彼女は、完全に姿が見えなくなると同

時にハッ! と我に変える。

「名前……聞きそびれちゃったわね……」

この日、射手座の黄金聖闘士ゴールドセイラントがこの世界で初めて小宇宙を燃やした時とほぼ同時刻——一人の恋する乙女が生まれたのだった。

「アイオロス程の者が小宇宙を燃やすだけに飽きたらず、技すらも使うとは……この付近で大規模な小宇宙の燃焼はアイオロスのそれしか感じなかったが……」

花屋から、十分な距離を取ったと判断するや否や、直ぐに自らも小宇宙を燃焼させて、身体能力を飛躍的に上げ、急いでその場所に向かって走る——

「ならば、相手は冒険者とかいう輩か……アイオロスに技を使わせるとは——それほどまでに出来ると言うのか?」

もし、アイオロスが技を使わざるをえない状況にまで追い込まれたと言うならば、それは由々しき事態だ。

冒険者という存在の認識を改める必要がある。

「何れにせよ、接触しなければならんか……」

『魚座の黄金聖闘士』——『アフロディーテ』は、跳躍でその場を跳び、建物を飛び越

えながら友のもとへと向かった。

.....

.....

.....

「……むむ？」

「どうかしたのかい？ 『童虎君』」

オラリオから少し離れた荒野に張られた天幕の側で一人の『青年』が、ある方向に顔を向け、考え込むような——何かを憂いるような寂しげな表情を見せる。

それを見ていた旅人風の衣装を着た『男神』が声を掛ける。青年とは昨日知り合ったばかりではあるが、男神にとって彼は常に飄々としていて、どこか見た目の年齢にそぐわない老成した雰囲気を感じていたが、この様な表情もするのだなと意外に思った。

「あつちはオラリオの方だね。何か感じたのかい？ 随分機嫌が良さそうに見えるけど

……」

「おお、ヘルメス殿……いや何——壮健ぶりを確かめることが出来たので……安心したのですじゃ」



「壮健? 昨日言っていた探しているという仲間かい?」

男神——ヘルメスは、人懐っこい笑顔で……その本性を巧妙に隠した笑みを浮かべながら、彼——『童虎』に訪ねる。

「ええ——友ですな」

そう言うと、彼は笑顔を浮かべる。一見すると人の良さそうな笑みに見える……しかし、それだけではないと短い期間の付き合いとはいえ、ヘルメスは確信していた。

この童虎という青年は、確かに一見すると人の良い好青年だ。神であるヘルメスや、その眷属であり神に匹敵する美貌を持つ『アスファイ・アンドロメダ』の様な分かりやすい美形ではないが、どちらかというところ中性的で愛嬌のある顔やその雰囲気も相まって瞬く間に『ヘルメス・ファミア』とヘルメス本人からの信用を勝ち取っている。

彼等の出会いは、ヘルメスが何時ものように他の神や人には言えない少々後ろ暗い理由でオラリオの外に数人の団員と共に来ていたのだが、とある遺跡の調査の際に、そこに住み着いていたモンスターと戦闘に陥った。その際にちよつとしたトラブルでヘルメスが団員達では庇えない位置に孤立し、更には悪いことは続くとはばかりに都市外では大変珍しい大量のモンスターに襲われた。

何時もならば、『L v. 3』にして（実はL v. 4）ベルセウス【万能者】の名で知られるファミアの団長『アスファイ』が同行するため、主神が孤立する様な事態は起こりえないのだ

が、間が悪く今回のヘルメス・フアミリアの都市外遠征に彼女は参加せず、オラリオのホームにて待機していた。

主神が危険にさらされ、団員達が叫びを挙げる中——突如として、まるで瞬間移動でもしたかのようにその場に現れた童虎がヘルメスを救ったのだった。

最初は得たいの知れないものでも見るように遠巻きに見ていた団員達も、直ぐにヘルメスと笑い合い、打ち解けた童虎の人柄に惹かれ、あつという間に仲良くなっていった。

特に、童虎から近接戦闘の手解きを受けた前衛を担当する団員達は、身体能力で自分達に劣りながら、技量で自分達を超越する強さを持った童虎に尊敬を籠めて『老師』と呼ぶほどに心酔している。

しかし、ヘルメスは童虎を信用しつつも、やはり神故の勘の良さで童虎の中に『底知れない何か』を感じ取ってしまい、それが彼を心から信頼するのに『まった』を掛けていたのだ。

人当たりは良く、気がつけばするりと懐に入ってくるような気安さ、こちらの全てを包み込むような包容力に、時折見せる人としての器量……そう、彼は『でかい』のだ。

ヘルメスや団員達には、その170M<sup>モデル</sup>足らずの背中が、一回りも二回りも巨大に見えた——まるで、数百年の時を生きた、巨大な大樹を思わせる。それほどまでに童虎は『器』が違うのだ。

確かに下界の人の筈……なのに、何故か彼からは神にも通じる『何か』をヘルメスは感じていた——

「世界が変われど、その小宇宙に迷いは無い……か、アイオロスよ……お主は——」

——つくづく、救われん男よ——

再び、ここから離れたオラリオの地に向かつて、何かを小声で呟く童虎——ヘルメスにその言葉の意味は分からないが、憐れむようにも……悲しんでいる様にも聴こえた。彼の瞳は、濟んだ色をしており、道化師を自称するヘルメスを持つてしても、その奥に在るものを見抜くことは叶わなかった……

最古の黄金聖闘士——『天秤座の童虎』は自らの後輩に当たる聖闘士の名を呟き——  
ゴールドセイラント      ライブラ      セイラント

憂いる様な笑みを浮かべながら、オラリオに背を向けた。

・  
 ・  
 ・  
 ・  
 ・  
 ・

「聖闘士……だど?」

水晶の光に照らされた、夜の18階層。

リヴィラの街の群晶<sup>クワスタ・ストリート</sup>街路では、四人の人物達が対峙していた。

そして、正面から対峙する鎧の殺人鬼と黄金聖闘士<sup>ゴールドセイント</sup>——山羊座<sup>カプリコーン</sup>のシユラ。

彼等二人は互いを牽制するように睨み合っており、その場の空間は、右腕を斬られた殺人鬼の『殺気』とシユラの刃の様な『闘気』が、凄まじい勢いで攻めぎあっていた。

シユラの後ろに庇われるように、二人のヒューマンとエルフの冒険者達は、両者の放つ『気』に当てられたのか、その首筋には止めどない冷や汗が流れ落ちる。

レフィーヤに至っては先程呆気なく殺され掛けた為か、顔を蒼白にし、その表情を恐怖に染める。

アイズもまた、両者が己よりも『上』の存在であることを感じ取り、緊張する。

「貴様は——」

「貴方がハシャーナさんを殺した人？」

顔の半分を隠した黒い殺人鬼が、シユラにた向けて何かを言おうとしたところで、それを重ねるように（空気を読まず）アイズが問い質した——

「だったらどうした？」

それにイラついたのか、殺人鬼の殺意が一瞬だけアイズに向くも、直ぐに挑発するよ  
うに答えを返した——

アイズとレフイーヤの中で、目の前の鎧男が『容疑者』ではなく『犯人』になった瞬間であった。

しかし――

「女の声……」

「あ、貴方は男性の筈じゃあ……?」

「いや――」

アイズとレフイーヤは、共に外観と声のチグハグな印象に疑問の声を上げるが、シユラは既に見抜いていた――

「先程の動きの違和感……その鎧は貴様の肉体にサイズが合っていないな……それに、先程絶った肉と骨の感触といい――」

――只人では有るまい。

そう、シユラは殺人鬼の鎧から微かに聴こえる音や動きに違和感を感じ取り、装備の消耗具合から、着ているそれらの装備が、恐らくは別人の物であること事までを見抜いていた。

それだけではなく、シユラは聖域サンクチュアリに置いて、主に『アテナ』や『教皇』に対する背心者――つまりは裏切りである聖闘士の粛清を任されていた。その任務で多くの聖闘士（殆どが聖衣クロスを纏えぬ半端者ではあるが）を教皇の名の基にその聖剣を持って始末して

きたのである。

その時の経験から、目の前の『女』の肉体が明らかに『常人』の域を遥かに越えていくことを感じた。

歴戦の聖闘士であるシユラの指摘に、殺人鬼は「ほう」と何処か感心したかの様な声を上げる。

「その顔は『被り物』か」

「そこまで解るか……」

「え？」

シユラの言葉の意味が解らず、レフィーヤは疑問の声をあげる……アイズもイマイチ理解できていないのか、どこか不思議そうにしている……

「簡単な話だ——死体から顔の皮を引き剥がして『被っている』だけだ」

「……は？ ——!？」

「毒妖蛆の体液に浸せば人の皮の腐敗は防げる……知らなかったか？」

そこまで言われて、レフィーヤとアイズもようやく『被り物』の意味を理解した——だが、それを考えて背筋が凍るような悪寒が彼女達の体に走る——

「それじゃあ……その顔はハシャーナさんの？」

レフィーヤは口に出して改めてゾツとする。

それは、彼女の知る限り人間の諸行ではない。いつそ悪魔の諸行と呼ぶに相応しいとレフィーヤは思った。

「いい加減『宝玉』<sup>タネ</sup>を渡してもらおうぞ——その為に私はこんなところで騒ぎまで起こしたのだからな」

そう言いながら、彼女は一瞬でレフィーヤに迫る。

——狙いはこの赤ん坊？

殺人鬼の言葉から『タネ』と呼ばれるものが何であるかをレフィーヤが思考したのも束の間、先程のように、彼女の直ぐ側にまで死が迫つて来た……

レフィーヤに迫る黒い刃にアイズが反応しようとするも、その規格外の速度に意識では反応できても体が追い付かない。

天賦の才能を持ち、尚且つ『L.V. 5』であるアイズですらそれなのだ、当然近接戦闘が不得手であり、L.V. 3に過ぎないレフィーヤでは反応などできようはずもなく、呆気なく命運が尽きようとしていた——そして、実際にそうなっていたらう……この『漢』が居なければ——

「チッ！」

「——させん！」

同じく、ほんの一瞬でレフィーヤの近くにまで辿り着いたシユラは、その右腕<sup>エクスカリバー</sup>を殺人

鬼の首を絶つために振るい、それを見た殺人鬼も体を捻り、攻撃の目標をレフイーヤからシユラに切り換える。

シユツ！ というお互いの『武器』が超高速で風を切りぶつかり合う——何の抵抗も、切り裂かれる音すらせずに鎧の女が左腕で振るう大剣がその刃の半ば辺りで綺麗に両断された——

「……………へ？」

アイズ、そしてレフイーヤも緊迫した状況にはまったくそぐわない弛緩した声を口から漏らす。

その光景に、自身が剣士であるアイズと「ロキ・ファミリア」の冒険者として多くの強者を間近で見続けたレフイーヤは、大剣が素手で抵抗さえ許されずに両断された瞬間を……そして、僅か数M先で行われた刹那の攻防の果てに、地面にカランと転がる大剣の刃の片割れを目を点にして見詰めた。

その大剣も、恐らくはハシャーナが使っていた物なのだろう。それは『Lv. 4』の第二級冒険者が愛用していただけあり、アイズの愛剣たる『デスペラード』にすら迫る……いや『不壊属性』を付与されるの代償に切れ味は只の一流に留まる為、恐らくは切



れ味だけならば上回る程の名剣だ。一目で鍛えた鍛冶師スミスの腕が知れる——それほどの逸品だ。

それを——

「武器を……素手で切った？」

「そ、そんな——有り得ないです……」

驚愕を顔にするアイズと、信じられないとばかりに首を振るレフイーヤ……共通しているのは、目の前の常軌を逸した光景に啞然としていること——

「なん……だと……？」

そして、手に持つ大剣を呆気なく斬られた殺人鬼もまた驚愕した——しかし、アイズ達とは違い、彼女? には悠長に驚愕などしている間など無い。

何故なら直ぐ側に、それを行った『敵』が直ぐ1Mメドル先に居るからだ——

「チツ——」

殺人鬼は直ぐに致命的とも言える『隙』を晒した己の行動を恥じる。相手が凡百の冒険者ならば、このような一瞬の隙など、隙の内に入らないが、敵は余りに手練れだ——必ず来る! そう、確信した彼女は来るべき衝撃に備えながら、レフイーヤに迫った時

以上の速度で後方に下がる。

しかし——その、隙は突かれること無く、彼女は高速移動の勢いで地面を足で削りながら、シユラから20 M程離れた場所に止まる……

「ハア……ハア……」

殺人鬼は自らの命が助かったことに安堵を覚えるが、それ以上に疑問なのは、何故自分は怪我の一つもしていないのか？

殺人鬼の彼女は、考える——そして、次の瞬間には頭の中が沸騰するような怒りが沸き上がってきた。

「貴様……っ！ 何のつもりだ？」

目の前の男の力量を測り間違えたか？ あの一瞬にも満たない刹那の隙を突けるような腕がなかったのか？

いや、違う——目の前の男は自分よりも『早い』、そしてあんな派手な格好をしておきながら、腕を斬られるその瞬間にまで自分にその存在を気取らせ無だけの『巧みさ』も持ち合わせている。殺人鬼は今更、目の前の男にそれができないとは思えなかった。

ならば、考えられることはただ一つ——

「何故、私を見逃した！ 舐めているのか!!」

見逃された……それが余程の屈辱なのか、その声は女の怒りを感じさせる物だった。

怒りの声を前にしても、シユラの顔は一切変わらず、冷静な表情で殺人鬼の動きに注目している。

「……勘違いするな。お前には訊きたいことがある——だから殺す気が無い。それだけだ——」

「聞きたいこと……だど?」

「ああ——何故貴様は『小宇宙』を扱える?」

シユラの核心を突いた問い掛けに、殺人鬼は息を呑む——そして、その反応と小宇宙の揺らぎを見て、シユラは何かを『確信』したように、更に己の内なる小宇宙を燃焼させた。

「コス、も?」

「コスモ……ですか?」

そして、目の前の黄金の鎧を纏う謎の人物が発した『コスモ』という単語の意味が解らず「ロキ・ファミリア」の若き冒険者達は、異口同音でその謎の言葉を口にする……  
 「く、くくっ!」

噴き出すような、くぐもった声が殺人鬼の方から聞こえてくる……その声にその場の全員の視線が集まる。

「ク、ククク! ハッハハハッハッ!!」

笑う——その笑い声は、愉快染みて聴こえるようで、蔑んでいる様にも聴こえた。

「な、何が——」

「そうか……やはり、お前が『十二星座の戦士』——『黄金聖闘士』か——」

「……何？」

ゾディアック？ ゴールドセイント？ またまたアイズ達の頭に疑問符が過る。

「なるほど……我々の事を知っている様だな——訊くことが増えてしまったな」

シユラは、黄金の小宇宙を燃やし、右腕を構えて、目の前の相手に切り掛かろうとする。

「ああ——やはり、邪魔だな」

そう言うと、殺人鬼は左手に握る大剣を地面に突き刺し、自身の鎧を自らの腕力で無理矢理、力任せに引き剥がす——引き剥がされた黒い鎧の下からは、それだけで男性を虜にする豊満で引き締まった魅力的な肢体が露になる。

最後に、左手で顔に被っていたハシャーナという冒険者の顔の人皮で出来たマスクを剥ぎ取る——そして、得体の知れない殺人鬼は、一人の妖艶な美女へと姿を変えた——

更に彼女は、小宇宙を燃焼しながら何かを引き寄せる様に左腕を前にかざした。

すると、レフイーヤの直ぐ側に落ちている、シユラによつて切断された右腕が宙を浮き、彼女の左腕に向かって飛んだ。

何をする気なのか——それがその場の人間全員が思つた疑問。アイズは『万能回復薬』でも持っているのかと警戒するが、流石に切断された腕を付ける事など出来ない筈だと思ひ直す。

そして、彼女はその右腕を——本来の場所へと左手で継ぎ合わせた。そして、驚くことが起こる——なんと、彼女の右腕が断面から完璧にくつつき、再生した。

「流石に黄金聖闘士を相手に片腕のハンデはキツいからな……」

驚いたか？ とばかりに嘲笑うようなドヤ顔でシユラたちに向き直る女——

「薄々、思つてはいたが——やはり『化生』の類いか……」

「ここで、貴様らと争う予定はなかったが、あの『お方』への手土産だ。死んで貰うぞ——」

二人から、先程のような『殺気』と『闘気』が消える——だが、その場にいるアイズとレフィーヤは、何故かさつきよりも生きた心地がしなかった。

高位の冒険者であるからか——或いは、その『素質』が在るのか……二人の冒険者は、その場に満ちる暴力的な小宇宙の高まりを微かに感じていたのだ。

「行くぞ——！」

「参る——！」

アイズとレフイーヤ……二人の視界に幾つもの光が瞬いた——

## 新たなる師弟、ベルの決意

オラリオの住民達の朝は早い。

冒険者達は、ダンジョンに挑むための準備を整える為か、或いは早朝アタックをかます為に多くがホームを出立し、冒険者以外の彼等を相手に商売をする者達も、おれに遅れていられないとばかりに準備に追われる。

そんな朝のオラリオの片隅——「ヘスティア・ファミリア」の本拠地である協会の前で、アイオロスは——

「隙だらけだぞッ！」

「は、はいっ！」

彼の新たに『弟子』となったベルと『やんわりと易しめに』組手をしていた。

「遅い！ 速度的な意味じゃないぞ——動作と動作の『繋ぎ』がだ！ イチイチ頭で考えて行動するんじゃない!!」

「——がひいっ！」

アイオロスの攻撃に対して、回避か防御かで迷い、一瞬動きの止まったベルにアイオロスの拳が炸裂する——俗に言う『車田飛び』で体を仰け反りながら宙を舞うベル。

「くげえ!？」

そのまま、頭から落ちてしまい、へんな悲鳴を挙げて悶える白兔を見て、アイオロスは「キチンと受け身を取れ!」と強めに怒鳴り付ける。

因みにベルは、この修行を始める前にアイオロスの命令で体に纏う軽鎧は着ていない。アイオロスが『直ぐに使い物にならなくなるからな』と言われて、良く意味が解らないままに外した状態で修行に望み、ようやくその意味が理解出来た。いや、理解出来てしまった——

修行を始めて早数分——もう、ベルの肉体とその服装はボロボロだった。

服装は上も下も、砂と埃でまみれており、布も所々が裂けて破れている。

一方で体の方は、確かにダメージでボロボロだが、これでも今日のダンジョン探索には余り支障が出ないように配慮はされている。

「良いかベル。戦いとは先ずは『回避』——それが無理なら『防御』だ——」

痛みで悶絶しているベルを尻目に、アイオロスは修行を始める前に、ベルに言って聞かせた理論をもう一度語る。

「だが、一口に『回避』や『防御』と言っても色々ある……例えば、敵の攻撃を先読みし



て攻撃の機転を潰すように動くのも有効な回避手段だし、防御にしても敵の攻撃を馬鹿正直に正面から武器や盾で受け止めるのではなく、敵の攻撃の威力を『逸らしたり』するのも立派な防御だ。あとはさっきから口酸っぱく言っている『受け身』もダメージを最小に留めるという意味では防御の手段の1つだしな」

「……は、はい。それは……解ります」

「敵の攻撃を出来る限り無傷で遣り過ぐす手段としては『回避』が最も有効な手段だ」

——しかし！ とアイオロスは強調し、続ける。

「地形や状況によつては、敵の攻撃をかわせなかったり、又はかわすことが不利になる状況だったりした場合——敵の攻撃を防御しなければいけない状況など往々にしてあり得る……解るな？」

「……はい」

「そうだ、『回避出来ない』ではなく、『回避してはいけない』……又は、かわすと『不利に成りうる状況』も考えうるのだ。」

アイオリアの過去の戦歴の中には、自身の後ろに庇わなければいけない存在が居たために、かわせる攻撃を敢えて正面から受け止めざるを得ない状況があったし、回避が不可能なほどの範囲攻撃でこちらを押し潰して来る敵とも戦ったことがあった。

逆に『一撃必殺』の技を持つ相手も居たが、そう言った敵には、防御は悪手以外の何

物でもない。そう言う類いの技は、食らったら一撃でこちらが死ぬ場合もありうるのだ、回避に徹するしかないのだ。

回避も防御は状況次第でどちらが欠けても勝負は成り立たない場合が多々ある。要するにどちらも極めてこそ、一流というのがアイオロスの持論だ。

何故か聖闘士には、初見の攻撃を『わざと』或いは『敢えて』肉体で受け止める悪癖を持つ者が多い。アイオロスも二度目の人生では頭を抱えた問題である。

聖闘士の最高峰である黄金<sup>ゴールド</sup>聖闘士ですら、そう言う者が多いのだから、困惑したものである。

アイオロスからしたら、一度攻撃を受けてから『聖闘士に同じ技は二度通じないぜ！』などと言うより、敵の攻撃を全部避けた方が絶対に良いと思えて仕方がないのだ。

特に彼の親友の『サガ』や後輩の『アルデバラン』は、鍛え上げた肉体と聖衣<sup>クロス</sup>に余程の自信があるのか、ダメージが少ないと判断した攻撃は一切かわさくないという選択を取ることが多いのだ。

その時の事を思い出して、アイオロスの口から重たい溜め息が漏れそうになる。

アイオロスとしても仲間や親友が『そういう趣味』であると思っはいいないが、それでも傍から見るとそういう風に受け取られるような事は聖闘士として慎んで欲しいというのは間違いだろうか？ と当時も今も変わらずに思っているのだ。

ベルにも、アイオロスの言っていることが理解できたのか、未だに痛み顔に顔を引きつらせつつも、真剣な顔で頷く。

「ベル……お前は、行動を起こす前に余計なことを考えすぎだぞ。良いか？ 確かに戦闘の中では何も考え無いのも良くない」

先程まで教えていたことを否定するような言葉に少々驚き、どういうことか聞こうと口を開きかけるベルだが『黙って聞け』と言わんばかりの眼光に口をつぐむ。

「だがな。今のお前には戦闘中に考えながら戦う余裕など無いだろ？ もう少し腕が立つなら戦いながら色々と思考を走らせる事も出来るだろうが、今のお前がそんな事やつたら『頭の思考』と『体の動き』が噛み合わずに呆気なく死ぬのがオチだ」

「そう……なんででしょうか？」

「ああ、一つ聞くんがお前が過去に戦ったというモンスターの中に『ウォーシャドウ』というモンスターの名前があつたな？」

「え？ は、はい！」

昨日、アイオロスからダンジョンに出現するモンスターについて詳しく教えてくれという頼みを受けて、自らの到達階層までのモンスターは勿論の事、エイナとの『お勉強会』で習った限りのモンスターの情報をアイオロスに教えたのだが……それが何か関係があるのかと、ベルは純粋に疑問に思った。

「お前は、以前の大量のウォーシャドウに襲われたと言っていたな……その時お前は、何を考えて戦っていた？ 覚えていたら言ってみてくれ」

そんな事を突然言われて、ベルは答えに窮する。

当時の状況としては、ベルは「劍姫」——『アイズ・ヴァレンシユタイン』の目の前で、彼女の仲間であるベート・ローガ』に自分の事を嘲笑され——あそこまで虚仮にされながら、何一つとして反論のできない自分の弱さに居たたまれず、腰に差していたギルドから支給された安物のナイフと己の身一つでダンジョンに向かった——その時、自分の苛立ちをぶつけるようにモンスターに無我夢中で向かっていった。

そして、ベルがひたすらモンスターに八つ当たりに近い苛立ちをぶつけながら、ベルは意図せずにダンジョンの6階層にまで降りてしまったのだ。

そこで遭遇したのがウォーシャドウだ。

ウォーシャドウは、今も油断していたら危ないと思う程度には強敵だが、その当時に戦ったウォーシャドウはベルが正面から戦った相手としては間違いなく最強のモンスターだった。

「そ、そんな事言われても……あの時は、急に出てきて囲まれましたから……そりゃ『必死』に応戦——あっ！」

「そうだ。お前は、突如発生した『不足の事態』に考えるよりも前に『必死』で体を動か

して戦った筈だ」

「はい！ 僕その時は本当に必死で——」

「そして、お前はそれだけではなく、今までに経験した不測の戦いは咄嗟に考え事を捨てて『本能のまま』戦ってきた筈だ——『体に染み付いた動き』でな」

だが、アイオロスが教えているのは、これからのそれでは足りない場合においての立ち回りだ。戦いにおいて『一瞬』の油断や間違いが致命的な隙に繋がる事などザラにある。

勿論、考えるこ必要ないと言っている訳ではない。今のベルでは実践経験が余りに乏しいので、そもそも、余計な事を考える余裕などないという話だ。

「だから、これから毎朝、最初はこんな感じの『とても優しい』修行で正しい回避と防御を無意識の内出来るまで、徹底的に体に教え込む！ その後は、実戦形式でオレと本気の組手だ!!」

「は、はい——ええっ!?!」

勢いで返事をしそうになった後で、ベルは悲鳴をあげた。ベルの肉体は既に限界だ。ダメージ的にも、疲労的にもだ。

アイオロスとの修行は、たとえ数分といえども、ベルをそれほど疲弊させたのだ。

これが『とても優しい』という事にも驚愕だが、それ以上に驚いたのは——

「む、無理です——！ アイオロスさんと本気で組手なんて……しかも、実戦形式でなんて!？」

「無論、手加減はするがな……どうする？ 降りるか？」

「そ、それは——」

——降りれる訳がない。

何故ならば、ベルにも解っているからだ。百戦錬磨の『英雄』であるアイオロスに戦いを教わる——これこそが『情景』に追い付く為に何より早い道だという事が……

ベルの深紅ルベライトの瞳から、迷いと恐怖が消えた——

.....

.....

.....

「む、やり過ぎたか……」

目の前で文字通りの意味で『死に体』の状態で俯せに倒れて気絶している『新弟子ペル』の姿を見て、少しやっつけてしまったか？ という気持ちになる。

一応は手加減はしたけどな……聖闘士の肉体能力は小宇宙無しでも、常人を余裕で

ぶつちぎっている為に、日常生活で支障の無いように、オレはほとんど完璧な手加減を身に付けている……筈なんだがな。

最後にやった組手は、力の差が余りにも開いていたら、戦いにならないので、現時点のベルよりも一回り強いぐらいに力を調整した状態で戦った。小宇宙も一切使っていない。

因みに、その前座の『かなり優しい』が頭に付く『回避防御の修行』でも同じ様な力の差を意識しているが、最後の組手は、実戦形式なので遠慮無しにフルボッコにさせてもらった。

実戦形式は、言ってしまうえば擬似的な戦闘だ。全力は出さないにしても、本気でやらないと訓練にならないからな。

普通はここまでボコボコにしたら、心が折れる心配をしなければいけないが、ベルに關して言うなら必要なさそうだ。

こいつの心は強い——『女の為』という目的は多少不純かもしれないが、強くなる為の理由などそれぐらいシンプルな方がちようど良い。

だからこそ、そこに命を懸けるだけの決意と覚悟が生まれる——だから、ベルは強くなるオレは確信している。

それに、ベルの願いはある意味では、尊いものだ。惚れた女の隣に立つために……そ

の願いの根本にあるのは『愛』だ。それは、聖闘士セイイントにも通ずる願いでもあるのだ。

オレ達も、アテナと常に共に在りたいと——彼女の元で地上の愛と正義の為に戦うことを第一としているのだからな。

神や戦いに縁の遠い他人から見たら、オレ達は女神に盲信する狂信者のように見えるかもしれないが、少なくともオレは、辿った道を後悔こそすれども、聖闘士に成ったことに後悔は無い。

アテナの聖闘士である事は、オレの『誇り』なのだからな——  
「さてと……まあ、とりあえずは——」

「あくいいおろおすくうん……?」

この状況をどうするかだな——

覚悟をもって、振り向くとそこには、目のハイライトが完全に消えた、幼女がしてはいけない表情をした『悪鬼めがみ』が居た——

・  
・  
・  
・  
・  
・



「まったく！ ヤリ過ぎだよ！」

「ご、ごめんなあさい……」

「ですが——ヘステイア様」

「ええい！ 言い訳なんて聞きたくない!!」

情けない声質で、ひたすら謝るベルと、それを傍目に見ながら、小宇宙の操作の応用でベルの傷と疲労を癒しながらアイオロスも説得を試みるが一蹴されてしまう。

「良いかい！ もう朝の訓練は禁止だからね!!」

「そ、そんな……神様！」

ヘステイアに、この件に関して譲歩する気は既に無かった。

なんせ、愛しい『眷属』かぞくであり、同時に『想い人』でもある大切な存在が朝つばらから死にかけていたのだから……しかも、ダンジョンと関係のない所で——

「大体、一体どんな修行してたのなと思ったたら、ただのリンチじゃないか!? ベル君は素人なんだぞ！ もっと他にやることあるだろ!？」

アイオロスに、ベルに対して色々と教えてあげてくれと頼んだのは確かにヘステイアだ。

だが、しかし、彼女の思いとしては、全くのずぶの素人であるベルに技や技術を教えてあげてくれという意味合いであったのだ。

ヘステイアから見て、アイオロスは常識のある大人であり、実戦経験が豊富で、頼りがいのある『英雄』という、ベルの教師としては最適な人材というイメージであった。ついでに言うならば『お勉強会』の名目でベルに教師紛いの事をしているハーフェルフの『エイナ』のように異性でもない……同性愛者でもない限りは、彼女が危惧するような事態にも成り難い。

人格者であり、しかも話を聞いた限りでは、何人も後輩を指導してきたと言う……まさに理想の指導者だ。

彼に任せれば、ベルは人としても冒険者としても成長できる——『神威』というには余りにちつぽけな神の直感に従い、彼にベルを任せただ。

しかし、彼女は今、それを激しく後悔している。

修行の内容を聞く限り、それは自分が想い描いていたそれとは斜め上を逝き過ぎていた。

「もつとこう……素振りとか型稽古とかで良いじゃないか！」

「お言葉ですがヘステイア様——ハッキリ言つて実戦的な技術など一朝一夕で身に付くものではありません」

それから、アイオロスはヘステイアに何故自分がこのような修行を選択したのかを懇切丁寧へステイアに対して解説した——

「私は自慢ではありませんが、聖闘士の中ではトップクラスの実力が在ると自負しています。しかし、私にしても実戦レベルで技を習得し、正式な聖闘士になったのは、師に教えを乞うてから三年後でした——つまり、素人が技術と技を身に付けるのにはそれだけ多くの時間を捧げなくてはいけないのです」

嘘ではない。だが、アイオロスが聖闘士の修行を始めたのは五才の時——その後は八才の時に『黄金聖衣』に認められ正式に『黄金聖闘士』になったのだ——だから、今のベルと同じ条件かと言われればそれは絶対に違う。アイオロスが修行に三年の歳月を懸けた尤もな理由が、『幼児』であったが故に、後々の成長に害の出ないように、アイオロスの師が体に掛かるに負担に気を使って修行を遅らせたからだ。

アイオロスがもし、ベルと同じ年代で聖闘士の修行を始めていたら、確実に一年未満で正式な聖闘士となった筈だ。

それにしても、アイオロスだからこそ僅か三年で聖闘士になれたのであって、普通は十年単位で小宇宙に目覚めてから、聖闘士としての闘法を身に付けていくのだ。それと言うなら、原作の主人公勢でも早かった方なのだ。年齢が一桁で『小宇宙』の神髄と言われる『第七感』に目覚めたアイオロスを含めた現『黄金聖闘士』達が異常なのだ。

更に、アイオロスは聖闘士になる為の修行の厳しさを説いた——その内容は先程までベルがやっていた修行など『優しい』内容だとヘステイアは納得せざるを得なかった。

余りの内容に流石に真偽を疑うベルだが、ヘステイアは神である。なので、アイオロスの『嘘』は一瞬で看破出来る。その能力によつて逆にその修行が事実であることを確信してしまつたヘステイアはドン引きした——

曰く——自分の背丈の五倍近い岩を体に括り付けて、腕立て伏せを四桁の回数こなす。

曰く——全身に重りをつけられた状態で、足を使わずに大陸の端から端までを横断させられる（制限時間付き）。

曰く——手足を鎖で拘束された状態で海に叩き落とされ、数百km離れた島まで泳がされる。

ヘステイアは戦慄した。

もう、この内容の修行をやらせる方もこなす方も狂人……いや、常軌を逸した変態である——と。

そして、その様子を見たアイオロスが畳み掛けるように、修行の必要性を説く。

「常日頃からダンジョンに潜り続けるには、回避と防御力の向上は必須——つまりこれは、必要な修行なのです！」

アイオロスは、ヘスティアの両肩に手を置いて力説した。

「確かに危険な修行ように見えるかもしれませんが、これはベルが生き残る為なのです！」

「で、でも、取り返しをつかない事には——」

「しません!! 私の手心は完璧です!!」

熱くなったアイオロスは、つい先程の『やり過ぎたか?』という考えを完全に忘却し、力強く力説する——その姿には不思議と説得力に溢れていた。

「べ、ベル君はうちの稼ぎ頭で——」

「ダンジョンの事なら、小宇宙で治療を施せば、傷や疲労は問題ありません!! そうだな

! ベル!!」

「はいっ!」

「ベル君?!」

ヘスティアの予想外は——ベルの情景と、そこへ至るために抱いた決意の大きさ。

ベルはアイオロスの発破によって既に決めていた。『情景』——『アイズ・ヴァレン シュタイン』に追い付くことを……そして、アイオロスに関わり、その『強さ』と『大きさ』を肌で感じる事で——『英雄』が伝説や本の中だけの存在では無いと理解したのだ。

(なりたい！ 僕は——！)

ベルは、自分の胸が、頭が熱くなるのを感じていた……アイズの事を考えている時とは、身を焦がすような『それ』とは違う『熱』——それは『高揚』だった。

なれるかもしれない。手が届くかもしれない——オラリオに来てから数日で諦めてしまった『泡沫の夢』へと。

(なりたいんだ！ 強くて、大きい、愛する誰かの為に戦える……アイオロスさんみたいな『英雄』に——!!)

そして、三十分にも及ぶ説得の果てに、とうとうヘステイアの方が折れた——

無事、ヘステイアの説得が完了し、それまでの疲労を忘れて軽い気持ちでダンジョンに向けて走る——

ベルは思った。今ならどんなに辛い修行でも乗り越えられる気がする——そして、その思いは、次の日にベルの決意に感動したアイオロスが修行内容を『とても優しい』から『比較的優しい』に切り替えた事で、早くも折れそうなるのは別の話だ。

.....

・  
・  
・  
・

「地上……か……」

自らの頭上に燦々と輝く太陽の光に男は、やや目を細めながら、感慨深げに呟く……  
太陽の温かさは、どこの世界も変わらないものだ、ダンジョンに蓋をするように建てられた建造物『バベル』から出てきた男——シユラは思った。

様々な人々……ヒューマンや亜<sup>デ</sup>ヒューマン<sup>ン</sup> 人が絶えず往来する様は観ていて飽きないが立ち止まると不審に思う者も出てくるだろうと、足を止めずに滑らかな足取りでオラリオの街を進んでいく。

「ここは異世界の筈なのだが……様々なことが地球とは違うというのに、何故か共通点も多いな」

シユラは考える……何故自分も含めた死んだ筈の人間がこのような見知らぬ異世界で生きているのか……それも、生前と同じ肉体と記憶、更には聖衣を持った状態で——人の魂は、死後冥界へと落ちて永劫苦しみながら消滅の時を待つか、或いは天界へと昇り転生するか……シユラの知る限りではこの二つのどちらかの筈だ。

であるというのに、自分は確かに生きて、このまったく見知らぬ世界に存在している。

無論、生きていることに喜びがないわけではない。寧ろ、冥王ハーデスに与えられた仮初めの生ではないのなら、肉体と小宇宙を鍛えれば『情景』アイオロスに追い付けるかもしれないとも思っている。

だが――

(しかし、やはりこの状況は『不気味な物』を感じて仕方ない……)

やはり、一刻も早く他の『黄金聖闘士』ゴールドセイント達と合流しなければならぬ――改めて、そう決意した。

「やはり、この謎を解くための『鍵』となるのは『あの女』か――」

彼の脳裏を過つたのは、つい数日前――ダンジョンの18階層で戦った女だった。

この世界に概念が知られていない小宇宙コスモやシユラ達『黄金聖闘士』を知識として知っている謎の存在……

シユラと数分間の交戦の後、魔法を使って乱入してきた金髪の女剣士を見るなり『アリア!』と動揺し、それまでの好戦的な様子を一変させ、その場から退いたのだった。

無論、聖闘士セイントとして裏の仕事をこなしてきたシユラは敵の退却を敢えて見逃すような甘い性格をしていない。

なので当然、無防備な背中を晒した女に相応の深手を負わせて捕獲しようとしたが、見計らったかのようなタイミングでその場に複数の食虫植物のようなモンスターが現



れ、シユラに襲い掛かってきたのだ。

シユラが光の速度をもって、それらを始末した時には、その女はまんまと逃げおおせた後だった。

追うべきか否か……躊躇いは一瞬——セイラント聖闘士として、リヴィラの街の惨状も無視できず、結局追うことは諦めざるを得なかった……

その後は、街の負傷者の救出活動を行いつつ、モンスターの群れを聖剣を振るってほんの数秒で片付けていたら、植物型モンスターの上位種と思わしき巨大モンスターが現れたが、統率された冒険者達に瞬く間に討伐されたのを確認すると、目立つのを避けるためにその場を後にしたのだった。

その際に、主力の一人としてモンスターと戦っていた容姿の整った『槍使いの少年』と目があった気がしたが、シユラは気のせいだろうと思うことにした。

気配を完全に絶ったシユラを見つけるのは同じ、ゴールドセイラント黄金聖闘士ですら困難なのだ。それ故に、彼は幾ら見た目に不相応に『強い』とはいえ、あのような幼い少年に、自分の陰遁術が破れるとはつゆにも思わなかった。

それよりも気になるのは、女が最後に残した言葉——

『去らばだゴールドセイラント黄金聖闘士よ——次は私も纏……つて戦おう——』

「一体この世界で何が起ころうとしている？」

解らないことが多すぎる……だが、シユラはその胸中に過る不吉な予感を拭い去ることができないまま、オラリオの街を進んでいった。

## 剣姫の葛藤、牡牛座の絆

「アイズ——！ 速いよ!!」

「ちよ、あんたツ！ 突っ走り過ぎよ!?」

アイズは、後ろから聞こえてくる同じ派閥ファミリアに所属する仲間である双子のアマゾネス達の言葉に振り返ることなく、魔法によって上乘せされた肉体の速度を更に加速させた。

目の前に映るのは、モンスター達の群れ——アイズは眼前に迫り来るモンスター達に向けて突き進み、それらに剣を振るう……

「ハアツ！」

ここは、ダンジョン37階層——ギルドの規定では「深層」に位置される場所。

そこに住まうモンスター達は、当然ながら、中層や上層に沸くモンスターとは一線を画する強さだ。

そのほとんどが『L v. 3』……中には、『L v. 4』に達する『能力値ステイタス』を持つ物も居る——だが、その程度ならば『L v. 5』の上位に位置するアイズには敵とはなり得ない。

アイズが剣を振るう度に、モンスター達はその太刀筋に切り裂かれ、絶命していく——その様を見て、アイズは呟く……

「——足りない」

アイズ・ヴァレンシュタインは焦っていた。

この程度の力では、速度では、全然足りない……アイズは内心の焦りを体現するが如く、剣を走らせる振るう。

その焦りの原因は——先日のリヴィラの街の騒動だった。

つい数日前——彼女も含めたロキ・ファミリアの主力の面々は、リヴィラの街においてとある騒動に巻き込まれた。

リヴィラの街で起こった、第二級冒険者『ハシャーナ』が被害者となった殺人事件。事件の調査に協力することとなったのだが、そこで彼女達は、深層で遭遇した不気味なモンスターを連想させる新種と思われる食人花のモンスターと遭遇し、リヴィラの街の冒険者達と共に戦い、何とかこれを退けることが出来た——しかし、多くの謎が残った。

何故、リヴィラの街が新種のモンスターに襲われたのか……そして、それらのモンスターを操っていたと思われる謎の女調教師テイマとその女と戦い、アイズと同派閥のエルフ『レファイヤ』とヘルメス・ファミリア所属の犬人シアンローブの少女『ルルネ』を救った『黄金の鎧を纏った戦士』……いや、レファイヤとルルネだけではなく、フィンや他の冒険者達

の話から『黄金の戦士』は、その人知を越えた力で、街を襲ったモンスターを一蹴して蹴散らし、多くの人を救って見せたのだという。

リヴィラの街の冒険者達は、彼を褒め称え、礼を言おうと彼を探したらしいが、既に彼の姿は無かった……唯一、フィンだけはその場を去り行く彼の姿を目撃したらしいが……それによると、彼は恐らくは地上に向かったとの事らしい。

それから、アイズ達は事件の翌日には地上に帰還し、主神であるロキにリヴィラの街であつたことを報告した後は、ファミリア総出でかの黄金の戦士を探したが、いかんせん、彼を見たのは一部の人間だけであり、詳細な姿を見ているのは間近で戦っているところを見たアイズとレフィーヤ、そしてフィンだけだ。

当然捜査は難航し、行き詰まった……アイズとしては一刻も早く彼に会いたいと思っているのだが、中々そうもいかない。

自身を慕う後輩であるレフィーヤを救ってくれたことに対してお礼をするという目的もあるが、一番は彼の途方もない程の強さについて訊ねるためだ。

アイズは力を——強さを求めている。

故に知りたいのだ。彼の強さの秘密を——

「コスモ……」

確か、彼はアイズの前でそう言っていた……彼と戦った殺人鬼の女もそれを使ってい

たらしいが……

「あの女も強かつた……私よりもずつと——」

アイズは考える——もし、あの殺人鬼と遭遇し、交戦したのが自分ならば——勝ち目など在于る筈がない。

控えめに見ても、L.V. 5である自分を優に越える『能力値』……特に、あの『筋力』と『敏捷』は凶悪だ。

アイズが食らえば防具ごと粉碎されるであろう力と、レフィーヤの光属性の魔法に匹敵するかもしれない速度……アイズは、女に勝てる想像が全く出来ない。

「けど、あの人は——」

それと互角——否、圧倒していた。

アイズは自分では勝ち目が無いと断言できる相手に終始有利に立ち回りを演じていた『黄金の戦士』……『ゴールドセイント』と呼ばれていた謎の青年。

アイズは当初彼は冒険者だと思っていたが、それは違うと彼の戦いを見ると確信できた。彼からは神の恩恵を受けた人間が放つ特有の気配がしなかったし、彼の戦闘スタイルは、己が命を最も優先する『冒険者』のソレとは全く違う。アイズ自身、確信は無いがアレは——己の命を捨てて戦う『戦士』の闘い方だ。

誇りか、名誉か、或いはもつと大切な『何か』……己の信じる物の為ならば『命を捨

てる選択』を何の躊躇いも持たず、疑わずに実行できる者……彼が何を守りたいのか、アイズは知らない。だが、それはきつと尊いものなのだろう。しかし、それは一般人からしたら狂人の類い。アイズですら戦慄する生き方だ。

だが、彼の鮮烈な闘いはアイズの心に、戦慄と恐怖以上の『何か』を刻み付けた——  
どうしようもなく惹き付けられる『何か』を——

(一体、どうしてあの人はあんなに強く在れるのだろう——)

自身が傷付くことを厭わずに、ただ前に——その障害となりうるものは全て切り伏せてでも、ただ前に進み続ける……その背中はアイズにはとても強く大きな物に見えた。

まるで、かつて自分自身の英雄を見付けなさいとアイズに言った『父』の様に——

「私は——弱い……」

辺りに散らばるモンスター、の死骸とドロップアイテムと魔石……自身が倒したモンスター達の名残に囲まれながら、アイズの声は迷宮に木霊した……その様子を見て、痛々しそうに目を背ける者と、声を掛けようとする者……しかし、それらはアイズの顔

を見て動きを止めた……気付いたのだ。どの様な慰めの言葉も、今の彼女には無意味である」と理解したのだ。

「アイズ……今回は遠征じゃないんだ。僕たちは前の遠征で飛んだ分の資産を取り戻す為に来ている……もう充分だ——戻るよ」

彼方へ行つていた意識は、フィンの声を聞きつけ、途端に現実へと返る——だが、彼女はフィンの言葉を聞き、焦り始める。

「フィン……私、もう少し残っちゃ駄目かな?」

「まあ、言うと思つたけどね……駄目だ」

アイズの願いを読んでいたのか、フィンは躊躇うことは一切せず、強い口調で切り捨てる。彼はロキ・ファミアの団長——多くの団員の命を預かる団長として、アイズの我が儘を許すことはできない。

彼のその言葉に、アイズの事を案じる他の団員達は安堵の息を吐く……しかし、それは——

「ならば、フィン……私も残ろう」

「わかつた——許可するよ」

「「ええ!?!」」

——驚愕の悲鳴に変わる。



「すまん……フィン。この子が『我が儘』を言うのは滅多に無い事なので……」

「解つてるよ。苦勞するね君も……親としてね」

リヴェリアの言葉を勝手知つたる風に相槌をうつフィン……この辺りの感情の機敏を汲むことが出来るのは、アイズやレフィーヤ達が生まれるよりも以前から築き上げてきた信頼がなせる技だろう。

「でも、ファミリアの年長者として……或いは副団長としても、君は自分の言葉に責任と覚悟を持たなければならぬ……」

「……解っているさ——そしてすまない。ありがとう」

だが、付き合いが長い——それは、必ずしも決断を甘くする理由にはならない。

この場合は副団長として、団員の行動に全ての責任を背負う覚悟を決めたリヴェリアからの進言を、団長としてフィンが受け入れたということだ。

もし、アイズに何かあつた場合、若しくは何かをしてしまった場合——責任は全て、リヴェリアが取ると言うこと……そして、その場合、フィンが団長として彼女を容赦なく罰するだろう。それが団長としての責務故に——リヴェリアにも、それが解っている。しかし、ソレでも彼女はアイズの独断を後押しした自分を咎めることなく、許可を出した彼に感謝した。

「わ、私も同行しますー！」

今のアイズを一人にはさせたくないと、彼女を信仰するレフィーヤは、サポーターでもなんでもやるからと同行を希望した。

「あ、それなら私も残る——なんだ簡単じゃん」

アマゾネスの双子の片割れであるティオナもまた、彼女達に着いていくことを望む――

「駄目よ。分けられる食料に余裕がないんだから……精々二人分が限界よ……」

「ええ〜」

だが、しかし、彼女達の仲間を思う意思是、同じく双子の片割れであるティオネの現実的な意見によって阻まれる。

彼女達ロキ・ファミリアは目的はあくまでも資金稼ぎ……当然、余分な食料など多くは持つてきてはいけない。ここから、地上に戻るまでには、時間にして数日はダンジョンに籠らなければならぬ。それに予期せぬトラブル等が起こりうる可能性もあるので、それほど多くの食料を別動隊に分ける余裕は無いのだ。

分けられても二人分——それが、ティオネの判断。

そして、それは間違っていない——それが、分かっているからこそレフィーヤとティオナの二人は不満の声を挙げこそすれ、それに嘯みつく真似もしない。

「ア〜イズ!」

「テイオナ……心配かけてごめんなき——ッ!?」

自身に駆け寄ってくるテイオナに対して謝罪をしようとした矢先、テイオナのデコピンがアイズのおでこに炸裂する。

ただのデコピンと侮るなかれ……そこはパワー特化型の第一級冒険者であるテイオナのデコピンは、並みの冒険者なら悶絶物の一撃である。

アイズも同じくLv. 5とは言え、不意を突かれた為、額を押さえながら、若干涙目になる事は避けられない。

「地上<sup>うえ</sup>で会おうね！」

文句を言おうとして、顔を上げるとそこにはテイオナの人懐っこい笑顔があった。

その言葉は、アイズの葛藤を吹き飛ばすには充分な威力を持っていた。

アイズは敵わないな……と思った。フィンとリヴェリア、ガレスの間に在る絆は、自分達には立ち入れないものがある。アイズも余裕の無かった昔とは違い、キチンと周りの人に向き合いつつあるが、その切っ掛けをくれたのはテイオナだった。

人付き合いの苦手なアイズは相手が話し掛けて来ても、何を話して良いのか分からないう時が多々にあるが、昔はそれが更に顕著だった。そんな当時のアイズと物怖じせずに向き合い、手を引いてくれたアマゾネスの少女——彼女とならば、いずれファミリアの先人達のような関係になれるかもしれないとアイズは思っている。

「うん。必ず——」

だからこそ、アイズは仲間として——友達として『また会おうね』と約束する。

自分はこれから相当な無茶をする——けど、必ず生きて戻るとアイズは心に刻み付けた。

そして、少女は『階層主』に命がけの戦いに挑む——その先にある大きな背中を求めて、命を懸けて冒険に挑み、見事成し遂げて見せた。

その数日後【剣姫】——アイズ・ヴァレンシユタインの『Lv. 6』へのランクアップがオラリオから全世界に向けて発信された——

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

『巨星は見えているか?』

とある高野——時刻は夜。燦然と輝く星空に照らされながら老人は己の後ろに膝をつく子供に尋ねる。

『はい。我が師『アルデバラン』さま——天には確かに、貴方と同じ名の『アルデバラン巨星』が光輝いております』

そうか——と、既に老いによつて見えなくなつてしまつた目を閉じたまま、『アルデバラン巨星』と呼ばれた老人は天を見上げるように顔を挙げた。

「エルナトよ——」  
「ハッ——」

老人の呼び掛けに、幼さを多分に残した少年は毅然に返事をした——

『タウラス牡牛座のアルデバラン』——その名を『セイント聖闘士』で知らぬ者は居ないと言われる程の英雄であり、『アリエス牡羊座のシオン』、『ライプラ天秤座の童虎』と同じく、二百年前の『聖戦』を戦つた、数少ない生き残りの聖闘士……だが、少年の師であるアルデバランはそれを言つと、自分は彼等に並ぶような器ではないと否定する。

アルデバランの話によれば、当時の聖戦を戦つた〔タウラス牡牛座の黄金聖闘士〕は彼ではなく、その師である先代だという。そして、現在は聖闘士の多くが英雄と讃える少年の師は、当時は守護星座の加護を持たない——ただの『雑兵』に過ぎなかつたのだという……

それ故にアルデバランは、時々自らを卑下するような事を言うのだ。

エルナトからすればそれは面白くないことだ。

確かに心無い者は、殆どの聖闘士が死に絶えた聖戦の後だったからこそ『雑兵如き』でも成り上がりが可能だったのだと陰で謳っているのは知っている……だが、エルメトは彼の過去を聞いてもその尊敬の気持ちは一切失わなかった。

確かに黄金聖闘士として、前聖戦の最前線に居ながら生き残った『教皇』と『老師』は偉大な存在だ。それは間違いない。

しかし、聖戦の後……聖闘士達だけではなく先代の女神アテナさえも亡きその後、聖闘士を束ねる『教皇』となったシオンと、五老峰の滝の前で魔星の監視をアテナに命ぜられた童虎は、それぞれの理由で簡単には動けなくなった。

そんな聖戦を闘い抜いた聖闘士達が動けぬ中で、二百年以上の長きに渡り、聖域サンクチュアリを支え、人々の自由と平和、地上の愛と正義を護り続けてきたのは誰か——それは、当然彼『牡牛座タウラスのアルデバラン』その人に他ならない。

教皇と老師が聖戦で護り抜いた地上を、アルデバランは二百年以上もの長い間支え続けたのだ——その年老いた双肩で……他の誰にそのような偉業を成し遂げられようか

……

「エルナトよ——お前は聖闘士として何を成したい?」

「私は……護り抜きたいです」

アルデバランの問いに即答する——そう、少年は目の前の師こそが誰よりも偉大であると信じて疑っていない。

故に、彼のように在りたいと思うのは当然の帰結……アルデバランの様に、この地上に存在する尊きものを全て護り、背負える聖闘士となる。それがエルナトの目標だった……

「そうか……私はなエルナトよ——ずっと聖闘士セイイントという存在に憧れて来たのだよ」

アルデバランは、少しの間その老いて皺が目立つようになった顔をエルナトへと向け、再び空を見上げた。

やはり歳のためか、彼の声は所々で掠れ、聞き取りにくい……だが、少年エルメトは師の言葉を一語一句聞き逃すまいと真剣な表情で続きを待った。

「二百年前の聖戦で戦った聖闘士達は、黄金も白銀も青銅も、皆が皆、心の底から地上を愛しておった……それ故に、命を投げ出すではなく『命』と『愛』を天秤に掛け、その上で礎となることを選んだのだ。その最期は皆壮絶だった——しかし、彼等の死は断じて『悲劇』ではない——」

「善なる心を持つ聖闘士達の死が、悲劇ではないと言うのですか?」

エルメトには想像もつかない。悲劇ではないと言ふのならば、何故地上を守ろうと死んでいった過去の聖闘士達は死ななければならなかったのか……恐ろしかっただろう。苦しかったろう。そして、何より『無念』だったろう。志半ばで果てる事が――

エルメトは聖闘士候補生……闘いには死が付き物であると理解はしている。しかし、そこに納得など出来よう筈もない。聖闘士とは地上の愛と正義、平和を護る女神アテナの守護者だ。

その闘いは等しく、大義の為であるとエルメトは考えている。

大義を貫くためには犠牲はつきものではあるが、それらは等しく悲劇である筈なのだ

「何故なら彼等は繋げたからだ……その『心』を、『想い』を――そして、彼等から私が引き継いだ『想い』は全て、私からお前の中にも根付いているのだ……」

そう言い、アルデバランは老いて痩せ細った右手を開いて、自分の胸に当てる――

「ッ!? それは――」

師のその言葉を聞いた瞬間――エルメトは体に電流が流れたかのような衝撃が走った――

次へ、己の後に続く者達へと――

次代へ受け継がれる『想い』――その通りだ。仮に己が戦いに命を賭して、その結果



死したとしても、次へと繋ぐことが出来たのであれば——その死は断じて……断じて悲劇などではないだろう。

「黄金ゴールドも、白銀シルバーも、青銅ブロンズも、そして聖衣クロス無き雑兵達すらも——あの時代の聖闘士達は、皆それぞれ『愛する何か』を次代へと繋げる為に戦ったのだ……」

その言葉に秘められた思いは、重くのし掛かるように少年の体を軋ませる……少年にはその重みが、前聖戦の聖闘士達の命の重みのように感じられる。

そして、ハッした。エルメトはこれこそが託された物だと理解したのだ。

「彼等は私にとって永遠の憧れ——消して沈むこと無き『巨星ひかり』そのものよ——」  
エルメトは目を閉じる——そうすれば、師の言葉から感じられるからだ。

前聖戦の聖闘士達が以下に戦ったのかを——その苛烈さを、激しさを——その壮絶な最期を——

気が付けば、少年の目からは、止めどない涙の滴が流れ出ていた——

「だからこそ、私は『紡ぐ者』で良いのだ……彼等の残した『想い』を後世の者達へ……次代へと『紡ぎ』それを『繋ぐ』——それこそ私の天命だと今は思っている」

それは違う——そう言いたかった。

確かに前聖戦の聖闘士の思いを『繋げる』という目的もあつたのだろう。しかし、苛烈を極める聖闘士の修行で教えの中で、少年は確かに師の『想い』を感じていた。

だが、それを口に出すことはできない。何故なら師は、既にそう己で定めてしまっているからだ。己の心の在り方を——

二百年以上にも渡る敬愛する師の『信念』を引け合いに出されては、ただ弟子であるだけの十年も生きていない子供である己の言葉に如何様な重みがあるうか？

否——その様な中途半端な言葉など口にするに値しない。

「我が師アルデバラン様——」

「何だ？　我が弟子エルナトよ……」

ならば、自分の師に伝える言葉は決まっている——

「貴方が『紡いだ思い』——そして、貴方の『想い』はこの俺が受け継ぎます……そして繋いで見せます——次代の聖闘士達へ——」

その言葉には、アルデバランのそれにも負けない程重い信念が籠っていた。

そして、その言葉を聞いたアルデバランは、弟子の方へ目を向けると驚いたように目を見開く——弟子の背後には五人の聖衣ケクロスを纏った少年達が立っていたからだ——今の弟子よりも少なくとも六か七つ程年上であろう少年達の背後にはそれぞれの守護星座が輝いていた——

「【アンドロメダ座】キグナス【白鳥座】ドラゴン【龍座】フェニックス【不死鳥座】——そして……【天馬座】ペガサス——そうですか……貴方は次代そごに居るのですね『テンマさん』——」

それは、或いは彼が『死に際』に視る一種の幻覚だったのかも知れない……しかし、アルデバランは確信していた。

今自分が見た『それ』こそが『次代』なのだ——

「……は？ 師よ——今なんと仰いましたか？」

気を張ってはいいたが、余程緊張していたのか、ポツリと師の口から漏れた言葉をエルメトは聞き逃してしまう。そんな弟子に何でもないといい、やがてアルデバランは立ち上がった——

「エルメトよ——お前は優しい。優し過ぎる程にな——それ故に、我が心を受け継いだお前は私の守ろうとした全てを護ろうとする。その優しさ故にな。それもお前の本質よ……別段とやかく言うつもりはない。しかし、これだけは覚えておくのだ……——」

少年は生涯において、この日の事を忘れることはない——何故ならこの日は、己が最も尊敬し、敬愛する師が自分の道を示してくれた日であったからだ——

「そして、お前にこの技を残す——この技は、歴代の『牡牛座』<sup>タウラス</sup>が次代へと引き継がせてきた『技』であり、全ての牡牛座の『誇り』であり、『想い』でもある——」

全ての『牡牛座』<sup>タウラス</sup>の『想い』——その言葉の意味を理解し、エルメトは思わず息を呑んだ。

そして、瞬きすらしてなるものかと目を見開き、この目に焼き付けると心に誓う——  
そして、アルデバランは両腕を胸の前で組んだ。

「これは、師匠わたしから弟子おまえに授ける最後の教えであり、同時に試験でもある——この技を身に付けた暁には、この私の後を継ぎ『女神アテナ』の名の下、〔牡牛座タウラスの黄金聖闘士ゴールドセイラント〕として地上の愛と正義を護るのだ！」

「はいっ！ 必ずや——」

「——では見せよう……燃え上がれ！ 我が『小宇宙コスモ』よ!!」

その言霊を叫ぶと同時にアルデバランの肉体から、凄まじい『小宇宙コスモ』が沸きだし、それに呼応して、彼と接している地面や草木が振動し始める——

(なんと凄まじく、力強い小宇宙コスモだ！ 俺の10倍——いや、それ以上……!?)

黄金聖闘士の候補生と言うこともあり、エルメトの潜在能力は高い。

まだ十にも満たない幼い身でありながら、その力は既に並の白銀聖闘士シルバースейラントを越える実力と小宇宙を持っている。

だが、そのエルナトをもつてして、アルデバランの小宇宙は桁違いと思わせる迫力——

それは、二百年の思い——牡牛座タウラスアルデバランが、その生涯で放つ最高の一撃。

『「グレートホーン」!!』

その日——とある地域のとある場所で、数百kmに渡り、上空から『雲』が消失するという謎の事態が発生した——たまたま、その場からを映していた人工衛星は宇宙から、その場から『黄金の牛』が地球から宇宙へと駆け上がるのを映像に捉え、一時話題となるが、とある『場所』からの圧力によりあっさりとその映像は握り潰され、ほんの数日で噂は消える。

そして、それらの騒動に某国が揺れる中で、一人の老人が二百年以上の人生に終焉を迎えた——その最期は、仁王立ちのまま、立ったままに絶命していたというが、その真相を知るのは、彼の最期に立ち会った弟子である少年だけであった——

それから一年後……彼と同じ牡牛座の黄金聖衣を纏う少年が聖域を訪れる——彼は前任者と同じ名前……アルデバランと名乗った。

こうして、牡牛座は次の世代へ、『聖衣』と共に先代の『技』と『想い』も受け継がれ——そして、『先代』から『次代』へ——『巨星』の名は継承された。

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

「……む、俺としたことが……寝入っていたか」

とある場所の、大きな巨木の前で彼は目を覚ました——彼は巨木の前で胡座をかいて座り込みながら、目を擦る。

「しかし、随分と懐かしい夢だったな……」

——とうの昔に割り切った筈の過去を夢に視るとは……何かの暗示か？

彼はその『ミノタウロス』を彷彿とさせる巨体を立ち上げながら小声でそう呟いた。

その際に、彼が身に纏う黄金の鎧——【タウラス牡牛座のゴールドクロス黄金聖衣】が、微かに光輝くが、アルデバランは気付かなかった。

「いや、俺はそんなもの予知夢とは縁遠いしな……となると、本当にただの夢か……」

彼の声には喜色の色が見られ、夢の中とはいえ、偉大なる師ともう一度会えたことで、どこか気分が良さげだった……が、何かの気配を感じたのか、その相貌を歪める……

「やれやれ……折角人が心境に浸っていたと言うのに……不粋だが——俺は俺の仕事を  
するのみ!!」

そして、彼の前に巨大な魔物——『モンスター』が現れた。

そのモンスターは、その巨体を翻し、彼を視界に捉えると雄叫びを挙げ、彼の方に向

かつて巨体を走らせる——人間の中では素晴らしく、ガタイの良い巨漢である彼と比べても遙かに巨大な肉体と、虎のような体に、蝙蝠を彷彿とさせる巨大な羽、蠍を連想させる長い尾——それらを併せ持つ巨大モンスターは、その鋭い牙と爪をもって、彼に襲いかかる——

全長10Mメートルを優に越える巨体が自身に向かって猛スピードで襲い来る——その様子を見て、彼も自らの腕を前に出し、受け止める姿勢を取った。

——そして『怪物』と『人』……二つの力が正面からぶつかり合う——そして、怪物に比べて遙かに体重の軽いアルデバランが勢いに負けて、後ろへ押されるが、30Mメートル程押されたところで、アルデバランの後退と怪物の前進が止まる。

「マンティコアか!! 神話の怪物と『力比べ』が出来るとはな……!!」

怪物の突進を両腕の豪腕で止め、現在は拮抗して見せながら、彼は楽しげに声を挙げた——まさか、自分がここまで押されるとは思ってもいなかったのだ……

「だが、力だけではこのアルデバランを越えることはできない!!」

そして、今度は彼が雄叫びを上げ、マンティコアを押し始める——その様子は、怪物を知るオラリオの冒険者ならば、まさに常識外れと目を疑う光景だ。

怪物……【マンティ・コア】はオラリオの基準でLv. 7にカテゴリーされる怪物であり、ダンジョン46階層の迷宮モンスターレックスの孤王なのだから——遭遇すれば、『ロキ・ファミリア』

や『フレイヤ・ファミリア』の最精鋭すらも死を覚悟しなければならぬ程の怪物。

フレイヤ・ファミリアには、このモンスターと同じくLv. 7であり、オラリオ最強の冒険者と名高い『オツタル』が在籍しているが、モンスターと人との間には、そもそも体積や体重で比べ物にならない差がある。故にマンティコアと力で正面から渡り合うなど、オラリオ最強の冒険者である『オツタル』ですら不可能である。

だが、アルデバランは拮抗し、あまつさえ自身よりも遥かに大きく、重いマンティコアを押して見せた――

マンティコアも、まさか自身よりも遥かに小さい人間如きが自分を押して見せるのが予想外だったのか、手足を踏ん張りながら、その表情を歪める。

「どうした！ その程度か!!」

「ガアア!!」

マンティコアは、その一本一本がアルデバランの肉体よりも太い四肢を更に膨張させ、力を込める……また、アルデバランも自らの両腕に掛かる力が増したのを感じとり、限界まで踏ん張る――

「グウツ！ オオオオツ!!」

「グルウルアア!!」

モンスター  
「そして、怪物と英雄——」

セイント  
——両者の力比べは完全な拮抗を見せる！



しかし、その拮抗はマンティコアが、その蠍の尾をアルデバランに向けて伸ばしたところまで終了する。

「なんとツ!? だが!!」

アルデバランは、自身に迫り来る尾が到達する前に、掴んでいたマンティコアの頭部から、右腕を離し、その豪腕で殴り飛ばす——黄金聖闘士随一のパワーと瞬発力を持つアルデバランは、その気になれば、ほんの一瞬で全力の拳打を繰り出すことが出来る——この攻撃には怪物も虚を突かれ、やや後方に飛ばされるも、その目には殺意を迸らせながら、アルデバランを見据える——

「流石は神話の怪物よ……俺の全力の攻撃を受けても倒れることなく睨み付けてくるとは……大したタフさだ」

彼は本当に感心した。そんな芸当が出来るのは同じ黄金聖衣を着た黄金聖闘士か、かつて牡牛座の角を折って見せた若き聖闘士ぐらいだったからだ。

「だが——これで終わりだ!」

アルデバランは、両腕を胸の前で腕組みし、構えながらマンティコアを視線で捉える

「これぞ、牡牛座の奥義——」

「ガアアツ!!」

アルデバランの構えを見て、野生の勘か、或いは魔物の直感か——兎に角、不味いと判断した怪物は、アルデバランに向かって先程と同様の速度をもって襲いかかる——

だが——遅い。黄金随一の力と速さを併せ持つ彼から見たら、その突進は余りにも遅すぎる。

「くらえ！ 『グレートホーン』!!」

腕組みの体制から、居合いの要領で放たれる両腕の掌打——全力の瞬発力を持って放たれたそれは、アルデバラン自身の力強い小宇宙を伴って、衝撃波として怪物に向けて放たれた——

アルデバランの放った『グレートホーン』は、衝撃波として辺りに拡散し、怪物を吹き飛ばす——マンティコアは、その一撃に耐えられず、尋常ではないダメージをその身に受けながら、後方に地面を転がりながらやがて、勢いを失い地面に投げ出されると、ゆっくりと肉体を消滅させていった……

モンスターには、魔石と呼ばれる核が在り、それを破壊されたら最後、肉体のダメージの有無に関わらず消滅する。

アルデバランの放った奥義は、肉体だけではなく、マンティコアの分厚い肉に守られた胸の魔石すらも衝撃で破壊したのだ……

「む？…なんだこれは？」

マンティコアの絶命を確認するために、その場に歩いてきたアルデバランは疑問の声を挙げた。

マンティコアが消滅した場所には、アルデバランのグレートホーンによつて砕かれた魔石と、それとは別の何かが落ちていたからだ。

「石……ではないな……これは『牙』か？」

ドロップアイテム——モンスターは死した際に、その核であった魔石を除いて肉体は消滅するが、稀にそのモンスターの最も発達した部位が消滅せずに残ることがあるのだ。

「まあ、良いか……ふん！」

アルデバランは、砕けた魔石と、そのマンティコアの牙を、ある方向に向かって投げる——そして、それらが落ちたさきには、無数の魔石が山のように積み重ねられた場所——アルデバランが倒したモンスター達の成れの果てが山のように積み上げられた場所だった。

「それにしても、今の怪物はとてつもなく強かったな……少なくとも並の白銀シルバーでは、太刀打ちできない……」

アルデバランは、自身がたつた今、倒して見せた怪物の強さを正確に量り、その上で冷静にそう判断した。

ゴールドセイラント  
黄金聖闘士ならば、苦もなく倒せる相手ではあるが、並の白銀聖闘士や、青銅聖闘士では決して倒せない。

青銅聖闘士でありながら、黄金聖闘士が護る十二宮を突破した『星矢』を含めた五人の青銅聖闘士達ならば多少は苦勞するが、倒せるだろうが……それでも、それなりに苦戦は免れないだろう。

このレベルの敵がぞろぞろ出てくるようでは、やはり——

「やはり『使命のため』には、俺はここを動く訳にはいかんか……そちらは任せただぞ——皆……」

その言葉に、どのような意味があるのか……アルデバランは霧の深いその場所で、巨木の前で座り込む。

地上と迷宮で戦っているであろう仲間達の無事を祈りながら——

## 天秤座（ライブラ）起つ——動き出す聖闘士達

疾走する——

淡い光を放つ、ダンジョンの壁に照らされる通路を少年は最近自信が着いてきた足で駆ける。

少年の目の前には『キラールアント』——名前の通り、蟻のような特徴を備えたモンスターが四体……

「ハアツ！」

『ガギイツ』

雄々しい、叫びと共に少年——ベル・クラネルは、手に持つ得物を疾走の勢いのままに得物に振るう！

速度の乗った『ヘステイア神様のナイフ』による一閃は、抵抗を許さず、モンスターの固い外骨格を切り裂き、キラールアントの頭部が宙を舞った。

（よし、まずは一匹！）

『ギギイ!』

『ギイギギツ!』

仲間を殺された事によって、残り三匹のキラアアント達は当然ベルの存在に気づき、彼を食らおうとその手の鉤爪をベルに向かって振るうが――

「フツッ・ ヤッ!!」

その鉤爪の付いた腕部を間接の部分から左手に持つもう一つの得物であるギルドから支給された短刀で切断する――、一瞬で切断された為か、その事を気付かずにそのままにキラアアントは、腕を振るうが当然武器が着いておらず、短くなった腕はベルには当たらずに空を切るだけであった。

「ハッ!」

そのまま、腕を失ったキラアアントの頭部にヘステイア・ナイフを一閃し、最初に倒した個体と同じく頭部を切断すると、間髪入れずに体の動きを最小限に回転させ、一番近くの個体の頭部に全体重を乗せた回し蹴りを食らわした。

(二匹、三匹……よし、これで――)

ベルは回し蹴りを受けた個体の頭部が、明後日の方向に飛んでいくのを横目で確認しながら、最後の一匹に向かう――

「――ラストオ!!」

『ギ——』

最後の個体に断末魔さえも上げさせることなく、ベルは危なげ無く最後の個体の頭部を切り裂く——

「——ふうく……」

辺りにモンスターの影がない事を確認しながら、戦闘を終えたベルは息を吐いた……当然、この間も一切油断などしない。

何処から『敵』が現れるか解らないダンジョンのにおいて、戦闘を終えた後の油断が、最も命取りであると『師』から叩き込まれているからだ。

文字通り『肉体』に……故にベルは緊張を解きこそすれど、ダンジョンの中では一切の油断はしない。

熟練の冒険者がダンジョンの中で経験を積み、自然と学んでいく事を、ベルは既に身に付けつつあった。

「ベル様——」

「あ、リリ」

油断せず辺りを見据えていたベルの後ろから、サポーターの少女『リリルカ・アード』が追い付く。

リリルカは、つい先日サポーターとしてベルと契約を結んだ『ソーマ・ファミリア』に

所属する冒険者であるが、本人曰く、既に冒険者としての大成を諦め、専ら契約を結んだ冒険者の専属のサポーターとして専念しているらしい。

彼女は、素早い手捌きでキラアートの死骸から魔石を取り出していく……それを見て、ベルもまた彼女を手伝うべく、魔石を取り出す作業に入るが、彼女とは圧倒的に手際が違う。

サポーター専門を自称するだけあり、その手際は冒険者になつて半月足らずのベルとは隔絶しており、ベルが拙い手際で一匹のキラアートから魔石を取り出す頃には、彼女は既に他の三匹の魔石とドロップアイテムを自身のバックパックに仕舞い終えていた……

その自分よりも年下の『シアンローブ犬人』の少女の腕前を見て、ベルは何度見ても凄いと感心の溜め息を吐く……

「それにしても……凄まじいですね……」  
リリルカは、魔石を失い、崩れ落ちていくキラアートの死骸を見ながら、ふと小声で呟いた……

彼女達の通つた後には——正確には、ベルの通つた後には、大量の今のような魔石を失つたモンスターの死骸が転がっている。

それらは、全て、ベルが一人で倒し、彼女が魔石を抜き取つたが故に出来た光景なの



だが……そのほとんどのモンスターの死骸が、先程のキラアアントと同じく頭部をを失った物なのだ。

末恐ろしい……ベルに対してリルルカが抱いた感想がそれである。

恐らくは、自身に何らかの制約でも課しているのか、先程からベルはモンスターを倒す際には、頭部又は急所を狙って仕留めているのだ。

その中には、人間大の大きさを持つキラアアントやウオーシャドウと違い、小さいモンスターも居る……にも、関わらず全て急所を狙っている……この結果を見るに、ベルは他の並み居る冒険者達とは違い、富や名誉を求めて居るわけではない。

彼は明確に——ダンジョンで『修行』をしている。リルルカは、そう感じ取った。

凄まじい……彼女がベルをそう評したのは、別にベルが強いからではない。

確かにベルは現時点でリルルカよりも高い実力を持つているが、それはリルルカの【能力値<sup>アビリティ</sup>】が低いからである。むしろ、彼が総合的には『Lv. 1』の冒険者の中では上位に食い込むのは間違いないが、この程度ならば、彼女自身、正面から戦わなければ充分に対応は可能と思っっている。

サポーターとして彼女は多くの冒険者を見てきたのだ。以下にベルが強かろうと、それはLv. 1の中での話である。Lv. 1の冒険者とは隔絶した実力をもつ上級冒険者達がオラリオには多数存在し、それらの者達がベルよりも遥かに強い事を彼女は

知っている。

リルルカが何よりも驚いているのは、ベルの成長速度だ……ほんの数日前までは、ただの冒険者なりたての田舎の少年だった……

（それにしたって、冒険者になりたてのヒューマンにしては異常に「ステイタス」が高いとは思いましたけど……これは、もう才能がどうかの話ではなさそうです……）

リルルカは確信する。このままの成長速度で飛躍し続けていけば、そう遠くない内にレベルアップすら果たしてしまうだろう……と。

レベルアップとは、ただ鍛えたり、戦ったりするだけでは出来ない……それを成すには、人が——下界の子らに恩恵を与えた『神々』すらも称賛する偉業を成し遂げる必要があるのだ。

偉業とは、文字通りの意味で『偉大なる業績』のこと——ダンジョン内での偉業で一番分かりやすいのは、格上の敵との闘争に勝利することである。

それも、少々程度の生半可な格上では駄目だ。文字通りの意味でレベルが違う相手との闘争が不可欠だろう。Lv. 1のベルならば、Lv. 2以上にカテゴライズされる魔物がそれに当たる。

だが、そんなことは普通は絶対に成し得ないだろう。事実、オラリオに数多くいる冒険者の内、その大半がLv. 1のままにその生涯を終えるか、冒険者を引退しているの

だ。

だが、ベルの成長力はそれらの事実を知るリリルカをして、そんな偉業を成し遂げてしまえるのではと考えさせてしまうほど異常である。

そして、ベルはリリルカの思う通り、冒険者になり半月にも満たない期間で既に「ステイタス」の項目が大半がC→B……【敏捷】と【耐久】に至ってはAに到っている。これらは、全て彼の師匠と毎朝行われている修行の名を借りた壮絶なイジメ——もとい、組手の成果だ。

毎朝にわたって『格上』という言葉すらも生温い、超絶した『英雄』にボコボコにされては、彼の扱う『小宇宙』という異能の力による治癒によって、肉体的には数時間で完全に復活させられ、更には対人経験以外も積むために毎日欠かさずにダンジョンに送り出されるというサイクルを毎日行っていれば、ベルでなくとも耐久は成長するだろう。

ベルは既に毎日のように、アイオロスに弟子入りしたことを後悔しているが、それでも、弱音を吐かずに今も続けているのは、その厳しい修行の見返りとして、この急激な成長が伴っている。

目標に向かって着実に進んでいるという感覚は、毎日の後悔を塗り潰すほどの実感としてベルの中に刻まれているのだ。

そして、現実としてベルはステイタス的にも、技術的にも飛躍し続けている——全ては『情景の少女』を越える為——『英雄』へと至る為——

『少年』は走り続ける——冒険者としての高みを目指して——

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

自らの弟子であるベルがダンジョンに赴き、今日の食いぶちとファミアリアの資金を稼いでいるその頃——彼の『師匠』であり【射手座の黄金聖闘士】であるアイオロスは、出掛ける前のファミアリアの主神であるヘステリアと話し込んでいた——

「なるほど……やはり、ベルの成長にはカラクリが在りましたか……」

「そうだよ……よりにもよって本人の資質に関係なく、『早熟』させちゃうなんて……前代未聞だよ」

「【憧憬一途】ですか——最近のベルの成長度合いは少々異常に過ぎると思つてはいましたが……あれが『恩恵』と『スキル』によるものだとするのなら恐ろしいですね……」

幼い容姿の女神と、逞しい肉体の偉丈夫が真剣な音声で話し合うの内容は、彼女の眷

属であり、彼の弟子である一人の少年について……

「しかも、あれは「ステイタス」のみならず、それには反映されない『技術』にも効果が及んでいますね」

「ああ、やつぱり？」

「ええ、ここ数日は日毎にキレと重さが増しています——『能力値』<sup>アビリティ</sup>の向上よりも、私にはそちらの方が信じられませんか」

アイオロスは、今朝の修行風景を思い出すと、自らの胸の内を明かす……そう、ここ数日のベルは明らかに『異常』であった——と。

恐らくは、アイオロスが師として教えたことを、その日の内にダンジョンで実践し、自分なりに研ぎすましているのだろう——次の日の朝に、修行を始めると、前日とは明らかに違う練度の動きを見せる。

まるで、最後に稽古をつけた日から、数日間の期間を開けたかのような錯覚を覚えるほどに『動き』その物が向上しているのだ。

最初は、その成長の早さを『若いな』ですませていたアイオロスもそれが毎日起これば、流石に異常に気付き、おかしいと思うようになる。

冒険者が皆、こんな速度で強くなったら、簡単に聖闘士を越えるぞ——と、思い至るになって、ようやくヘステイアに事情を聞くことを決意したのであった。

そして、現在は『それ』——リアリス・フレゼ【憧憬一途】について、教えてもらっているというわけだ。

それにしても……と、アイオロスは考える……このリアリス・フレゼ【憧憬一途】はその特性上は——  
 そこまで思い至ったところで、彼はヘステイアと初めて会った時に、彼女から聞いた話を思い出した。

それによると、ベルの『想いの先にいる人物』は確か——

「思いが強ければ強いほど効果が上昇する……なるほど——つまりは、その【劍姫】に対する懸念の気持ち——」

「あ、ああ!! 何でよりにもよってロキの所の眷属何かに!! 身近にボクというものが在りながら、ベル君の浮気者め!!」

【劍姫】と、アイズ・ヴァレンシユタインの名前を出した途端に、まるで発狂したかのように雰囲気が一変する女神——それを見た瞬間、アイオロスは己が触れてはいけないものに触れてしまったことを悟った。

「へ、ヘステイア様」

「なんで……なんで、ボクじゃないんだよ!? ボクはベル君なら何時でもバツチ来いって思っ——なんだい?」

怒りの表情で、ここにはいない劍姫なる少女とベルに対しての不平不満を言い募る女

神にアイオロスは、恐る恐る声を掛けた。

世界が変わろうと、女の嫉妬は怖いなど再度認識したが、今日は用件があるので、外に出掛ける旨を伝える——

「アイオロス君が外に出掛けるなんて珍しいね？　最近は、ホームに籠りきりだったのに……」

そのニートの様な言い方は勘弁願いたいな、と思いつつも、ヘステイアの頭から、ベルとアイズ・ヴァレンシユタインの二人の話題を追い出せたことに、内心安堵する。

だが、ヘステイアの言う通り、ここ数日のアイオロスはホームに居る時間の方が長い……外に出ていないと言うわけではないのだが、ヘステイアが『ヘファイストス』なる女神の元へバイトに、ベルがダンジョンに修行と資金稼ぎにそれぞれ出掛けて居る間、居候の義務としてホームを護っているのだ。

ヘステイア・ファミリアのホームが元のボロ協会であったのなら、泥棒などが入ってくる心配はしなくてもいいのだが、数日前にアイオロスは自身を拾ってくれた女神ヘステイアが廃墟同然の教会で寝食をしているのが堪えられずに、一人で改築——たったの三日足らずで、廃墟同然だった教会は『女神ヘステイア』を奉る新築の教会へと変化を遂げた——

その改装具合足るや、夜通しでの工事のため、一夜だけ他の場所で寝てくれと頼まれ、

二人がヘスティアの神友であるミアハのファミリアに泊まり、翌日帰ってきた時には、あまりの変貌具合に顎が外れるのではないかと思うぐらいに口を開けていたのは、アイオロスの記憶にも新しい。

そんな訳で、以前のボロ教会であれば、泥棒すらもスルーほどのボロ具合故に、盗人の心配をしなくても良かったが、今のホームは神の根城と言うに相応しい立派な外観である為、人が居ないと間違ひなく目を付けられる——実際、アイオロスは既に何度もそういう輩を確保し、住居不法侵入の現行犯としてギルドに突き出しているのだ。

それ故に、アイオロスが外出をするのは、二人が帰ってきてから——それも、食事の用意から、片付けまでの全てを終わらせ、ベルとヘスティアの二人が寝静まった頃に出ていくのだ。

無論、大恩あるヘスティアと、翌日には修行が決まっているベルの安眠を守るための罫を用意した後に——

「あ、もしかして……仲間の子達を探しに行くのかい？」

ヘスティアは、彼と同じく、この世界に存在するであろう彼の仲間を探すのかと思つたので、それを尋ねる。

「ええ……それも、ありますが——それは、そんなに簡単にはいかないと思いますし、それとは別件で少々、要件がありました……」



「簡単にはいかない?」

「はい。恐らくは我等黄金聖闘士ゴールドセイラントは、この世界に散り散りに散らばった状態で復活しているはずですよ」

そうであるならば、探すのは困難だ——何せ、アイオロス達の居た地球と違い、この世界では情報の伝達が余り発達していない。テレビもラジオも無い。精々が『ギルド』が世界各地に支部を置いて、それらの部署と連絡を取り合つて、高名な冒険者やオラリオの出来事を配信するぐらいだろう。にも関わらず、この世界自体の広さは正確なところは測つてみないと定かではないが、恐らくは地球と同じぐらいには広いとアイオロスは感じている。

それを考えると、その中からたった十二人の人間を探すなど極めて困難だ。

普通は不可能と言つて良い……無論、アイオロスは仲間達の生存を疑つてはいない。

そこは聖闘士最高峰の力を持つ十二人だ。その生命力は侮れない。常識や物理の法則から『片足』どころか『全身余すところなく』逸脱している黄金聖闘士ならば、例えばダンジョンの中に転移していたとしても、必ずや生き残っているだろう。

そうアイオロスは考えていた。そして、彼は知らないが、事実として『シユラ』『シャカ』そして『シャカの感知した者』も含めた三人は、逞しく生き残っている。

「ボクは解らないけど、その小宇宙とか言うのを辿つて見つけることは出来ないのかい

「？」

「……これは推測なのですが……黄金聖闘士達は、恐らく様子見も兼ねて、今は力を隠して影に潜んでいる可能性があります……」

小宇宙を辿る——確かに有効な手ではあるのだろう。

しかし——それも、相手が小宇宙を燃やしていると言う前提があつて初めて感知することが可能なのだ。

小宇宙を燃やさなければ、以下に黄金聖闘士とは言え、それは人間にすぎない……誰も居ない空間で探せと言うのならばともかく、これほどまでに生命に溢れた世界で燃やしていない個人の小宇宙を特定するなど不可能である。

「なんで力を隠してるんだい？ 仲間と合流したいなら、そりや都合が悪くないかい？」  
「それは、この状況が不可解だから——ですよ」

「不可解？」

「ええ、私達黄金聖闘士は、十二人全員が嘆きの壁に渾身の小宇宙をぶつけ——死んだ筈です……」

「——!? そ、それは……死ぬ前にこつちに來たつてことは……」

「いえ……少なくとも、私は自分自身の死を確かに認識しました……あの場で確かに私は死んだ筈なのです——」

そう、アイオロスは確かにあの瞬間——自らの死を確信した。ましてや彼は、既に『アイオロス』になる前に一度死んでいるのだ。

彼にとつて、死は一度経験した物だ。その感覚を間違える筈はない……

「二度死んだはずの者が生きている……それも、自分達が生きていた世界とは全く違う世界で——ヘステイア様は、もし己がその様な状況に置かれた場合はどうしますか？」  
「え……えと、それは〜」

アイオロスの質問に、ヘステイアは答えに詰まる……質問が唐突であるということもあるだろうが、そもそも『神』であるヘステイアには『死』という概念がない。

仮に彼女からしたら『下界』であるこの世界で致命傷を負つても、本来いるべき場所である『天界』へと送還されるだけである。

そして、神は天界では死なない……何故ならば、神とは生まれたその瞬間から完全無欠な存在であり『不老不死』であるからだ。

彼女は死を知らない……アイオロス達が生きていた世界に置いては、以下に神とは言えども、人間や他の生き物と同じように『殺せば死ぬ存在』であつたが、この世界に存在する神は『死なない』——そもそも、死という概念が無いからだ。

それ故に神々は、自身に比べたら、どうしようもないほどに劣つた存在にすぎない下界の者達に愛を向ける——何故なら、神は不老不死であり、完璧だから。

完璧であるということは、それは既に存在として完結しているということ。

完全ということは、逆にいうならば『それ以上が無い』という、ある種絶望的な解答に行き着くから……

自らが、これ以上無いくらいに『完璧』で、『完全』で、『完成』し、『完結』している神々は当然ながら『不変』だ——だからこそ、それがどれだけ小さかろうとも、変わり続ける『可能性を持った不完全な存在』に引かれるのかもしれない……

「そう——まず最初に考えるでしょう……自分の身に何が起きたのかを——そして、歴戦の勇者である彼等は——」

「——傍観に徹する……だろうか？」

教会の地下室で話し込んでいた彼等の耳にするりと入り込む美声……

「——アフロディーテ君？」

「失礼します。ヘステリア様」

ヘステリアとアイオロスが、地下室の入り口を見ると超越した美を持つ麗人——アフロディーテが階段を下りてきていた。

彼は、数日前にヘステリア・ファミリアに転がり込んできたアイオロスと同郷の人間であり、同じく『黄金聖闘士』の一人だ。

「アフロディーテ……お前、例の花屋に行くんじゃないのか？」

「生憎と、あそこは今日は休みでね……せつかくなので、この教会の周りをガーデニングしていたら、興味深い話が聞こえてきたので、敬愛すべき女神との会話に興じようとしてを中断して来た次第だ……」

存外に、何処から聞いていたと問うアイオロスに、目線で最初からだと答えるアフロディーテ。

そして、その言葉に『まさか、毒薔薇デモンローズを栽培してないよな？』と一抹の不安を覚えるアイオロスだが、ヘステイアの「傍観……？」という呟きも無視できず、そちらに向き直る。

「ええ……不可解な状況に陥った黄金聖闘士は、考え——ある結論に至ります」

「これは『何者』かの『計略』である……と」

アイオロスの言葉を、アフロディーテが引き継ぐ……それは、彼等の見解が一致している事を示していた——

「死んだ人間が生き返る……言葉にしてみれば何とも荒唐無稽な話ですが……我々は、それが決して不可能なことではない事を知っています」

「ああ——もちろん『人間』には不可能だが……」

「君達の世界の『神』なら出来るんだね？」

二人の説明に、以前に『ある神』についてアイオロスから聞いたことのあるヘステイアは、アイオロス達の世界の神の出鱈目な力を思い出した……死者の魂に干渉して生き返えさせるなど、この世界の神には不可能なことをやらかした『非常識な存在』の話を

「——冥王ハーデス…だっけ？ その神が関わってるのかい？」

「いえ——ハーデスの『冥闘士』として……亡霊として生き返っているのであれば、我々は日の光の当たる場所には出られない筈です。それに——」

「冥王から与えられた仮初めの肉体には、冥界の鉱石で創られた鎧——『冥依』<sup>サイプリス</sup>は纏えても、それとは対極に位置する聖依——『黄金聖依』<sup>ゴールドクロス</sup>は纏えない筈なのです。肉体の感覚

で本当に生き返っているのは解ってはいましたが、一応は装着してみました……そうしたら、問題なく纏えましたよ……アイオロス、君の方はどうだった？」

「……問題無かったな——ところで、アフロディーテ……冥闘士として蘇ったか、そうでないかなど、感覚で解るものなのか？」

「ん？ ああ、そうか……君は確か『最期まで死んでいなかったか』……なら解らないか……冥王の力によって冥闘士<sup>スベクター</sup>として蘇ると小宇宙の質や感覚がほんの少しだが変質するんだ」

アフロディーテの質問に、どこか歯切れの悪い反応を返すアイオロスに、少し疑問に

思うも、特に気にすることなく質問に答えるアフロディーテ。

因みにアイオロスは、試すのを忘れていて、生き返ってから未だに黄金聖依ゴールドクロスを纏っていないので、迂闊だったと言葉を濁したのだが、質問に関しては、純粹に疑問に思つたからしたのであつて、決して話を逸らすためではない——

「まあ、死者だから当たり前と言えば当たり前かもしれないが……我が肉体からあのような『小宇宙』が発せられるのは堪えられなかつたな——蘇つたその瞬間に、自害しようか迷つたほどだぞ」

「そうか？ サガ達はそんなに違つていたように見えんかつたが……」

「他人が感じ取れるような、表面的な部分にはそれほど変わらんさ……変わるのは、小宇宙の根本——本質と言つて良い所が変質して……今思い出してもおぞましい……」

そう言つて、表情を嫌悪に染めるアフロディーテの様子を見て、アイオロスは意外そうに目を丸くする……彼がこれほどの嫌悪感を表面に出すことは珍しいことだからだ。（と言うか、君達……当たり前のように生き返えるだの、なんだの言つてるけど……もしかして、向こうでも死んだり生き返つたしてたのかい？）

ヘステイアは、目の前で常軌を疑う発言を繰り返す、異世界の勇者達を眺めながら、遠い目をしながら、半ば理解を諦めた——

. . . . .  
 . . . . .  
 . . . . .  
 . . . . .  
 . . . . .

ヘステイア・ファミリアのホームにおいて、女神と二人の黄金聖闘士が、話し合っていた同時刻——

「一度死んだ我等が、この世界で甦る——これには、間違いなく我々の世界の『神』が関わっておるでしょうな……」

「なるほどねえ……だから、如何に君といえども慎重に成らざるを得ないという事かい？」

ヘルメス・ファミリアの本拠地……その日の光の当たる縁側で、そのファミリアの主神である『ヘルメス』と異世界より来たりし『聖闘士』——【天秤座の童虎】は、奇しくもヘステイア達と同じ話題を話し合っていた。

「ええ、まあそうですね……神を相手にすると想定するなら、どれだけ慎重に行動しよ



うと、慎重過ぎるということは無いですからの」

最古の聖闘士が語るその言葉には、とてつもない重みがあるように、すぐ横で話を聞いているヘルメスは感じた。

「そして、黄金聖闘士ゴールドセイントは一人の例外も無く、歴戦の勇と呼ぶに相応しい経験を積んできておる……少なくとも迂闊な真似をするものは一人も居るまい——と、思うておったんじゃないがのう」

「オラリオに入る前に感じたという『小宇宙』の事かい？」

その言葉で童虎が思い出すのは、オラリオに入る前に感じた射手座の黄金聖闘士の小宇宙だった。

「無論、アイオロスの事ですから……ただの考え無しというのは有り得んでしようが……」

ヘルメスは、童虎のその言葉から、アイオロスへの絶大な信頼を感じとった。

「ふむ……君ほどの男がそれほど信頼する者がそんな迂闊なことをする理由か……強いと言うなら、状況を動かすためかな？」

「む？　状況を？」

「ああ」と言つてヘルメスは続ける。

「そのアイオロス君が放った小宇宙とやらは、オラリオの外に居た君にも感じられたん

だろう？　なら、他の小宇宙を感じ取れる人間も感じたんじゃないかな——敵味方問わずに」

「!?　なるほど……あの小宇宙は現在の膠着した状況を動かすために……それにしても何と強引な……随分とらしくない真似を——」

そこまで考えたところで、童虎の脳裏に『そういえばあやつはアイオリアの兄だったな』と納得する。

本人に聞かせたら『オレはあそこまで脳筋じゃないです！』という返答が返ってきてきうな結論を頭で纏めると、童虎はゆっくりと立ち上がる。

「おや？　どこへ？」

「まあ、何時までもここで、ただ飯を食らう訳にもいかんでしょう……」

ヘルメスは、その一言で童虎が自分達のもとから出ていくつもりであることを悟った。

「別に、俺としては気にしないんだけどなあ。家のファミリアの団員達も君から指導を受けて随分腕をあげたしねえ……」

その言葉は正しく、ここ数日間の間、ヘルメス・ファミリアの面々は団長であるアスファイも含めて、皆童虎から戦いの手解きを受けていた。

元々、団員の半数以上がオラリオで言うところのLv. 2以上。皆が皆、素の身体能

力だけで言うならば童虎を越えている。ましてや、ファミリアの上位の団員はL v. 3の者も少なからず存在している上に団長のアスファイ・アル・アンドロメダに至ってはL v. 4なのだ。

そして、童虎は二百数十年の間に多くの聖闘士に教えを授けた教授のスペシャリストだ。その彼から直に指導を受けた団員達は、技術一つにとつても、絹が水を吸うがごとくメキメキ上達していった。

童虎が指導した時間は、団員達にとつては実に充実した時間となった。

最初はホームに部外者を入れることに難色を示していた団員達も、今ではほぼ全員が童虎に尊敬、或いは心酔している。それこそ、ヘルメスよりも——

ヘルメスとしては、複雑な心境である。しかし、これはある意味では自業自得であった。

いつも気分で動いては、自分達に迷惑をかける奔放神と自分達に戦いとはなん足るかを示し、欠点を克服させ、より自分達の実力を引き上げて見せた老師——どちらに信頼が傾くかは言うまでもない。

「はは、確かにヘルメス様の所の若者達は中々に教えがいがありますがのう……彼等は既に『冒険者』としての『確固たる己』を持っており……である以上、冒険者でも

ない儂に教えられる事など最早在りませぬよ」

童虎をして、ヘルメス・ファミリアの団員達は鍛えがいのある教え子たちであった。しかし、これ以上冒険者ではなく、武術家であり聖闘士である自分が授けられる事などたかが知れているのだ。

冒険者としての大成を望むのならば、冒険者に師事するか、長い時間をかけて冒険者としての己を積み上げていくべきなのだ。これ以上自分のような違う道を行く人間が教えることなどありはしない——それが童虎の考えであった。

「まあ、止めはしないし、野暮なことも聞く気は無いよ」

「随分世話になりましたな……この借りは後ほど必ず——」

「止してくれよ！ 都市外では、危うく天界に送還されそうだったのを助けて貰ったばかりか、家の団員達の指導までしてもらったからね。礼を言うのは此方の方だ」

童虎が腕を組んで、一礼するとヘルメスは、慌ててそれを止めた。

「それにしても、これだけ世話になつておきながら、これで『はい、さようなら』と言うのは、流星に俺の流儀に反する……そうだ！」

ヘルメスは、さも今思い付いたかのような様子で「ルルネー!!」とホームの奥に向かって呼び掛けた。

「はーい！ なんだよヘルメス様……て、老師も……どうかしたの？」

やがて、小走りに犬人の少女——『ルルネ・ルーイ』が現れ、主神と並ぶ童虎の姿を見て困惑ぎみに訊ねる。

「童虎君。君にルルネを付けよう」

「はあっ!？」

「……ヘルメス様、流石にそれは——」

「解つてるよ。君が自分達の問題にこの世界の住人を関わらせたくないと思つてのはね。でもね、今からこの世界で『何が起ころ』にしても、この世界に住んでいる以上は、僕らも決して無関係ではいられないんだよ……」

ヘルメスの出過ぎた好意に、童虎は断りをいれようとした途端に愉快神は、普段の彼からは中々想像できない真剣な面持ちで、言葉を紡いだ。

「それに……ほら、君つてオラリオに来て日が浅いだろ？ どう動くにしても、勝手に知つてる人間は必要になるはずだよ……」

「ヘルメス様……解りました。重ね重ねお世話になります……」

（危ない危ない。このまま出ていかれると、今後は彼に接触するのも苦勞するところだ……異界の英雄『聖闘士』に、謎の『神』——こんな、面白そうな火種が近くにあるのに、何もしないなんて、それこそ俺の流儀じゃないしね）

（首輪を付けられたか……まあ、確かにこの街の事が解る者が居れば助かるのは事実

じゃが。だが、食えん神よ——悪意が無いだけマシだがのう)

ヘルメスは、童虎の直ぐ側に居れば、確実にこれから起こる異界の英雄『聖闘士』を中心とした騒動を特等席で眺められる事を確信しているが故に、ルルネという『繋がり』を残しておきたかったという事情がある。

それに、童虎には出来るだけ多くの『借り』を貸して置きたかった。義理堅い彼ならば、その恩を無下にはできまいと言う目論みもある。

唯一、気掛かりなのは、戦闘になった場合、底の知れない強さを見せる童虎の闘いに、L v. 3に過ぎないルルネが着いていけるのかというのも、最悪は戦闘の助けにならないくても別に良いとヘルメスは考える。

無論、ヘルメスとてファミリアの団員であるルルネが傷付く事になるのは本意ではないが、オラリオがキナ臭くなっている以上、L v. 3 以上の実力者を余り自分から離すのは避けたい。

それに、童虎ならば、どの様な状況になろうとも、ルルネを見捨てることはするまいとヘルメスは確信している。

一方で、童虎の方もヘルメスの思惑とその根本に在る愉快的な思考を九割方読んでいた。

伊達に二百六十年以上もの長い間を生きているわけではない。ヘルメスが以下に一

筋縄ではいかない神と言えども、表面的な考えを読み取るなど造作もないことだ。

しかし、童虎は——己の経験と直感を持ってしても、残りの一割が覗けないヘルメスの得体のしれなさに——底の見えない『神』の不気味さに警戒を強めつつも、笑みを浮かべる。

ヘルメスもまた、童虎が己の考えの大半を読んでいることは解っていた。

神と人——奔放神と最古の聖闘士は、ほぼ同時に互いが油断のできない相手であるという結論に至ったのだった。

童虎は、ヘルメスをおる程度は信用して良いが、腹の底の見えない故に信用しすぎるべきではないと判断した。

恐らく、ヘルメスは、自分が観劇する舞台が、面白くないと判断したならば、平気で引つ掻き回すぐらいはするだろうと童虎は判断したのだ。

「それでは、自分はそろそろ……」

「ああ、気をつけてくれよ」

「ヘルメス様こそ達者で……少々、この街で物騒な風雲があります故な……」

「おお！ それは、怖いな……ここは『老師』の忠告通り、表に出るのはなるべく控えておくとするよ」

言外に、余り首を突つ込むなどという忠告を、そ知らぬ顔で受け流すヘルメス——二人

は笑っていた。

それは、もう爽やかに――

「ハツハツハツハ!!」

「あれ？ 私のお前は？ あつ、待ってくれよおゝ老師い!!」

結局最後まで、状況の読めなかったルルネは、玄関に向けて足を進める童虎の背中を、慌てて追った。

アイオロスがこのオラリオの街で小宇宙の解放を繰り出して既に数日……敵も味方も、恐らくは動き始めるだろう――

「さて、儂もそろそろ動くかのう」

今、最古にして、最高の黄金聖闘士が、動き出した――





## 友との再会——美の女神フレイヤ

「……か……」

シユラは、異界の街——オラリオの一角にある墓地に足を運んでいた。

「墓地という場所には、その特性上『燐気』が溜まるものだが……この場に漂う小宇宙は明らかに異常だ」

そうだ……あの女から感じた小宇宙と何処か似ている。

漠然とだが、無関係ではないと彼の勘が告げる。

ゴルドセイント黄金聖闘士のシユラは、その経験に相応しい、幾多の戦場で培われ、研ぎ澄まされた『直感』を持つに至っている。

その勘が告げているのだ——この場には、何かが『在る』と。

「怪しげな小宇宙を辿って見れば——まさか、本当に墓地に当たるとはな……『噂』も馬鹿にはならんという事か……」

シユラは、感慨深げに呟いた——そもそも、彼が今この場にいる理由は、偶然ではない。

遡ること二日前——転移したダンジョンから、地上に出てきたシユラは、オラリオの街で、リヴェラの街でやったように情報収集をしながら暗躍していた。

シユラは、聖闘士の中では数少ない聖域の裏の仕事を担う聖闘士であった。

地上の愛と正義を護るといふ大義名分のもと、聖域と女神アテナ、そして、教皇に仇なす悪を自らの手で裁いてきた経験を持つ。

その関係で、黄金聖闘士の中では、情報収集は得意な方だ。

瞬く間に、シユラはオラリオの『裏の界限』に入り込み、裏の筋で信用の出来そうな情報屋に辺りを付けた。

「この都市で変わったことねえ……」

「ああ……ほんの数日前からだ……」

「取り敢えず——あんた都市外の人間だろう?」

見透かすかのような、そんな情報屋の男の問い掛けに、シユラは一切動揺しない。その程度のことは、その地域に長く居れば、直ぐに解ることであると理解しているからだ。

それ故に、シユラは慌てることなく「そうだ」と返答する。

対して、情報屋の男は、主導権を握れなかった為か、どこかぶつきらぼうに「何で解ったか聞かないのか?」とシユラに問い掛ける。

「必要無い……ただ、お前の見る目が正しいだけの話だからな。噂通り、良い目をしてい

る」

「またも、それに素っ気なく答えるシユラだが、そのまま終わるのではなく、少しの称賛を紡ぐ。」

「お、おう……なんだ、解ってるじゃねえか」

明らかにただ者ではないと解るシユラにそう言われる事は、情報屋の男にとつて悪い気はしなかった。

それ故に、機嫌良さそうにしながらシユラの求める情報を頭の中で選別する――

こうして、シユラはここ数日の間にオラリオで起きた出来事や不可解な事件について多くを知った。

中でも気になったのは『怪物祭』と呼ばれるこの街のガネーシャ・ファミリア主催の祭りで、タイムされた筈のモンスター達が突如暴れ出し、脱走した事件だ。

冒険者達が脱走したモンスターを討伐し、解決した案件――そこまでは、別に思うところは特に無いが、不可解なのはタイムされて無力化されている筈のモンスターが脱走し、暴れたという事だ。

モンスター達の見張りをしていた者達は、まるで魅了でもされたかのように夢うつつな表情で無力化され、更には、牢の鍵が明らかに人為的に開けられた跡があったとの事だ。

情報屋の男によれば、この犯人はオラリオに存在する二人の美の女神の内のどちらかが関与している可能性が濃厚との事だ。

一応は、冒険者の中でも、一部は魔法やスキルで他者を魅了出来る者も居るらしいが、モンスターの見張りをしていたのは、Lv. 2以上の上級冒険者だったらしく、それほどの実力者は、魅了するのは容易いことではない。その為、美の女神が最有力候補となつたらしい。

因みに、二神存在する美の女神で、この案件に関わっている可能性が高いのは——イシユタル・ファミリアの主神であるイシユタルが犯人だというのが裏の界隈の住人の見解らしい。

それだけではなく、オラリオに居るある程度事情を知る神々も同じ見解だ。

何でも、もう一柱の美の女神はその様な暴挙に出るだけの理由が皆無とのこと。

まあ、それらの背景については、正直シユラにはどうでも良かった。

気になったのは、その事件が起きた同時刻に、リストには存在しない新種と思われるモンスターが目撃されている。

特徴を聞く限りでは、彼がダンジョンの18階層で戦った女が操っていた植物型のモンスターに酷似している。

恐らく、そのモンスターはアレと同種か、かなり近い近縁種ではないかとシユラは辺

りを着けた。

そして、もう一つ――

「――死者が蘇る?」

「ああ……つつつても、これは眉唾だがなあ」

そう言う情報屋の男の顔には、胡散臭げな表情が浮かぶ。それを見て、シユラはその話を、男自身が全く信じていないことを読み取る。

「面白い話だな……続きを」

「なんだあ? こんな訳わかんねえ話が聞きてえのか?」

「ああ、自分でも酔狂だと思いが、職業柄その手の話がどうも気になる……」

「職業柄って……霊媒士でもやってんのかよ?」

男の言葉に、シユラは「違うが……余り、詮索はしないでくれ」と無愛想に返す。それを見て、情報屋の男は舌打ちをひとつすると「わりい、踏み込み過ぎたな」と素直に謝った。

そして、先程の――ここ最近、オラリオで噂になり始めている『怪異』を語り始める。「まず最初に言つとくが、俺はこの噂を全く信じちゃいねえ……この下界に住んでる全ての住民にとつちや『死』は『絶対のルール』だからだ」

彼は、人間は死んだらそこで終わりだとシユラに言った。

「たとえ、どれだけ強かろうと、どれだけ賢かろうと、命が終われば『そこ』でその人間の全てが終わるんだ。後は、墓標に記された名前と、そいつを知る人間の記憶だけが、そいつの生きた証だ」

淡々と語る情報屋の男の言葉を、シユラは黙って耳を傾ける。

そして時間が経てば、墓は風化し、そいつを知る人間も居なくなる——それが死だ。それが、男の言い分なのだろう。

だが、シユラは知っている——人が死ぬと何処に逝くのか…そして、何よりもシユラ自身も『経験』しているのだ。

「だから、俺は信じねえ……一回死んだ奴が、墓の中から蘇るなんてな……」

死についての価値観は、人それぞれ……シユラは男の言葉を否定しようとは思わなかった。

「俺自身は信じてねえし、ただの噂だと思ってる……その上で、今から話すことを聞いてくれ——」

そう前置きをして、聞かされた内容は、聖闘士としては決して無視の出来ないものであった——

こうして、シユラは二日の時間を懸けて、オラリオを探索する内に、この街の所々に

漂う奇妙な小宇宙の痕跡を感じ取った。

その複数ある小宇宙の内の一つ——最も新しいそれを追う内に、オラリオの街の南東にある大きな墓地にたどり着いた。

「さて……何か手掛かりが在ると良いのだがな」

山羊座カプリコーンの黄金聖闘士は、そう言いながら、墓地に躊躇い無く進入し、歩を進める。

シユラの小宇宙の探知能力は黄金聖闘士の中でもトップクラスだ。

それ故か、彼は半ば確信に近いものを直感していた。

（間違いなくここには『何か』が在る——鬼が出るか邪が出るか……それとも、全く別の『何か』か……）

シユラは墓地の中心——不気味な小宇宙の発生源に向けて警戒を怠ることなく進むが——ほんの数秒で、今までとは別次元の負の小宇宙がシユラに奔流のように押し寄せて来る！

「——早速か！」

シユラは、直ぐ様に背中に背負っていたパンドラボックスを下ろした。

一瞬の内に箱が光輝き、次の瞬間にはシユラの体は、普段着から、黄金に輝く山羊座の黄金聖依を纏った姿に変わっていた。

以下に黄金聖闘士が強かろうと、聖依を纏っていないければ、その肉体の耐久度は、普



通の人間と然程変わらない。

無論、小宇宙によって幾らかは水増しされるが、それだけだ。

生身の耐久力と言う話ならば、黄金聖闘士であるシユラですら、並の冒険者の基準で、

L v. 3 と同等程度なのだ。

そう言う意味で言うならば、彼以外の黄金聖闘士達も、こと『頑丈さ』という一点においては、第一級冒険者には及ばない。

だが、黄金聖依ゴールドクロス纏つていれば、話は全く違う。聖依には、装着者の小宇宙に依じてより防御力を増すという特性がある。

そして、黄金聖依は、その八十八星座ククロスの聖依の頂点に位置する。当然、防御力も聖依の中ではトップだ。

神々の戦いが繰り返されてきた神話の時代より、修復と改修を繰り返すことによつて、形を変えてきた白銀や青銅とは違い、一度として砕けること無く現代にまで伝わってきた事実が、その強さを表している。

そして、更に聖依には、装着者の小宇宙をより高める効果もあるのだ。

聖闘士が聖依を纏う——それは、その聖闘士が臨戦態勢に入ったことを意味している。

シユラは、先程自分に向かつて『当てられた』小宇宙から、確かに危険な物を感じ取つ

た。

そして、シユラは『聖劍』の宿りし右腕を振り、自分に迫り来る『何か』を両断する。それは、武器だった——所謂、西洋劍と呼ばれる直刃の劍——刀身の状態を見るに恐らくは、かなり古い。朽ち果てた武器だ。

自らに向かって飛んできた、劍を一目見ると、次には飛んできた方向を確認する。

(スケルトン……いや、ハーデスの走狗共とは違うのか?)

迫り来る『死者』の群れを前に、シユラは冷静に頭を働かせる。

(何の躊躇いもなく迫ってくる所を見るにコイツらは『捨て駒』——恐らくは、あの小宇宙を放った『何者』かが、俺を始末するために刺客として送り込んだのだろうか……)

『どっち』だ?)

果たして『この世界の者』なのか——それとも『地球の者』なのか——

(何にせよ、狙いは俺だ——)

シユラは、肉迫してくる朽ちた武器を持ち、半壊した防具を纏った死体達を『光速の劍技』を持って切り裂く——

「再生能力は無しか……しかし、切りがないな……」

死体を切り裂く感触と斬った際に聖依を通じて流れ込んできた思念に、不愉快そうに

眉をしかめる。

(首が落ちても、肉体は動き続ける。しかし、胴体を両断すれば、活動を停止する……いや、斬った場所ではなく、一定以上のダメージで『元の死体』に還るらしいな)

確かめるように、亡者を一人一人切り裂いていく——亡者に堕ちたとはいえ、かつては人間であつた者達で実験をするような行為……普通の神経をもつた『人間』ならば、間違ひなく忌避する事をシユラは、淡々とこなす。

——しかし、シユラは外道ではない。高潔な戦士だ。

それ故に、かつては戦士であつた筈の『冒険者』達の肉体と魂を解放するために——そして何よりも『彼等』の手で悲劇が引き起こされる前に——彼等の名誉が死後に貶められない様に、確実に止めを指す方法を模索する。

それが、現状でシユラに出来る最大限の敬意だ。

だが、場所が悪かつたのか、一人、また一人と確実に止めを指しているというのに、次から次へと押し寄せてくる亡者達の群れ。

そう……この場合は『墓地』——死した冒険者達の亡骸が大量に眠っているのだ。

無論、墓地に眠る遺体の数が有限である以上は、この物量にも限りがあるのだろう。

だが、迷宮都市オラリオは世界で有数の大都市であり、神々や人々の希望と野望が渦巻いている。

だからこそ、この街は、常に複数のトラブルやイザコザを抱えている。

何より、この街にはダンジョンがある——ダンジョンの中で命を落とす冒険者の数は年間で数千——その全てが、ここに在る訳ではないのだろう。

しかし、それだけの数の人間が死んでいるということが、この場では重要なのだ。

(この力が墓地の外にも効果が及ぶならば——何としても止めなければならん!!)

この死者が甦る現象が、この墓場だけではなく、『外』にも及び始めたならば、この街に惨劇が起きるだろう。

死者に蹂躪される生者達の悲鳴——

そして、それを止めるため、かつては仲間であった者達を撃たねばならない生者達の慟哭と嘆きの声——

「やらせん!!」

シユラは、脳裏に過つた最悪の想像を振り払うように、四肢の聖剣を振るう——

(汚れ仕事で身を穢すのは——)

「——自分だけで良いってか?」

決意を露にしたその時——聞き慣れた声がシユラの耳に届いた。

——【積尸氣冥界波】!!

シユラの前に群がっていた亡者達が一齐に魂を抜かれたかのように、唐突にバタバタと倒れ始めた。

「お前が妙な気を張らねえでも、こういう手合いは俺の方が手慣れてるし——」

背中に語り掛けてくるその声は、同じ時期に聖闘士となり、最も多く戦場を共に駆けた親友の一人——

「何より、向いてるだろ?」

そこには、墓石にもたれ掛かるように肘をつき、右腕の人差し指を立てている黄金聖闘士が居た——

「デスマスク!!」

「よお、久しぶりだな……」

シユラと死んだ後すらも、共に戦った戦友——『蟹座のデスマスク』は他者から見ると邪悪に見える笑みをシユラに見せた。

・  
 ・  
 ・  
 ・  
 ・  
 ・  
 ・  
 ・  
 ・  
 ・

「このまま進めば、あの『お方』が居られる部屋へ着く……後は一人で進め」  
 「——了解した」

オレは目の前で、指示をする猪人の言葉に了承を返す。

それにしても凄まじいな……バベルというのは……流石は神々の住まう場所か……豪華絢爛な造りの建物の内部を見て、そんな陳腐な感想が浮かんでくる。

まあ、神々と言っても、その神とは現在世話になっているヘステイア様やミアハ様達とは一線を画する神々——言ってしまうえば、下界での活動に成功した一部の神の事を指す。

「護衛も付けなくて良いのか？ オレは余所者だぞ？ それに、貴様等とは戦う理由もある——主神を天界送りにされても良いのか？」

そう言うと、猪人の武人である『オツタル』の横に居る小人族の『四つ子』が一斉に

殺気立つ——いや、それだけではない。

オレの後ろに居る者達からも複数の殺気がオレに向けて発せられる。

後ろにも二人、いや三人か……完璧に気配を消していたのに、殺気を漏らしたら駄目だろ……と言つても、元々後ろに張り付いているのは気付いて居たのでそこは変わらな  
いが、人数も今ので把握できた。

「挑発は止せ……俺では『どちら』も止められないぞ……」

どちらも……なるほどな。団長として、団員を止めることも一人では普通に考えて手が足りない。

ましてや、オレを力付くで止めるのは不可能とどこか本能のようなもので悟っているらしい。

つまり、今のはオレと自分の仲間達両方への忠告という訳だ。

「すまん……だが、気になったのは事実だ。お前はオレがそれをするとは思っていないのか？」

「お前がそれを実行するとは思えない……そう言えば満足か？」

目の前の猪人の武人はオレの言葉を聞き、そう返した。

「それに、万が一、お前が『我が女神』に拳を振るうというのであれば——俺は、あのお方の為にお前の前に立つだけだ」

全て覚悟の上か——

オレはオツタルの言葉からとてつもない覚悟を感じた。

もし、そうなったならオレを討つ——そう言っているようだ。

この男ならば、自分とオレの間にある実力の差が明確に解るだろうに……それでも尚、女神の為にオレの前に立ち塞がると——主神の意向を叶え、それでも『一切譲る』つもりは無いらしいな。

「なるほどな……」

これが、オラリオ最強の冒険者か——なるほど、文字通りの意味で弟子ペルとは格が違うな。

『実力』も、『意志』も、『覚悟』も、そして何よりも『練度』が違う——今のベルでは、千人居ても全く歯が立たないだろう。

「分かったその時は、相手になろう——全力でな」

だから、オレも目の前の誇り高き『戦士』にそう返した——今から行われる『会談』がどの様な結果になるのかは解らない。

女神フレイヤが何を考えているのか全く未知数だからだ。

場合によっては、彼女と——そして目の前の男達とも敵対することになるのかもしれない。



その場合、オレは黄金聖闘士ゴールドセイラントとして、まず目の前の武人オウタルと雌雄を決する——そう胸に刻んだ。

それが、オレのこの男への『敬意』だ。

その会話を最後に、オレは薄暗い通路を歩き出す——背中に視線を感じながら歩くと、一分もしない内に、一つの部屋の前にたどり着いた。

一応は神の根城だし、相手は女神だ——そう思い、最低限の礼儀マナーとして、扉をノックしようと手を伸ばすと、自動で開き始めた——

「いらっしやい……黄金の人馬さん？」

その女神の姿を視界に入れた瞬間——オレの思考は溢れでる『欲情』で埋め尽くされた——

# 墓地に満ちる狂気、聖衣に捨てられた男

散乱する武器。崩れた屍。

既に日の暮れた時間帯——ここ、オラリオの墓地にて、二人の漢は向き合う——

二人の間にある空気は、緊張感を孕みつつも、穏やかな雰囲気醸していた。

【蟹座のデスマスク】——

【山羊座のシユラ】——

時空を越え、今ここに二人の黄金聖闘士は再び再会を果たした。

「デスマスク……お前——」

「話は後にした方が良いんじゃないかねえか？ 真打ち登場……らしいぜ」

デスマスクのその言葉に、シユラは目を見開くと異様に小宇宙の高まりつつある場所に顔を向ける。

「この墓場を囲ってる『キモい小宇宙』の発生源はアレみたいだが……あれ人間か？ にしては生気なんぞ欠片も感じねえが……」

「ハアッ！」

デスマスクの考察するような眩きを聞きながら、シユラは右手に小宇宙を集め、気合  
いと共に空を裂くように降り下ろす。

遠当て——文字どおり、シユラの研ぎ澄まされた小宇宙によって【エクスカリパー聖劍】の斬撃を遠  
く離れた場所に向けて飛ばす技。

シユラの四肢に宿る聖エクスカリパー劍は、直接刃を当てれば自身と同格である黄金聖闘士の纏う  
黄金聖衣や神々の肉体すらも両断できる程の切れ味を誇る。

刃を直接当てない遠当てである以上は流石に切れ味が落ちる。しかし、斬撃に籠めら  
れたシユラの黄金の小宇宙はそこから拡散し、攻撃を放ったシユラの周辺の怨念や邪気  
が浄化されていく。まるで、負のエネルギーその物が聖劍によって断ち切られるかのよ  
うに。

しかし——攻撃の直接当たったそこから漂う醜悪な障気と小宇宙は欠片も薄れるこ  
とは無かった。

『いきなりですか………聖闘士の方々はせつかちですね……』

墓場の全体に響くような薄気味悪い声……それを聴き、二人はそれぞれ表情を変えなが

ら、対峙する。

デスマスクとシユラ——二人の黄金聖闘士の目の前で、焔の混ざった不気味な小宇宙が光と共に収束していく。

そして、その小宇宙はやがて晴れていき、人影が表れ——次の瞬間には、蒼い焔に包まれた。

『があああ?!』

墓場に響き渡るは、肉体を燃やされる苦痛と苦悶の絶叫——

「デスマスク……お前は……」

蒼い焔に燃やされながら、地面で転げ回る鎧を纏った男の様子を見て、溜め息を吐きながら戦友の方を窺うシユラ。その目には呆れの色がある気がするが、気のせいだろう。

それに対して、歪んだ笑みを向けながら蟹座の黄金聖闘士は返答する。

「【積尸気鬼蒼炎】……敵の登場シーンを邪魔せずに棒立ちとかなりえねえだろ。パーカ

!!」

蟹座の黄金聖闘士であるデスマスクは、その特性上『魂』——『魂魄』に干渉する技を持つ。

たつた今、現れた敵を包み込んだ蒼い炎もその一つ——積尸気鬼蒼炎だ。

それを知るシユラは『敵（？）』と思わしき何者か』の肉体から立ち上る蒼い炎が彼の仕業であると一目で察した。

高潔な聖闘士である黄金聖闘士の他の面々ならば、例え敵に対してであつても、眉を潜めるような唐突すぎる先制攻撃。

シユラは、聖闘士の見本足るべき黄金聖闘士であり、当然、その在り方は他の黄金聖闘士達と比べても何ら遜色のない正義を体現している。

しかし、暗殺者<sup>アサシン</sup>として聖域<sup>サンクチュアリ</sup>に仇なす者を秘密裏に討ってきた経歴を持つシユラは、正しいだけでは救える者も救えないという事を理解していた。

だからこそ、なにも言わない——ましてや、彼の目の前で絶叫を上げているのは、死者の魂を弄び、冒瀆するような事をやってのける吐き気を催す邪悪な存在。

仮に敵が正面から正々堂々と闘いを挑んできたのなら、相手が自分よりも圧倒的に弱かろうと、逆に神の如く巨大であろうとシユラもそれに全力で応える。デスマスクは知らないが……

だが、今回の敵は違う。誇りを持たず、余りにも人道に反し過ぎている。

当然ながら、同情の余地はない——

余地はないが——

「デスマスク。そいつには聞きたいことがある。始末するのは待ってくれ」

「おっと、そうだった……俺もこいつには聞かなきゃいけねえ事があつたんだつたぜ」

うっかりしてたぜ。と言いながら指をならす。すると、先程まで凄まじい勢いで燃え

上がっていた鬼蒼炎が少しずつ小さくなつていき、数秒で完全に鎮火した。

「おら、起きろ！　んで、とつと吐いて貰おうか……色々となあ」

そう言いながら、全身に焦げ目を作つて倒れている人影に蹴りを入れ、笑いながら頭を踏みつける人相の悪い男……傍目には完全にこちらが悪役である。

「うう、ぐう……き、貴様らあくツ!？」

怨みの声を上げながらも、何とかして、地面に両手をついて起き上がろうとした男の顔を止めとばかりに上に蹴り上げるデスマスク。しかもぬけぬけと「おっと、足が滑つちまつたぜ！」という言葉を入れることも忘れていない。

顔を見るに完全に煽りに行つてゐる……シユラは、看破するが、特に彼の行動を止めようとは思わなかつた。

付き合いがそれなりに長いシユラには、雰囲気から彼が本気で『怒っている』のが解るからであつた。

「許さん！ 許さんぞ、貴様ら!!」

立ち上がり、怒りで身を震わせながらこちらを憎悪の籠った瞳で睨み付けてくる細身の男……良く良く視てみればかなり整った容姿をしている。身なりも体もボロボロだが……しかし、立ち上がってきた男を視て、シユラとデスマスクは訝しげに眼を細める。「知らない間に腕が鈍ったか？ デスマスク」

「違えよ。あの『黒い鎧』……黄金聖衣程じゃねえだろうが……飾りじゃねえみたいだな」

「やはり……か」

曲がりなりにも黄金聖闘士の攻撃を受けて立ち上がってきた男の頑丈さに少し驚く二人の聖闘士。

この時、デスマスクはまさか『かなり手加減』したとはいえ、鬼蒼炎に耐えられる鎧が存在する事に驚き、頭の中で『この世界』の技術力に対しての警戒を1段階上げた。

——『さらば黄金聖闘士——次は私も纏って戦おう』

だが、シユラの脳裏を過つたのは——数日前に相対した『敵』が最後に残した言葉だった。

「はん！ ようやくこの『魔獣皮』の素晴らしい性能と我が力に畏れを——」

「まあ、大したもんだと思うぜ——鎧は」

「ああ、鬼蒼炎を受けて目立つような傷が無いとはな。驚異的だな——鎧はな……」

手離しに、称賛を送る二人の黄金聖闘士——最も素直な感想を言っただけのシユラと違い、デスマスクは鼻で笑いながらの言葉なので、どの様な意図があるのかは明らかだ。そして、その言葉を聞き、魔獣モンスターレザ皮を纏うモンスターとのハイブリット——怪クリーチャー人の男は顔に幾つもの青筋を浮かべた。

「き、貴様ら——この状況でその様な挑発を……果たして状況が解っているのか？」

怒りを堪えながら絞り出されたかのような声で怪クリーチャー人は、聖闘士に問い掛ける。

そう——彼ら三人が、如何様なやり取りをしている間にも、彼等の周囲の様子は変わっていた。

「こんな雑魚共で俺等を囲もうと意味なんか無えだろ……馬鹿なのか？」

「これ以上余計な挑発をするなデスマスク……まあ、その通りだが……」

そうだ……既に彼等二人の周囲は、無数の屍達で囲まれていた。

しかし、二人はそれに全く脅威を感じていない。何故ならば、死者は所詮動くだけの死体に過ぎないのだ。

光速で動き、人智を越えた実力を持つ二人の黄金聖闘士から見れば、この程度の相手は文字通りの意味で一山幾らの雑魚故に——ましてや、此処に居るのは魂の扱いに關しては絶大な力を持つ黄金聖闘士の中でも並ぶ者の居ない蟹座キャンサーなのだ。



シユラ一人ならば、死体でも数を揃えれば『相性』的に時間稼ぎぐらい出来たかもしれないが、デスマスクにはそれさえ出来ない。

デスマスクがその気になれば直ぐにでも、墓場に存在してる死者達を再び眠らせることすら可能なのだ。

それをしないのは、結局の処、目の前の怪人が死体を操る能力があり、そうである以上『イタチごっこ』にしなければならないからだ。

「ハハ、これは驚いたな！ たかが聖闘士如きが二人程度で本気で私に勝つ気で居るらしいな——『彼女』と『あのお方』に力と肉体を与えられたこの私にな!!」

嘲笑と共に放たれた言葉。

しかし——

「ハア？ 二人？ 何言ってるんだテメエ——」

その嘲笑は、侮蔑すら感じさせるデスマスクの返答に、掻き消される。

「聖闘士の闘いに基本『多対一』は無い——テメエ如き俺一人で十分だ」

「………何い？」

「つー訳でシユラ、お前は手え出すなよ」

「それは構わんがデスマスク——」

デスマスクの言葉に、シユラは特に思う所がなかったのか、頷く。

それに、シユラの中の合理的な思考が冷静に働き、相性的にも、心情的にも自分よりもデスマスクの方が相手としては相応しいと判断して、大人しく引き下がるが——聖闘士としては無視できない問題に切り込む。

「お前、<sup>クロス</sup>聖衣はどうした？」

そう——明確に人類と自分達に害意と敵意のある敵と相対している<sup>キャンサー</sup>蟹座の黄金聖闘士である彼の肉体は、ただの黒いコートを身に付けているだけで、<sup>キャンサー</sup>聖闘士の象徴とも言うべき蟹座聖依は何処にも見当たらなかった。

「……」

「……」

「……」

墓場を沈黙による静寂が支配する——

「……すね……やがんだよ」

「——なんだと？」

デスマスクの小声で呟かれた言葉が信じられず、シユラは聞き返す——

「だからよ——あの聖衣<sup>やろう</sup>！ まだ拗ねてやがんだよ!! くっそ!! ちよつと龍座<sup>ドラゴン</sup>の小僧を苛めたぐらいでへソ曲げやがって!! そんなんでご主人様を拒否るとかあり得ねーだろ!!」

あのポンコツが! と叫ぶ悪友<sup>デスマスク</sup>を見詰める親友<sup>シユラ</sup>の眼は水瓶座<sup>アケリアス</sup>の黄金聖闘士も真つ青な程の冷たさであった。

「デスマスク……お前は……本当に」

山羊座<sup>カプリコーン</sup>は悟った——

デスマスクがまだ蟹座<sup>キャンサー</sup>聖衣に赦されて居ないことを——

そして、その原因が完全に身から出た錆であることを——

無論、シユラとてデスマスクが完全に蟹座<sup>キャンサー</sup>に見捨てられたのではないことは解っている。

自分と彼が三度目の死を迎えた『嘆きの壁』の前では、確かに黄金聖闘士としての姿で自分達と最強の聖闘士に恥じない力で嘆きの壁に大穴を開けて見せたのだ。

だが、やはりそれだけでは蟹座<sup>キャンサー</sup>聖衣は、龍座の『紫龍』に対してやらかした数々の外道悪行を精算するつもりは無いらしい。

「まあ、お前の気持ちは判らんでもないが……」

シユラもまた十二宮で、同じく紫龍に破れ、彼を認めたのだ……それ故に、デスマス

クが感じたのであろう紫龍という男が持つ可能性を理解している。

そうでなければ、聖剣を託すような真似はしない。

デスマスクもまた紫龍に色々と感じるものがあつたからこそ、態々試練を与えるようにいたぶるような真似をしたのだろう。

なんせ、この男、敵に対してはシユラ以上に——というか、聖闘士でも一二を争うぐらいの冷酷さを持つのだ。おまけに他の黄金聖闘士にありがちな、自分自身の力に絶対の自信が在る故の油断や慢心とも無縁の男である。

紫龍が本当に悪であり、敵であると判断したのであれば手加減など一切せずに「積尸気冥界波」で魂を肉体から離して、その上で「鬼蒼炎」でその魂を燃やし尽くす位のこととは確実にやる。

そうなつたら、当時まだ『第七感』<sup>セブンスセンス</sup>に目覚めてすらいない紫龍を含めた青銅聖闘士達<sup>ブロンズセイラント</sup>など、巨蟹宮を通る処か、あの場で確実に死んでいた。

恐らくデスマスクは彼なりのやり方で紫龍を試したのだろう——それこそ、聖依に見捨てられるぐらい苛烈なやり方で……

「……ま、この場ではそんなに関係無え……うん、問題ねえな……聖依はハンデつて事で」

「お前がそれで良いなら構わんが……敵を甘く見ない方が良い」



「物を聞くのに肉体はいらねえな……消えるのはテメエだ——魂だけ置いてけ三下が！」

山羊座カプリコーンが佇む前で蟹座キャncerが力を発揮する為に、その身から黄金の小宇宙を燃やす——オラリオの墓地にて、かつて聖衣に見捨てられた男が聖衣を纏わぬままに、再び聖闘士としての力を振るおうとしていた。

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

フレイヤ・ファミリアの本拠地ホーム——その最奥の間である主神であるフレイヤの私室——そこは、広さと内装の豪華さに反して非常に簡素な造りをしていた。

そこには、それほど大きくない幾つかの本棚と豪華で大きな作りのベッドが在るだけで、他の物は驚くほど少ない。

薄暗い部屋の中で、二つの人影が向き合い対峙していた。

「ハア……ハア……」

だが、片方は息遣いを荒くしながら、睨み付けるような眼光で目の前の女神を見詰めていた——そして、睨み付けられている本人——否、本神はその余りにも美しい相貌を驚いたように目を丸くしていた。

やがて、何を思ったかクスリと万人を——神すらも魅了するような美貌で微笑む。

その体から発せられる気品と圧倒的な色香……それに反するようにその微笑みは子供のようにあどけない。

その笑みを見て、それを向けられている男は、場違いにも綺麗だなと感じた。

「あら、女神の部屋を血で汚すなんて……少し無粋でなくて？」

「それは申し訳無い、が——それならば、少しはその『魅了』<sup>チャーム</sup>を押さえて欲しいものだが？」

男——<sup>サジタリアス</sup>【射手座のアイオロス】は、自らの口から流れる血を腕で拭う。

「ごめんなさいね。私の魅了<sup>これ</sup>は、美の女神としての本質に根付いた物だもの……：自分の意思でどうこう出来るものではないわ」

「そうだろうな……：だが、消すのは無理でも弱めることぐらいならば出来るだろう。全く制御の効かない物ではないと見るが……：如何に？」

「ふふ」

アイオロスの言葉に、心の底から楽しくて仕方がないような笑いを漏らす美の女神『フレイヤ』。

(少し魅了の力が減ったな……やはりある程度なら制御可能か——美しいが……それ以上に不気味な神だ。全く内心が読めん)

アイオロスの胸中は穏やかではなかった。

かつて相對したどの神々とも、その在り方その物がフレイヤは違つて見える。アイオロスには、フレイヤが一種の怪物のように見えてしまつていた。

「まさか、私を前にして最初にとつた行動が自傷だなんて……本当に面白いわね」

どの口がほざくか——と、アイオロスは内心で吐き捨てた。アイオロスは、フレイヤと相對した時、一番最初にしたことは——自分自身の頬に音速の拳を叩き付ける事だった。

単純な話だ——美の女神の全力の魅了を振り払うには、最強の聖闘士であるアイオロスをして、そのぐらいの事をしなければならなかったのだ。

唇や舌を噛む程度では抗えない。万が一の戦闘を考えると手足や体に傷を付けるわけにもいかない——ならばと一瞬の判断で自身の頬を比較的全力で殴り飛ばしたのだ。

その際に唇が切れてしまい、その血が床のカーペットを少し汚してしまつたのだっ



た。

「それで……一体なんの用なのかしら？ 態々あなたの方から訪ねてきてくれるなんて……というか良く場所が——」

「腹の探り合いは無しにしよう……というか、あれほど露骨な視線を寄越しておいて良  
く言うな」

「やはり……貴方は私を感じ取っていたのね？」

フレイヤの言葉に無言で是と返すアイオロス——

「オレが貴女に求めるのは——『取引』だ」

「取引？」

「ああ……オレに——否、オレ達に『協力』して欲しい——女神フレイヤ」

これが美貌の女神と射手座サジタリアスの初めての邂逅だった——

## 仮名

「やはり気持ちの良い物ではないな——」

【ガアアああ!!】

それは、苦しみを訴える声なのか——、或いは二度目の生を与えられたにも関わらず、それを情け容赦なく奪われた者達の悲哀の声だったのかもしれない。

獣のような雄叫びを上げながら崩れ落ちていく、腐った嘗て英雄であった骸達——それらを見ながらシユラの口から漏れたのはそんな言葉だった。

だが、この光景から目を離すことはできない。

彼等に二度目の死を与えた自分達がそれから目を背けることなど赦される筈がないのだ。

「——で？　死体は団体で逝おともだちつちまった訳だが……まだやんのか？」

墓場が燃える——燃え上がる。

まるで『死』を、或いは『生』すらも否定するように——夕刻を過ぎ、夜の闇に包まれたオラリオの中で、墓場そとだけは闇を拒絶していた。

全ての亡者達を包み込むように墓場全体に拡がる蒼い炎——積尸気鬼蒼炎。

夜の闇すらも燃やしているかのように、鬼蒼炎の蒼い炎は墓場を照らしていたのだ。

「ぐッ」

既に蒼い炎に包まれ、足の踏み場もない筈の場所から、ザツと足音が聞こえてくる。

男——モンスターと人の異種混合ハイブリットである怪人クリーチャーは、目の前で燃え盛る炎の中を悠然と歩く男を観て歯噛みする。

——強すぎる。

魂を、或いは怨念を燃料にして燃え上がる蒼い焰——それを弄ぶかのように操る青年に対して、怪人クリーチャーは内心で呟いた。

侮っていたつもりはなかった——だが、彼も、そして彼の同胞たる怪人クリーチャー達も、何処かで慢心していた。

魔石を喰らえば喰らうほどより強くなれるモンスターと回復能力、人としての思考と知識——それぞれの力を良いとこ取りで併せ持ち、尚且つ『彼』から与えられた小宇宙コスモの力に、モンスターの魔石を核にして造られた小宇宙コスモを増幅させる鎧——

